

人 と こ と ば

—— その関わりと研究のあゆみ

山 口 巖

Der Mensch und die Sprache

L'homme et la langue

Человек и язык

Homo et lingua

Ἵ ἄνθρωπος καὶ ἡ γλῶσσα



目 次

はじめに	1
第一章 ことばの研究 I 古典期 ことばとはなにか	4
第二章 ことばの研究 II ルネッサンス期 人類共通の普遍的カテゴリーとその結合法則を求めて	12
第三章 ことばの研究 III 啓蒙期 言語世界の拡大と未知の言語との遭遇	26
第四章 ことばの研究 IV 19 世紀言語学 比較言語学の黎明	32
第五章 ことばの研究 V 青年文法学派と比較言語学	40
第六章 ことばの研究 VI 印欧語のなかま	52
第七章 ことばの研究 VII 一般言語学とフンボルト	59
第八章 ことばの研究 VIII 20 世紀構造主義の先駆 フェルディナン・ド・ソシュール	70
第九章 ことばの研究 IX ソシュールの直弟子たち	82
第十章 ことばの研究 X ロシア一般言語学 ボドゥエン・デ・クルテネとポテブニャ	95
第十一章 構造言語学の主な流派 I アメリカ記述言語学	101
第十二章 構造言語学の主な流派 II プラーク機能主義言語学	109
第十三章 構造言語学の主な流派 III 北欧学派と公理論的言語学	120
第十四章 北欧学派 言語のオートマトンの導出とメタ理論	127
第十五章 生成文法と変形文法の挫折 チョムスキー	137
第十六章 内容的類型学の発展	156
補遺 言語の基本的制約について	167
関係文献	173
付 録 A	i(157)
付 録 B	iv(160)

本書を發表することにした経緯

これは2002年度から2005年度に鳥取環境大学において講義に用いた講義ノートで、大まかな言語研究の歴史について述べたものです。始めはプリントをその都度講義の前に配っていましたが、受講者の便宜を慮ばかってテキストの形で印刷しました、しかし講義に間に合わせるために急いだこともあって、講義の過程で色々な誤植があることが判明したので、その都度口頭でも訂正をしてきましたし、部分的には正誤表を作りもしました。そうこうしているうちに、その他にも私の思い違いによる大きな誤りも存在していることが分ってきました。その中でも特に変形文法に関する箇所がそれに当たります。また叙述にも平明さが欠けていたり、もう少し敷衍した叙述が必要であると思われる場所もまた見つかりました。ここに改めて示すのは以上の問題点を改訂し、いくらか書き換えたものです。これを偶々読む機会のある人々にとって、もし何らかの御役に立つことがあれば、望外の俸せです。

はじめに

§1 私たちは「ことば」を日常何気なく使っており、ことばというものは単なる伝達のための手段だと思っています。ですからことばそのものを対象にして考えるということには、なれていないと思いますし、またそんなことをして何の役に立つのだろうと思うに違いありません。「ことば」あるいは「言語」を扱う学問としては「言語学」がありますが、おそらくこれがどんな内容のものか、知らない人が大多数だと思います。

しかし「言語」を含む広い意味の「ことば」の研究は、文学だけではなく、極めて広い分野で行われていて、しかもその成果は、実にさまざまなおところに応用されて来ています。それは「ことば」というものが、人間の活動のあらゆる分野で無くてはならないものだということによっています。

§2 身近なところでいえば、たとえば諸君が喉が渴いたな、と思って自販機でコーラを買うとします。このときにもことばが必要になります。自販機に諸君が何を買いたいのかわからせる必要があるからです。ただこのばあい単語に当るのはコイン及びばあいによってはボタンで、これで自販機に分る文を作る必要があります。自販機が「コーラが欲しいのだな」と理解したとき、初めてコーラがぼとんと出てくるわけです。従ってここでも「単語」から「文」を作るきまり、つまり文法が必要になるのです。そしてどういう「文」をこの自販機が理解できるかという「文」の集まり(集合)もあらかじめ定義されていなければなりません。自販機が自分の理解できる「文」と一致したとき、それは必要な反応を示すわけです。

このような言語は、数理言語学という分野が受け持っています。それだけでなく、数式そのものも一つの言語だと見ることができます。ここでは式というのは「文」にあたり、その変形規則は文法あたります。そして「単語」にあたるのは記号や数の集まりになります。たとえば簡単な例で $4 \times (5 + 6)$ というのは一つの式ですが、これを計算すると答えは 44 になります。すなわち $4 \times (5 + 6) = 44$ です。この 44 というのが左辺にある「文」の意味になります。この計算をするとき、私たちはまず、カッコの中の $5 + 6$ を計算して 11 を求め、その後で 4×11 として求める結果 44 を得ることもできますが、 $4 \times 5 + 4 \times 6$ と

いう風に計算することもできます。これは $4 \times (5+6) = 4 \times 5 + 4 \times 6$ という変形ができるということを意味しています。ここでも $=$ は「意味が同じ」ということを意味しています。このような「意味が同じ」というのは、セマンティックス (意味論) といいます。さらにもう少し一般的に言えば、 $a \times (b+c) = ab+ac$ がいつも成り立つということを意味しています。ちょっと乱暴ですが *A book is here.* という文は *Here is a book.* と書き変えても基本的な意味は変わらないということと同じことになります。つまり $a \times (b+c) = ab+ac$ というのは、左辺の形を右辺の形に書き換えても「意味が同じ」だということなのです。a, b, c の値が何であっても、左辺の形を常に右辺の形に書き換えることができるとき、これはシンタクシス syntax (もともと文章論/統語論) に属することだといわれます。これに対して例えば $x=5$ というように、あるばあいに限って等号が成立するようなものはセマンティクス semantics (意味論) に属することがらだとされます。

ことばや単語に意味があるように数式にも「意味」があります。 $=$ が「同じ」という意味を持つというのはすでにいいましたが、たとえば $a \times b$ というばあいの \times という記号は、 a を「 b 回足す」ことを意味しているということになります。

§3 更に最近では遺伝子の研究が盛んになって人間のいろいろな遺伝子を「解読」するという作業が各国で進められています。それによれば、アデニン (A), チミン (T), グアニン (G), シトシン (C) の4個の「核酸塩基」というものの配列が、順序も考えて AT, TA, GC, CG という4種類の結合を作り、その配列の仕方でも遺伝情報を伝えているといえます。百科事典によれば、「仮に一つの遺伝子が平均 600 個の塩基対を含んでいるとすると、 $4^{600} = 1.72 \times 10^{361}$ 種類の遺伝子が存在する……一見、簡単にみえる DNA の構造の中にかくさんの情報が入られるかがこれからもわかるであろう」[51, II, pp.344 & seq.]¹ ということになります。そうすればこれもまた一つの言語と考える

¹ここで4個の塩基は単語にあたり、これがいろいろな配列をするとすると、配列が文にあたることはすぐ分ります。数学に興味のある人のために念のため説明すれば、4個の単語が600個集まって文を作るとすると、これらの単語(塩基)が重複を許すとすれば、一番目にくる塩基は4通り、2番目に来る塩基も4通りあります。したがって二つの塩基からなるばあいには 4×4 個の配列があることになります。これが600つながっているとすれば 4^{600} 。これを x と置くと、 $\log x = 600 \log 4 = 0.602 \times 600 = 361.2359$ 。対数が0.2359となるの

ことができます。それだからこそ、遺伝子は非常に多くの遺伝情報を子孫に伝えることができるようになっているのです。

§4 このように身の回りのさまざまなものがそれぞれの「言語」によってその行動を律しています。こういうさまざまな言語に対して日本語とか英語とかいうのは、これらの広い意味の「言語」から区別して「自然言語」と呼ばれますが、これらも本質的に異なったものではなく、自然言語も広い意味の言語の一部、しかも重要な一部を構成しているのです。そしてこのような私たちが使っている言語が結局は私たちの日常を含めた行動を規定しているのです。従って最近の科学の進歩の基底にはこういった言語の問題が常に存在し、科学の進歩につれて言語に対する考え方も、常に進化しているというのが現状だと思えます。

さて、ここで述べようとしているのは主に自然言語を対象にしたものですが、同時に広い意味での言語の見方も、常に意識していたいと思っています。この問題については、以前鳥取大学で行った講義の冒頭において述べました。これについてはこの講義の最後に「言語の基本的な制約について」という題で述べてあります。参照してください。

は $10^{0.2359\dots} = 1.7214722\dots$ です。従って $x \doteq 1.7214 \times 10^{361}$ 通りの配列、すなわち「文」ができることになります。これだけ膨大な数の文があれば、非常に大きな情報を伝えることができるはずですが、順列を学んだ人ならば、この配列は重複順列ですから、 ${}_4P_{600} = 4^{600}$ であることは直ぐに分るでしょう。

第一章

ことばの研究 I 古典期

ことばとは何か

1. アリストテレスまで

§5 言語についての関心は、非常に古い時代からありました。最も古いものはギリシアのヘーラクレイトス (Hērakleitos Ἡράκλειτος BC 540 頃-480 頃) とデーモクリトス (Dēmókritos Δημόκριτος BC 460 頃-370) に遡る論争であったといわれています。これはものの名前についてのもので、ヘーラクレイトスは、名前はそれが表すものの本質と切っても切れない関係を持っていると主張したそうです。これに対してデーモクリトスは、名前とそれが表しているものとの関係は、もともと何の関係もなく、単なる約束ごとに過ぎないと考えました。

§6 はじめのヘーラクレイトスの立場を「ピュセイ」*physei* の立場といい、後のデーモクリトスの立場を「テセイ」*thesei* の立場といいます。*physei* というのは *physis* 「本性」(cf. *physics* 「物理学」< 「ものの理」< 「ものの本来の性質」) を意味するものの与格で「本性によって」というほどの意味を持っています。

これに対して「テセイ」*thesei* は *thesis* 「置かれたもの」、「約束ごと」(cf. *thesis* 「題目」、「証明されていない命題」、「テーゼ」、「論題」< 「置かれたもの」) の与格の形で、「約束事によって」ということを意味しています。

もしものの名前とそれが指し示すものとの関係が、本然的な、^{ほんぜん}「ピュシス」の関係であれば、名前を分析すれば、ものの本質が明らかになるでしょう。

§7 この中間の立場をとったのがプラトーン (Plátōn Πλάτων BC 427-347) だとされています。彼は対話編「クラチュロス」で、ソークラテース (Sōkrátēs Σωκράτης BC 469 頃-399)、ヘルモゲネース (Hermogénēs Ἑρμογένης) とクラチュロス (Kratýlos Κρατύλος) を登場させ、この問題を論じています。作者プラトーンは、ソークラテースの口を借りて自分の考えを述べるのですが、

どちらの立場をとるのかももう一つははっきりしません。しかし名前とものとの間に一定の本質的関係を持っているものもあると考えているようです。

これはたとえば英語の *crow*, サンスクリット(梵語)の *kāka* 「からす」のように、元々鳴き声を模したもののばあいにはしばしば見られます。このように、古典期における言語への興味は、まず哲学的な問題として現れました。

§8 プラトーンに続く大学者アリストテレース (Aristotélēs Ἀριστοτέλης BC 384-322) は、非常に論理的な性向の強い人であったと思われませんが、彼は言語に対してもできるだけ論理的な立場から接しようとしたと思われま

す。むしろ彼にとっては言語と論理が一体のものであったとさえ、思われます。彼は文の部分がいくつかの種類に分れることを見出し、「名辞」(ónoma ὄνομα), 述辞 (rhēma ῥῆμα), 「結合辞」(sýndesmos σύνδεσμος) の区別を立てます。「名辞」というのは何かを名指すものであり、「述辞」というのはそれについて何かを述べるものです。従って「名辞」は名詞の原形、「述辞」は「述語」の原形を指していました。

こういうようにして最初の「品詞」の区別が生れたのです。その外の形は、皆この基本形の変化したものであると見なされ、後にストア派の人々によってプトーシス (ptōsis πτώσις) という名が与えられました。

2. ストア派

§9 ストア派に属するクリューシッポス (Chrýsippus Χρυσίππος BC 280 頃?-209 頃?) は、他のストア派の哲学者と同じく、語というものは「ものが発する音を表すものであって、ものが人の心の中に呼び起す印象を表す」のだと考えていました [46, p.14]. このことから、ストア派の学者たちがピュセイの立場に立っていたことが分ります。

もしこの立場が正しいとすれば、ものの本質は語に直接に反映していることとなりますから、語を分析すればもの本質が分ることとなります。この本質的なものを彼らは「エチュモン」(étymon ἔτυμον) と名付けました。「エチュモン」というのは *étymos* ἔτυμος 「真実の」、「本当の」という形容詞の中性形で、「本当のもの」、「真実のもの」を意味していました。このエチュモンを探す学問は *etymo-logía* ἔτυμολογία といいました。

格」をしばしば「斜格」ということがあります。

§13 属格(英語の所有格に当る)は、種類の格(*hē geniké ḥi γενική*)と呼ばれました。「どの種類に属しているかを表す」というのが、そのもとの意味だったと思います。

ところがこの *gen-* という語根には「生む」(*cf. gene*) という意味もありましたから、ラテンの文法家たちは誤訳して *genetivus* 「生む格」としてしまいました。ロシア文法もこれを *roditel'nyj padézh* *родительный падеж*, すなわち「生む人の格」としました。日本のロシア文法はさらにこれを「生格」としています。

さらに日本語で「～に」を表す与格は「与える格」(*hē dotiké ḥi δοτική*) という名を与えられました。ラテン文法家もこれを受けて同じ意味の *dativus* という名でこれを訳しました。英語でも同じく *dative* といいます。

§14 英語の目的語に当るのは「対格」ですが、これは「求められる格」を意味する *hē aitiatiké ḥi αἰτιατική* と呼ばれました。

これは「乞う、求める」などを意味する *aitéomai αἰτέομαι* という動詞から作られたものですが、形がこれに似ているものとして *aitía αἰτία* 「責任、罪」を意味する名詞があり、これから作られる動詞 *aitiázomai αἰτιάζομαι* 「罪ありとする、起訴する」という動詞がありました。このためにラテンの文法家は誤って「罪ありとする、起訴する」を意味する動詞 *accusō* (*cf. E. accuse*) から「罪ありとする格」*accusativus* と訳してしまいました¹。

英語もそのままこの格を *accusative* としています。ついでに言えば、あり

¹サンスクリットでは対格のことを *kárman* といいます。これは *kr-* 「為す、行う」という語根から作られたもので「為されたもの」というほどの意味を持っています。従ってこれは仏教では、前世で為された行為の結果などという意味で、「業、宿業」を表すこともあります。梵語学では文法用語としても比較的広い意味に用いられ、他動詞の目的語だけでなく、受動態の主語をも指していたといわれます。日本における伝統的な梵語学では、中国語を經由して対格を「業格」と呼んでいたようです。榊亮三郎『詳解梵語学』には「格には主、業、具、爲、從、屬、於、呼の八種あり、所謂八轉聲是なり」とあります [62, p.23]。ここでいう「業」は「罪ありとする」という系統の意味の外に、もっと広く「結果の意義」をも含んだ用語だと思われます。結果の意義というのは、例えば「着物を縫う」をいうとき、「布を縫った結果着物ができる」ことを意味している、というような場合です。

がたいことに日本語は「罪格」ではなく「対格」と訳しています。

3. アレキサンドリア学派

§15 ギリシアの文法学はエジプト、小アジアのペルガモン、ロードス島を中心とするヘレニズム時代 (BC 334-31) に最も盛んな時を迎えました。

この時代にはホメーロスの叙事詩や、アイスキュロス (Aischýlos Αἰσχύλος BC 525-456)、ソフォクレス (Sophoklēs Σοφοκλῆς BC 495 頃?-406?) などの古典期の文学がわかりにくくなっていましたので、その解釈や注釈が盛んに行われ、その結果として文献学的な研究が発達しました。この時代に現代につながる体系的な文法学の原形ができあがったとさえ、いうことができます。

この時期の代表的な文法家として著名なのはアリストアルコス (Aristárchos Ἀριστάρχος BC 215-143)、ディオニュシオス・トラークス (Dionýsios Thrāx Διονύσιος Θρᾶξ BC 170-90) などです。

名詞 (onoma ὄνομα) の中には狭い意味での

8 品 詞			
品詞	ギリシア語		ラテン語
名詞	ónoma	ὄνομα	nomen
動詞	rhēma	ῥῆμα	verbum
分詞	metokhé	μετοχή	participium
冠詞	áarthron	ἄρθρον	articulus
代名詞	antōnymía	ἀντωνυμία	pronomen
前置詞	próthesis	πρόθεσις	praepositio
副詞	epírrēma	ἐπίρρημα	adverbium
接続詞	sýndesmos	σύνδεσμος	coniunctio

名詞だけでなく、形容詞も含まれていました。また現在では動詞の変化形の一つと考えられている分詞も独立した品詞と考えられているなど、現在の品詞の区別とは色々異なったところがありますが、とにかく八品詞という考え方はこのときに遡るのです (cf. E. Eight parts of speech).

特にディオニュシオス・トラークス、すなわちトラキアのディオニュシオスによって書かれた『文法術』 (hē téchnē grammatiké ἡ τέχνη γραμματική) は、その後長いあいだ文法の規範として尊重されました。アリストアルコスは品詞としてはじめて名詞、動詞、分詞、冠詞、代名詞、前置詞、副詞、接続

詞の8個を立てました (cf. 表「8品詞」).

4. ローマの言語研究

§16 ローマの言語研究は余り見るべきものがありません。これはローマ人が理論的というよりも実際の性質を持っていたからだと思います。これはギリシア文化とローマ文化の際だった相違だといわれています。言語研究もその例外ではなかったのでしょう。

ローマの人々が、言語そのものの研究というよりは、文体についてより多く興味を抱いたというのも、このことと無関係ではないと思われます。といいますのは、ローマにおいては政治家は何よりも元老院において、あるいはローマの市民に向かって人々を説得できるような演説ができるという資質を持っていなければならなかったのです。

クインティリアヌス (Marcus Fabius Quintiliānus AD 1世紀) という学者は『雄弁術教程』(*Institutio oratoria*) を書きました。

§17 さらに西暦4世紀頃にはアエリウス・ドーナートゥス (Aelius Dōnātus) が膨大な『文法術』*Ars grammatica* を書きました。これにはもう一つの種類があり「簡略本」*Ars grammatica minor* と呼ばれていました。

このドーナートゥスの文法は西欧の中世を通じて大きな影響を与えました。

このようにドーナートゥスの文法は極めて強い影響をもっていましたから、英語はもとより、ドイツ語にしてもフランス語にしても、それぞれの国の言葉に特有の文法を正しく認識するためには、このドーナートゥスの影響を克服することがまず必要でした。

5. 中世ヨーロッパ

§18 中世というのは歴史学の上でいつの時期かといえば、ゲルマン民族の傭兵隊長オドアケル (Odoacer 434?-493) によって476年にローマが占領されたときから、1492年、コロンブス (Christopher Columbus/Cristforo Colombo/Cristóbal Colón 1451?-1506) がアメリカを発見したときまでの間ということになっているようです²。

²ローマ帝国の滅亡の経緯については、[64] 参照。

キリスト教の普及によって西ヨーロッパの国々では、カトリック教会の公用語であったラテン語が学ばれるようになりました。この時代には「文法」*grammatica* といえは「ラテン文法」のことに外なりませんでした。そしてラテン語のカテゴリーは論理的なカテゴリーと同じものと考えられました。

人々はラテン語を学ぶ教科書として、先に述べたドーナートゥスや、プリスキアーヌス (*Prisciānus* AD 5 世紀-6 世紀) の文法を用いましたが、この中でもとりわけドーナートゥスの文法が一般的でした。このため既に言いましたように、「文法」や「ラテン文法」の代りに「ドーナートゥス」ということばが、普通名詞のように使われさえしたのです。

§19 この時代にはヨーロッパの国々の人々はさまざまな言語を用いていましたから、ラテン語は学問上の共通のことばと考えられていました。

そこで人々はちょうど私たちの祖先が中国語を「漢文」として取り入れたように、文字と意味を学ぶことに専念し、発音については特に注意を払いませんでした。このためラテン語はそれぞれの国の言語の慣用に従って発音されるようになり、文字で書かなければお互いに意志を伝えることが難しくなりました。

たとえば *Cicero* は英語では [sɪsəˈrɒ] と発音されますが、フランス語では *Cicéron* と書かれ、[sɪsɛˈrɔ̃] と発音されます。またドイツ語では *Cicero* [tsiːtseroː] といった具合です。念のためいえば、日本ではこれは [kikero] と発音されますが、これは「学者(ぶった?) 発音」*pronuntiatio scholastica* といわれているもので、古典期にラテン語が実際に話されていたと考えられる発音ということになっています。

これは日本でラテン語が学ばれるようになったのが明治期以降であったことによって、ヨーロッパ諸国のように、すでにできていた伝統がなく、これにとらわれる必要がなかったためでした。

§20 中世の後期、11 世紀から 12 世紀になりますと、スコラ哲学者たちの間で、ことばの問題をめぐる激しい論争が起りました。「実念論」*realism(us)* と「唯名論」*nominalism(us)* です。実念論者を代表したのはカンタベリーの僧正アンセルムス (*Anselmus* 1033-1109) で、唯名論を代表するのは、ロス

ケリーヌス (Johannes Roscelinus 1050 頃-1121), 並びに比較的穏健な立場をとったアベラール (Pierre Abélard 1079-1142) であったといわれています。アンセルムスは現実に存在するものは普遍的な概念だけであって、この概念に対応するものや現象はこの普遍概念の不完全な写しに過ぎないと主張したといわれます。

§21 これに対してロスケリーヌスは、現実に存在するのは個別的な特徴を備えた具体的な事物であり、普遍概念というのはこれらの具体的な事物から思惟が導き出したものであって、事物から独立に存在するものでもなく、事物の個別的な特徴を反映してもいない、と主張しました⁴。

アベラールは現実に存在しているのは具体的な事物であるが、それは普遍概念の基礎となるものであり、普遍概念は独立に存在するものではなくて具体的な事物から思惟が導き出すものであって、その性質を反映しているとしました [46, p.21]。

明らかなように、これは古典期のテセイ説とピュセイ説に源を発している論争でありました。

⁴神学的には神は三つの人格 *persona* が一つになったものだとする三位一体説に対して、彼はそれは三つの物質の混交物に過ぎない、と主張したといわれます。彼は 1092 年、教会によって異端とされました [10]。

第二章

ことばの研究Ⅱ ルネッサンス期

人類共通の普遍的カテゴリーとその結合法則を求めて

1. ルネッサンス期の特徴

§22 15世紀から18世紀という時代は近代といわれますが、これは資本主義が封建主義を克服することによって始まりました。この時期を特徴づけるのが、ルネッサンス、宗教改革、啓蒙主義です。中世を支配した封建的な教会の文化に代って、古典期に遡る世俗的な文化が支配的になりました。このことと関連して宗教改革が起り、法王に象徴される教会の権力を打破してヨーロッパの国々の近代国家としての力が発展する基を開きました。

さらにこれに伴って人々の思考がやがて神学的なものから解放され、合理主義的な思考、科学への関心を呼び起すようになってきました。

このようにしていろいろな発見をもたらしたコロンブス(9頁参照)、ガリレイ(Galileo Galilei 1564-1642)¹、コペルニクス(Nicolaus Copernicus, Mikołaj Kopernik 1473-1543)²、ニュートン(Isaac Newton, Sir, 1642-1727)³、デカルト(René Descartes, 1596-1650)⁴、ライプニッツ(Gottfried Wilhelm Leibnitz, Freiherr von, 1646-1716)⁵のような人々が現れてきました。

§23 中世には、教会およびキリスト教神学が人々の生活の隅々まで支配していました。

ルネッサンスの時代になって、世俗的な生活や思想が教会の規範から相対的に独立することに伴って、人々は、それまでキリスト教以前の異教の文化だということで遠ざけられていた、ギリシア・ローマの文物に親しむように

¹地動説を提唱。手作りの望遠鏡によって月のクレーター、太陽の黒点を初めて観測し、ガリレオの衛星として有名な木星の四つの衛星イオ Io, エウロパ Europa, ガニメデ Ganymedes, カリスト Callisto を発見しました。

²ポーランドの天文学者で、やはり地動説を提唱しました。

³万有引力の発見者で微積分の発見者であり、1687年に *Philosophiae naturalis principia mathematica* 『自然哲学の数学的原理』を発表しました。

⁴フランスの哲学者、数学者で、1637年に *Les Discours de la méthode* 『方法序説』を発表しました。

⁵ドイツの哲学者、数学者で、ニュートンとは独立に微積分を発見しました。

なり、その自由さ、人間性の謳歌に憧れるようになってきました。

しかしこのような風潮はギリシアやローマの膨大な文献を訳したり、これに判りやすく注釈をつけたりして出版しなければ、一般の人々には近づけないものでした。こういうわけでこの時代にはギリシア・ローマの文献の出版や注釈、その基になる古典文献学が発達することになりました。

§24 この時に活躍した代表的な人々には、たとえばユリウス・カエサル・スカリゲル (Julius Caesar Scaliger 1484-1558)⁶ などがいます。1453年にコンスタンチノポリスがオスマン・トルコによって占領され、ビザンツ帝国が滅びますが、これに伴ってビザンツの学者たちが大勢イタリアに亡命してきました。このことによってヨーロッパの古典ギリシアへの興味が更に高められました。

さらにこの時期には旧約聖書が書かれたヘブライ語に対する興味も起ってきました。ヘブライ語はインド・ヨーロッパ語族に属する言語ではなく、セム語族に属していましたから、これと並んで同じセム語族あるいはこれに近いハム語族に属するアラム語、アラビア語、エチオピア語などの知識もヨーロッパにもたらされることになりました。

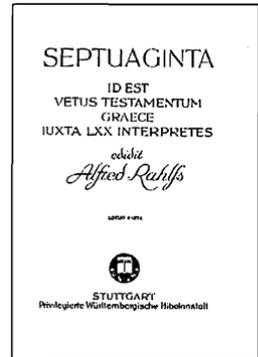
§25 一方中世には絶対的なものと思われていた教会の権威が揺らいでくるにつれて、教会のあり方やものの考え方にいろいろな疑問が起ってくるようになります。

これは宗教改革という形で現れてきますが、そのためには何よりも聖書に立ち返ってこれをよく理解する必要がありました。中世では教会はラテン語を使っており、それを基にしてラテン語が判らない一般の人々に、聖書の中身を説いて聞かせるというやり方が一般的でした。しかし教会の考えそのも

⁶この名前はラテン語風の名前です。中世以来ラテン語は学問の言語だとされ、ヨーロッパの知識階級の人々はしばしばラテン語化した名前を用いました。ユリウス・カエサルは古代ローマにおいて皇帝の祖となった人物です。フランス語ではこれはジュリー・セザール・スカリジェといいました。この人の息子のヨセフ・ユストゥス (1540-1609) は歴史の記述をする場合に従来のような年月日ではなく、ある起点から何日目にしたかを誌すことによって、国や時代によって異なる暦の影響を受けることなく、その日を特定することができると考えました。そしてその基準点を紀元前 4713 年 1 月 1 日におきました。彼はこの暦に父の名を取ってユリウス日又はユリウス通日と名付けました。これは厳密ではありますが、日常生活にとっては煩雑なため、専ら天文学、暦学などに用いられています。このことによって彼は近代年代学の創始者といわれます。

のに疑問を抱くようになると、どうしても自分の目で聖書を読んでみなければなりません。旧約聖書は前にもいいましたようにヘブライ語、及び一部はアラム語で書かれていましたが、これは紀元2世紀にアレキサンドリアの学者たちによってギリシア語に翻訳されていました。

この翻訳には70人の学者が携わったといわれ、『70人訳聖書』Septuaginta と呼ばれています [23]。また新約聖書はコイナーといわれるヘレニズム時代のギリシア語で書かれています。従ってこれらの聖書を一般の人々の判ることばに翻訳することが必要になりました。このことに伴ってヨーロッパのさまざまな言語の単語や文法の知識が必要になり、人々が実際に日常使っていることばに対する興味も生れてきたのです。



七十人訳聖書

§26 さらにまたこの時代には、先に述べたコロンのアメリカ大陸の発見を契機にして次々と地理上の発見が続きました。たとえばポルトガルのヴァスコ・ダ・ガマ (Vasco da Gama 1469-1524)⁷、マジェラン (Fernan Magalhães (Port.)/Magallanes (Sp.) 1470-1521)⁸ などが有名です。

この結果それまでヨーロッパ大陸の中しか見ていなかったヨーロッパの人々の世界が広がり、ヨーロッパ以外の土地に植民したりキリスト教を伝えたりするために、さまざまな言語に対する知識が集積されるようになりました。

§27 このようなさまざまなことばに対する知識の広がりとその時期を特徴づける「合理主義」の思潮が結びつくと、いろいろな異なりのある言語の中に共通したカテゴリーや法則があるという考えに到達するようになるのは、いわば当然です。

⁷ガマは1497-1499年にリスボンを出航し、喜望峰を回ってインドに達して、ヨーロッパからアジアへの航路を確立しました。

⁸より正確にはマガリャンイス。彼は1519年9月に西を向かって5隻からなる船団を組んで世界周航に出発、1520年10月-11月にマジェラン海峡を通過して太平洋に出ました。その後太平洋を横断してフィリピンに達しましたが、マクタン島で先住民に殺されました。残りの船団はデルカノ (del Cano/Elcano? ca.1486-1526) に率いられて1522年にスペインに帰り、世界一周を果たすと伝えられます。

言語学ではまさにこの時期にいわゆる「普遍文法」という名で包括できるような文法が現れます。これは現実の認知や意味づけの分野で、全ての人にとって普遍的な概念や原理がさまざまな言語の根底に存在するのだという考えから、文法もそのような原理から記述しなければならないという考えに基づいています。

§28 その最初のもは、フランスのポール・ロワイヤール修道院の僧だったアルノー (Antoine Arnauld 1612-1694) とランスロー (Claude Lancelot 1615?-1695) によって 1660 年に書かれた、『ポール・ロワイヤール理性的普遍文法』*Grammaire générale et raisonnée de Port-Royal* [52]⁹ といわれるものでした。著者らはこれによって理性の能力あるいは力という立場から言語というものを考えようとした。

例としてこの『ポール・ロワイヤール文法』で「数」を扱っているところを引いてみましょう。

普通名詞は複数の事物に当てはまるが、これは幾つかの仕方です。

1. それらの名詞を、それが表している幾つかの事物のひとつに当てはめるか、あるいは、それらの事物すべてをあるひとつの統一性の中に見るかである。この統一性は哲学者たちによって普遍的単位 (unité universelle) と呼ばれている。

2. それらの名詞すべてを同時に幾つかのものに当てはめ、それらを複数として考えることもできる。

この二つの表し方を区別するために、二つの数が工夫された。単数, homo, homme (人) と複数, homines, hommes (人々) である。

ギリシア語などの幾つかの言語では、名詞が二物を表す際に、両数 (duel) がつくられた。

ヘブライ人も両数の一種をもっていた。ただし語が対になった物を表す場合に限られる。例えば、自然物では目、手、足など、人工の物では製粉所の石臼、鉄など。

固有名詞は、以上のことから、その性質上、唯一物にのみ当てはまるので、それ自体では複数をもたないことが明瞭に知られる。もし時として複数におくとすれば、例えば les Césars, les Alexandres, les Platons という場合のごとく、それは比喩的である。例えばアクレサンダー(ママ) 大王と同じくらい勇敢な王たち

⁹実際にはこの書物の本当の表題はとても長いものです。すなわち: *Grammaire générale et raisonnée, contenant les fondaments de l'art de parler, expliqués d'une manière claire et naturelle. Les raisons de ce qui est commun à toutes les langues et des principales différences qui s'y rencontrent; et plusieurs remarques nouvelles sur la langue française* 『明瞭にかつ自然に話し説明する術の基礎を含む一般的理性的文法。その際に認められる全ての言語に共通のものとの主な相違についての説明、並びにフランス語に関する多くの新しい指摘』。

とか、プラトンと同等に博学な哲学者たちとか言えるごとくに、固有名詞の中にこれらの人物に類似するような全ての人々を含めて比喩的に使うのである。かような例は全ての言語の中に見られるが、とはいえ、本質に合致しないとしてこのような言い方に賛同しない人々もいる。この言い方は完全に廃棄するにはあまりにも許容され過ぎてるように思える。ただこれを控えめに用いるよう心懸けることが肝要である [52, pp.44-45].

2. 論理的言語の構築—「人工言語」

§29 このように言語と論理を同じものだとする考えは、かなり早くから見られるものであったようで、14世紀のスペインの哲学者ラモン・ルル (Ramón Lull (Raimundus Lullus) 1235-1315)[11, Sec.4] は、言語は論理の機械だといっているそうです。

極端に言えば、こういうような「言語」は、もし論理というものが国ごとに違うものでないならば、全ての国にとって同じものでなければならぬことになるでしょう。いわゆる「普遍言語」という考え方がこれです。

しかし実際にはたとえ「論理」は同じでも、どういうものを使ってある概念をどういう風に分類しそれをどういう風に表すかは人によって違うわけですから、できあがった「言語」の外見が全く違うのは、むしろ当然だと考えられます。

§30 たとえば英国のジョン・ウィルキンス (John Wilkins 1609-1672) という主教は 1611 年にこういう普遍的な言語を作ることを思いつき、30 年かかって「マーキュリー」Mercury という「言語」を発表したといえます。

彼は概念を 40 のグループに分類し、更にその各々について細かく分類して、特定の音と文字を使って表したといえます。また複雑な概念についてはこれらの単純な概念を組み合わせで表したということです。これによるとたとえば De というのは、世界を作る四大「^{エレメント}元素」を表すとします。そして Deb はその下位区分の一番目に当たるものを表すとします。すなわち「火」です。さらに Deba は「火」の下位区分で「炎」を表すということになります。

§31 またベッハー (Johann Joachim Becher 1635-1682) という人は 1661 年に 10 個の数字を使ってラテン語の語彙を表し、更に単数は 1 から 6、複数

は7から12というように文法的な事柄も数字で表して「言語」を作ったといわれます[11, *ibid.*]¹⁰。この「言語」は語彙だけで10,283通りの数字の組合せが用いられていたとのことです。ずらっと並んだ数字から意味を読みとることはほとんど絶望的だったろうと思われます。しかしベッハーはこの「言語」でいくつかの書物を翻訳したといわれます。

ところで文字というのは国ごとに呼び方が違いますから、たとえ意味が分っても発音すると相手に伝わらなくなります。このように発音することを考えない「言語」を「パジグラフィ」*pasigraphy* といいます¹¹。日本でトイレの男性用・女性用の区別や道路標識、禁煙の表示など色々なところに使われている「絵文字」は、このパジグラフィの一種です。

§32 17世紀の有名な哲学者で数学者のライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz 1646-1716) も、1666年に出版された『結合術』*Ars Combinatoria* という書物の中で、言語が理性の道具であって、概念をただ表すだけでなく数式のようにその意味を明らかにできるようなものでなくてはならない、といていたといえます[11, *ibid.*].

彼は1から9までの数で子音 b, c, d, f, g, h, l, m, n を表し、母音 a, e, i, o, u をそれぞれ 1, 10, 100, 1000, 10000 で表し、その結合によって概念を分類し表したといわれます。これはきわめて論理的な言語であると同時に、ベッハーの「言語」のように意味をとるのが大変で発音できないようなものにならないように、工夫したものだと考えられます。しかしそれでもこれは、どうして使いものにはならなかったと思われます。どうしてかといいますと、これらの「言語」の特徴は、論理的であろうとして概念を論理的に分類することから始めようとするところにあります。人間の扱う概念を分類すること自体が、現代の言語学でも成功してはいないものだからです。

§33 ついでにいえば、ちょっと変わったところでは1817年にフランスのジャン・フランソワ・シュドル (Jean François Sudre 1817?-?) という人の作った

¹⁰Johan Joachim Becher の生没年は1635-1682となっていて、1611年に「言語」をつくったという、Vera Barandovska-Franka の記述と矛盾しています。あるいはこのベッハーは別人かも知れません。

¹¹語源的には *pās-i-* はギリシア語の「全て」を意味する語で、*graphō* は「書く」という意味です。

ソルレソル Solresol という「言語」があります。

sol というのは日本語では音名のソのことですから、Solresol は日本語ではソレソとでもなりましょうか。この名前から判りますように考案者は音符を使っています。音符の名前はどれも一音節ですから、これを1個から5個組み合わせて語を作るといのです。そして1個または2個の音符で小詞や代名詞を作るといいます。

たとえば si は「はい」、do は「いいえ」、re は「そして」、mi は「または」といった具合だそうです。そして使用頻度の高い語は3個の音符からできていて、たとえば、doredo「時間」、doresol「月 (month)」、dorela「年」などとなるのだそうです。

§34 この原則に加えて各々の概念が属しているカテゴリーあるいはクラスを表す音符も定まっています。たとえば do は物質や道徳的なことから、re は家族や家計、経済などの分野に属することがら、mi は人の行動、などを表すといいます。そして面白いことに反対概念は音符の並べ方を逆にすることによって表されるといいます。

たとえば misol という語が「善」を表すとすれば、「悪」は solmi となるといのです。

彼によればこの「言語」は書くこと

	単音符	反復音符
ド	人, 能力, よい性質, 食物	宗教
レ	衣服, 家庭, 家族	建築, 商業
ミ	人の好意, 悪い性質	副詞, 前置詞, 接続詞
ファ	国, 農業, 戦争, 海	病気, 薬
ソ	旅行	病気, 薬
ラ	芸術, 科学	工業, 商業
シ	工業, 商業	法律関係
	社会, 政府, 財政, 警察	

もできるし、発音することも歌うことも、また楽器で演奏することさえもできるといのです。シュドルは15年間もの間フランスやイギリスを旅してこの「言語」の普及に努めたそうですが、一般に普及しなかったのは残念といわなければなりません。もし普及していれば人々は皆歌うように話すことになっていたかも知れないのです。もっとも少数の愛好家は今でもこれを使って楽しんでいるそうです。

§35 ともあれ、ここで述べたような哲学的論理的な人工言語は、概念を先に分類しその概念に対応した形をとる、という点に共通性があります。そ

うするとこれは先に述べた(4頁)ピュセイとテセイの区別でいえば、ピュセイの立場に立っているということが出来ます。

このように、内容となる概念が先あってそれに基づいて語の外形ができるとすると、必ずしも発音できるような形になるという保証はありません。ですからこのような「言語」は、どうしても絵文字のように目で見るだけになってしまいます。

このような「言語」は、経験に基づいてその後で概念が生じるというのではなく、まず概念が「先にある」という意味で、ア・プリオリ a priori な言語だといえます。

§36 しかしア・プリオリな言語の致命的な欠陥と思われるのは、実は発音できるかできないかというようなところにあるのではないと思われま

す。この種の言語は、概念の論理的な分類が外形にも現れるようになっていくということとその最大の特徴として思われますが、実は巻末の付録「言語の基本的制約について」のところで述べますように、概念というものは、言語の外にある普遍的なものではなくて、言語によって外界をどう切り取るかによっていわば言語と共につくられるものと考えられます。しかしこのような考えは、当時の学問の水準からは全く予想もできないことでありました。このことが判らないままに、当時の学者たちは、概念がいわば言語の外に言語以前から存在しているという誤った前提から、ア・プリオリな人工言語をつくろうと試みました。

したがって彼らの過ちは実用的な欠陥というよりは、言語の根底をなす理論的なところにあったということが出来ます。

§37 一方、次の節の漢字やエジプト象形文字のところで述べますように、自然言語のばあいでも論理的なカテゴリーによる区別と全く無縁ではありませんでした。

ソルレソルのような、論理的な概念の分類に基づく人工言語でさえも、全く自然言語の影響を受けないでいることは難しかったと思えます。たとえば、ソルレソルの文は「名詞 + 動詞 + 目的語」という語順を持っているほか、名詞の単数と複数を区別しています。これは明らかに印欧語の影響によるもの

です。また形容詞が名詞の後ろに位置するようになっていますが、これは明らかにフランス語の影響といえます。また動詞の時制も、直説法現在、定過去、半過去、大過去、未来、先立未来など、フランス文法と同じような複雑な体系を持っています [13]。

3. 自然言語における類概念の表現

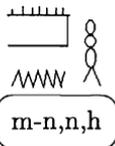
§38 このような「言語」を思いつくようになったのは、もちろん合理主義というこの時代の時代精神によるものではありませんが、この時代に中国語の知識がヨーロッパに及んできたことにも関係があると思われます。

漢字には中国人が考えた限りの概念の分類を表しているものが多くあります。たとえば「京」という字は元々象形文字で、小高い丘の上に立つ大きな家を意味しているといわれますが、ここからこの字は「高い」、「明るい」、「大きい」ものを指していたといわれます。発音は「ケイ」、「キョウ」などであったそうです。「都」や「小高い丘」、「兆の一万倍」(本来は「兆の十倍」)などを表すのもこのためだったと思われます。しかしこれが同じ「ケイ」でも太陽の下にあるとき「明るい日影」を指しました。「景」(ケイ)です。更に「魚」?の大きいものは「鯨」で「ゲイ」です。木の大きいものは「椋」(むく)で「リョウ」と読みました。

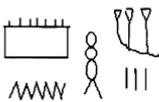
§39 さらに、「魚」は「ゴ」、「ギョ」と呼んだようですが、これは音には関係なく、カテゴリーをも表していました。「トウ」というものが「魚」のカテゴリーにあれば鯛となり、タチウオを表しました。また「鮎」は魚のカテゴリーの中の「フ」と呼ばれるもの、すなわち「フナ」だったので。「鮎」^{レン}、「鮠」^{ドウ}、「鮓」^{ケイ}、「鮫」^{コウ}、「鯛」^{チョウ}、「鯛」^{ショウ/セイ}、「鱈」^{ガク}、「鱈」^{レン}、「鱈」^{ソウ}なども皆そうです。

§40 中国語の漢字のように洗練された、組織的なものではありませんでしたが、このような方法は、中国語を含めて同音異義語 (ホモニム homonym といいます) の比較的多い言語では、意味の混同を避けるために以前から部分的には使用されていたようです。

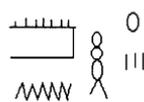
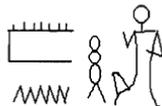
§41 たえばエジプトの象形文字のばあい, m-n-h という音価を表す文字は右の図のようなものだったといわれています。ここでは子音しか示されていません。ハム・セム語族のばあい, 母音は主として文法あるいは語構成の役割を持っていて, 意味を担う役割を果すのは三つの子音だからです。したがって表記のばあいは原則として子音だけが示されることになっています¹²。



これに対して図1は右側に「植物」を表す記号が付いています。



そうするとこれは発音はされませんが, 植物で



[m-n-h] と発音するものを示すことになります。そのためこれは「パピルス」を意味するようになります。同じようにして図2の右側にあるのは「人」を表す記号で, これが付けば人で同じ発音をする「若者」を意味します。最後の図3の右側にあるのは粉のように無定型で細かいものの集まりを示す記号で, 全体として「蜜臘(蠟)」を表すことになるといいます。

このように, 同音異義語が多くあるときにはそれがどのような種類のものであるかを示すと, 意味が的確に分ります。このような役割をするものを「限定詞」*determinative* と呼んでいます [39, p.196]。このことから先に述べた漢字の偏も, 実は限定詞の一種であることが分かります。

§42 以上は文字に限ったことですが, 言葉そのものがカテゴリーの区別をしている言語もあります。

¹²たとえばセム語族に属するアラビア語では, 「書く」という概念は k-t-b という三つの子音が担っています。kataba となれば「彼は読んだ」となり, kitāb となれば「本」になり, kutubu となれば「本(複数)」, ma-ktāban となれば「図書館」というようになります。したがってアラビア文字には固有の母音を表す文字はなく, 「補助記号」を付けて間に来る母音を示します。

たとえばアフリカの中部に広く分布しているバントゥー語族という語族がありますが、これに属する言語は森羅万象をいくつかのカテゴリーに分類しています。右の表はバントゥー

クラス	概 念	単 数	複 数
1,2	人	m-/mu-/mw-	wa-/w-
3,4	植物	m-/mu-/mw-	mi-
5,6	果実	ji-/j-/ø	ma-
7,8	もの	ki-/ch-	vi-/vy-
9,10	動物	n-/ny-/m-/ø	
11	抽象概念	u-/w-/uw-	

語族の中で最もよく知られているスワヒリ語の名詞の分類です。

例を挙げれば

1-2 このクラスに属するのは、たとえば、*m-tu*「人」/*wa-tu*「人々」、*m-toto*「子ども」/*wa-toto*「子どもたち」のようなものです。

3-4 このクラスに属するものにはたとえば、*m-ti*「木」/*mi-ti*「木々」、*m-nazi/mi-nazi*「ココヤシ」などが基本的なものです。ここにはたとえば *m-kono/mi-kono*「手」、*m-guu/mi-guu*「足」のような体の部分およびその他のものが属しています。たとえば、*m-to*「川」、*mw-aka*「年」などがあります。何か「長くのびるもの」をイメージしているのではないかと思われま。

5-6 典型的なものは *tunda/ma-tunda*「実」、*chungwa/ma-chungwa*「オレンジの実」、*korosho/ma-korosho*「カシュナツの実」などです。

しかしここには実に似た形をした(したがって丸いものが多い)体の部分、たとえば *ji-cho/ma-cho*「目」、*j-ino/me-no* < **ma-ino*「歯」、*sikio/ma-sikio*「耳」あるいはその他の *jua*「太陽」、*yai/ma-yai*「卵」、*ziwa/ma-ziwa*「湖」などがあります。

7-8 これに属するのはたとえば *ki-tu/vi-tu*「もの」、*ki-ti/vi-ti*「イス」、*ki-tanda/vi-tanda*「ベッド」などが典型的なものです。このほかこのクラスには「言語」が入っています。*Ki-ingereza*「英語」、*Ki-swahili*「スワヒリ語」、*Ki-china*「中国語」のようなばあいです。

9-10 これに属するのは動物の他、外来語を含めた種々雑多なものが属しています。これは単複同形でクラス接頭辞 *n-* は無声子音の前には付きません (\emptyset)。 *n-dege* 「鳥」、 *n-yama* 「獣」、 *simba* 「ライオン」、 *tembo* 「ゾウ」、 *mamba* 「ワニ」などの他、 *taa* 「ランプ」、 *n-dizi* 「バナナ」、 *n-dimu* 「レモン」など。

11 抽象概念を表すものとしては、たとえば、 *u-toto* 「幼年時代」 (cf. *m-toto*)、 *u-zuri* 「美しさ」 < *-zuri* 「良い」、 「美しい」、 *u-rafiki* (友情) < *rafiki* 「友人」など。

この外これは国を表すこともできます。 *U-rusi* 「ロシア」、 *U-giriki* 「ギリシア」、 *U-faransa* 「フランス」など [31]。

こういうわけでスワヒリ語では Uganda では *mganda* の複数の集まりである *waganda* が Kiganda でコミュニケーションをしている、ということになります。

§43 伝統的なスワヒリ文法は、以上のようにクラスごとに基本的な概念を設定しています。しかしクラス 3-4 は、樹木などの植物を基本的に含むとされてはいますが、 *m-kono/mi-kono* 「手」や *m-guu/mi-guu* 「足」あるいは *m-to* 「川」なども含んできます。

これに対して「実」、 「果実」を基本的なカテゴリーとするといわれるクラス 5-6 は *ji-cho/ma-cho* 「目」、 *ji-no/me-no* 「歯」、 *sikio/ma-sikio* 「耳」あるいはその他の *jua* 「太陽」、 *yai/ma-yai* 「卵」、 *ziwa/ma-ziwa* 「湖」などを含んでいます。

こういうところから見れば、本当はクラス 3-4 は「長い形をしたもの」の類、クラス 5-6 は「丸い形をしたもの」の類が、基本的な類概念ではないかと思われます。

§44 また面白いのは他の類に属する名詞をクラス 5 に属させると、大きいことを示す「指大辞」 *augmentative* になることです。たとえばクラス 3 の *m-ji* 「村落、町」 - *jiji* 「都会」 - *jijiji* 「メガロポリス」など。

逆に 7-8 のクラスに属させれば、小さいことを表す「指小辞」 *diminutive* になります。たとえば *jiko* 「木匙」は 5 クラスですが、 *kijiko* は「ティース

プーン」です。また同じように *mlima* 「山」に対する指小辞は *kilima* 「丘」ですが、面白いことに、アフリカで最も高い山が Kilima Njaro と呼ばれていることです。これは愛称に違いありません。色々な言語で指小辞は、しばしば愛称としても用いられているからです。

§45 ついでに言えば、Kilima Njaro は、周知のように、タンザニアにあるアフリカの最高峰を含む山です。最も高い峰は、海拔 5,895 m といわれ、万年雪に覆われ、頂上付近には氷河があります。

Njaro は少なくともスワヒリ語の語根にはなく、その意味には諸説があります。その一つは「輝く」というものですが、そのほかに「キャラバン」を意味するという説もあるといえます。奴隷貿易の時代に、ここを通過して奴隷を運ぶキャラバンが行き来したというのです。これに対してマサイ族には、「泉」または「水」を意味するという言い伝えがあるといえます。

§46 このような類別は、言語によっても当然違いますが、その違いはそれぞれの言葉を話す人々が無意識に類別を行った結果であって、それなりの合理性があると思われます。そしてその合理性は、その民族の生活の環境、生活の仕方と密接に関係していると思われます。

これについては機会があったら述べることにしますが、いずれにしてもこのことから人々が生きている環境を無視して、純粹かつ普遍的に観念を類別しようという試みは、ほとんど不可能だと考えられます。

§47 ところでスワヒリ語はなんでそんな面倒な分類をしているのだろう、と思うかも知れません。事実かつて私がこれとは違う言語についてでありましたが、このような分類を持つ言語(これを多分類言語といえます)について説明したところ、同じ疑問が学生からなされたことがあります。そのときに私は、日本語でもこれに似た分類がなされているという事実を指摘しました。

すなわち、日本語は助数詞に限ってではありますが、次のような分類を持っているのです。

例えば、

1	人間	人	一人, 二人 etc.
2	小動物	匹	一匹, 二匹 etc.
3	大きな動物	頭	一頭, 二頭 etc.
4	鳥	羽	一羽, 二羽 etc.
5	魚	尾	一尾, 二尾 etc.
6	長いもの	本	一本, 二本 etc.
7	平たいもの	枚	一枚, 二枚 etc.(時にヒラメ, カレイも)
8	容器に入った液体など	杯	一杯, 二杯 etc.
9	刀剣	振り	一振り, 二振り etc.

そのほかたとえば筆筒, 長持のように, 棒で担いで運ぶものは「一棹, 二棹」と数えました。亡くなった人は「一柱, 二柱」といい, 死体は「一体, 二体」と数えます。これらはいずれもものを何らかの基準でクラスに分類したものに他なりませんから, その本質において多分類言語の分類と変るところはないと考えられます。

§48 この問題については最近日本語の助数詞を集めた『数え方の辞典』と言う書物が発行されました。興味のある方は参考にして下さい [53]。日本語が「野蛮な」言語だと言えないのと同じように, 特に文化的に未開な発展段階にあると見なされる言語にある現象を, すぐに「未開な現象」だというのは, 誤っています。

言語そのものには, 優れた言語とか, 劣った言語とかいう価値の差はもともとないのです。日本語のばあいも, 時間を遡ればさらに多くの分類が見られるようです。諸君もどのような分類があるか考えてみてください。助数詞は諸君が思っているよりも, 数をはるかに多いのです。



第三章

ことばの研究 III 啓蒙期

言語世界の拡大と未知の言語との遭遇

§49 ルネッサンスの時期には中世以来の伝統が強く残っていて、ラテン語が研究の主な言語でありましたが、ギリシア語も研究の対象になってきました。また中世にも、神学の研究のためにヘブライ語の知識が必要となりましたが、やがてアラビア語も学ばれるようになりました。特に中世にはアラビア語がキリスト教にとって異教の言語であったために、ギリシア語の文献の多くがほとんど忘れ去られていました。前にも言いましたように、ルネッサンスになると教会の支配と圧迫から逃れて、人間性を謳歌していたギリシア・ラテンという古典期の文物に対する興味が起って来ました。この古典時代のさまざまな科学や思想に関する著作は、アラビアにおいて翻訳されたり保存されたりしていました。このおかげでヨーロッパは部分的ではありましたが、失われかけた知識を取り戻すことができたのです。

§50 一方、これも前に言いましたが、大航海時代を経てヨーロッパにそれまで知られなかった多くのことがらについての知識がもたらされました。

その中にはアジア、アメリカなどのさまざまな言語についての情報が含まれていました。それには宗教的な情熱に駆られて異境の地にキリスト教の福音を伝えたいという、イエズス会の宣教師たちによるものが多くあったといわれています。なぜなら相手の言葉が判らないとせつかくの神の教えを伝えることができないからです。

§51 このようにして、ヨーロッパに他の大陸の言語についての知識がだんだんと蓄積されていきました。ルネッサンス以来の合理主義の精神がこれらの知識を一般言語学に取り入れようとするようになるのは、当然のことだったと思われます。

このような試みの最初のものはロシアの女帝エカテリーナⅡ世(1729-1796)

によって試みられました¹。女帝は大公妃の時代から世界の言語の単語集を作ることに興味を持っていました。彼女は自分で単語の表を作って外国にいるロシアの外交官や学者に送り、それぞれの国の言語でどういう単語に当るかを報告させました。これらの材料や、それ以前に集められていた材料の整理には彼女自身も親しく携わったといわれますが、これを最終的な形で出版することを、当時有名な旅行家で博物学者でもあったペーター・ジーモン・パラス (Peter Simon Pallas 1741-1811)² に任せました。

§52 パラスは急がなければならなかったので集まった材料の全てを利用することはできなかったといわれますが、1786年から翌1787年にかけて『欽定全世界言語比較語彙』(*Linguarum totius orbis vocabularia comparativa, Augustissimae cura collecta*)の第一部が出版されました。

これには149のアジアの言語、51のヨーロッパの言語、結果として200の言語または方言が含まれていたといわれます。これは余り急ぎすぎたために色々不十分なところがありましたが、とにかく1791年には4巻が発行されました。これにはアメリカ、アフリカの言語もいくつか加えられて、総計272の言語を含むものになったといわれます。

これはただ単語の表が並べられているばかりであり、しかも正確に言語の音を転記できていないものが多かったなど、色々問題がありましたが、ともかく当時の人々には大きな刺激を与えて、言語の研究に対する興味を呼び起すのに役立ったといわれます [67, pp.73-74]。

§53 パラスの最初の語彙集に続いて1784年になると、イタリアのチェゼーナ Cesena という町で出版したという、スペインのイエズス会会員ロレンソ・エルヴァス・イ・パンドウロ (Lorenzo Hervás y Panduro 1735-1809) の『宇宙の理念』(*Idea dell' Universo*) が現れました。これは21巻からなるイタリア語で書かれた大著で、その第17巻(1784年)に「今までに知られた言

¹ エカテリーナ II 世はもともとドイツ人で、1745年に後にピョートル III 世になった大公ピョートル・フョードロヴィッチと結婚しましたが、1762年に親衛隊の助けを借りて夫の帝位を篡奪し、自ら皇帝になりました。彼女はロシア帝国の版図を広げて強国にした女傑で、最も有名な皇帝の一人です。彼女は一方フランスのヴォルテールその他の啓蒙主義者と親しく交わっていました。

² パラスはもともとドイツ人で、1767年にペテルブルグ科学アカデミー会員になりました。そういうわけでロシア風にピョートル・シモノヴィッチ・パラス Петр Симонович Паллас と書かれることもあります。

語のカタログおよびその相互の親近性と相違性についての覚書き」(*Catalogo delle lingue conosciute e notizia della loro affinità e diversità*) が含まれています。

§54 彼は増補訂正したものを後になって更にスペイン語で出版したと言われています。『今までに知られた諸民族の言語のカタログ、および列举と分割、およびそれらの言語および方言の相違による分類』(*Catálogo de las lenguas de las naciones conocidas y numeracion, division y clases de estas segun la diversidad de sus idiomas y dialectos*, Madrid 1800-1804) 6巻がこれです。

これにはアジア、アメリカ、ヨーロッパのおよそ 300 の言語が収録されているといわれ、パラスのものに比べると、ただ羅列するだけではなく言語を手段として諸民族の相互の親近性と相違性を明らかにしようとした点、ならびに語彙だけではなくむしろ文法の構造にも目を向けたところが、高く評価できるといいます [67, pp.74-75].

§55 この種の著述の最後になるものとして有名なのはドイツのアーデルング (Johann Christoph Adelung 1732-1806) が著した『ミトリダテース』³ があります。

これは、およそ 500 の言語について聖書の「主の祈り」を見本として載せたものですが、死によって中断され、残りはファーター (Johann Sevelin Vater 1771-1826) によって完成されたといわれます。

これはデンマークの有名な言語学者トムセン (Vilhelm L. P. Thomsen 1842-1927) によってさまざまな欠点をもっていると評価されています [67, pp.75-79]. 彼はこれについて「この大著述は或る意味においては旧言語学の頂点をなすものであった、否、その完成した瞬間、それは己に時世に後れていた。

既にその以前から、我々の学問の歴史においては、新しい時代が始まっていたのである」(*op.cit.*, p.79) と述べています。

§56 一方ヨーロッパにサンスクリットの知識が伝えられ、これがヨーロッ

³これも長い表題をもっています。『ミトリダテース。またはおよそ 500 の言語と方言で言語の見本として主の祈りを付けた一般言語術』(*Mithridates oder allgemeine Sprachkunde mit dem Vater Unser als Sprachprobe in beynahe fünfhundert Sprachen und Mundarten*, Berlin 1806-1817) がこれです。

パの言語によく似ていると気付く人も、かなり早くからいたといわれます。たとえばイタリア人のサセッティ Sasetti という人は16世紀に既にイタリア語とサンスクリットの間の一連の類似形を見だしていたようですが、余り一般の注意を惹かなかったといわれます [59, p.29].

1786年になるとイギリスのインド派遣ベンゴール(ベンガル)州司法官で、世界的に知られた東洋語学者だったウィリアム・ジョーンズ(William Jones, Sir, 1746-1794)が、カルカッタの『アジア研究』(Asiatick Researches)という雑誌の創刊号に論文を寄稿しました(1786年).

その中で彼はサンスクリットが驚くような構造をもっていて、ギリシア語よりも完全でありラテン語よりも豊かであること、しかも動詞の語根と文法の形が非常によく似ていて、この類似が決して偶然生じたものではあり得ないことを指摘し、これらの言語が現在ではもはや存在していない、ある共通の源から生じたものに違いないと主張しました。しかも彼はゴート語もケルト語もサンスクリットと同じ源をもっているに違いないと考えました。

§57 ジョーンズのこの考えの重要なところは、それまでの人々がギリシア語、ラテン語、サンスクリットなどの言語が似ているというだけに留まっていたのに対して、これだけ似ているのならこれは偶然似ているのではなく、同じ源から発生したものだと考えた点、およびその源になる言語が今はもうどこにも存在していないと考えた点にあります。

彼の所説を引用すると、次のようになります。

サンスクリットという言語は、それがどれだけ古いものであろうと、驚嘆すべき構造をもっている。それはギリシア語よりも完全であり、ラテン語よりも豊かであり、そのどちらよりも絶妙な洗練さをもっている。それにも拘わらず、動詞語根と文法の形式においてそのどちらとも、決して偶然によって生み出されることが恐らくはできないほどの強い親近性を持っている。実際どのような文献学者も、これらの三言語のすべてを吟味して、それらがおそらくはもう存在していないある共通の源から生じたのだと考えないわけにはいかないであろう。これほど強力なものではないが、どちらも極めて異なった言葉と混じり合っているにしても、ゴート語とケルト語がサンスクリットと同じ起源を持っていると推測するに足る根拠がある。また古ペルシア語も、同じ起源を持つもののうちに数えられ

るであろう (cf. [59, p.30])⁴ .

ジョーンズのこの報告はヨーロッパにもたらされ、サンスクリットの研究も少しずつ広がって行きました。しかしヨーロッパの人々のサンスクリットへの関心を大きく引くことになったのは、彼がカーリダーサの戯曲『シャクンタラー』を翻訳したことだったといわれます⁵ .

§58 更にドイツのフリードリッヒ・フォン・シュレーゲル (Friedrich von Schlegel 1772-1829) はパリでサンスクリットを学び、ドイツに帰ってから1808年にハイデルベルクで有名な『インド人の言語と知について』 (*Über die Sprache und Weisheit der Indier*) という小さい冊子を出版しましたが、彼はこの中でサンスクリット、ギリシア語、ゲルマン語、ペルシア語が構造的に似ていることを示して、言語というものが親近関係にあるかどうかを決定するためには、単語が似ているというだけではなくむしろ言語の内部構造が似ていなければならないと主張しました。内部構造が似ているかいないかを決定するのはもちろん比較することによってでなければなりません。

彼はこの方法を「比較文法」と呼んだのです。

§59 もちろんこれは、後の本格的な「比較言語学」に見られる厳密な比

⁴The Sanskrit language, whatever be its antiquity, is of a wonderful structure; more perfect than the Greek, more copious than the Latin and more exquisitely refined than either; yet bearing to both of them a stronger affinity both in its roots of verbs and in the forms of grammar than could possibly have been produced by accident; so strong, indeed, that no philologer could examine them all three without believing them to have sprung from some common source, which perhaps no longer exists; there is a similar reason, though not quite so forcible for supposing that both the Gothick and Celtick, though blended with a very different idiom, had the same origin with the Sanskrit; and the old Persian might be added to the same source. – ‘The Third Anniversary Discourse delivered 2. February, 1786’ (*Asiatick Reseaches* I, 1786, p.442.) 訳は I.Y.

⁵カーリダーサ Kālidāsa はインドの詩聖といわれる人で、『シャクンタラー』 (*Śakuntalā*) は『記念の指輪によってめぐりあったシャクンタラー姫』という戯曲。王と仙女との恋物語。

インドでは320年頃チャンドラグプタ I 世 (在位 320-350) がグプタ王朝を興しますが、この王朝は第2代サムドラグプタ王 (在位 350-376) を経て376年頃に即位したチャンドラグプタ II 世 (在位 376-415) の時に最盛期を迎えます。宗教的には仏教と共にヒンドゥー教が信じられていましたが、民間ではヒンドゥー教が栄え、仏教は急速に衰退していきます。しかし仏教の教義の研究はこの時期に最盛期を迎え、インド古典文化もまた最盛期にありました。カーリダーサの『シャクンタラー』が生れたのはこの時代でした。

較ではありませんでしたけれども、ここではじめて言語の起源と比較という二つのものが結びついたということはできましょう。

この書物は、全体としてはむしろ平易な知識の普及版というところであったといわれていますが、これは「……印度人の文化生活の種々な側面に互る活々とした叙述と、そこに添へられた詩の翻譯とによって、言語研究と遠き印度とに対する興味を喚び起すために有力な貢献をした」[67, pp.97-98]といわれます。

このようにして 19 世紀の比較言語学への道が準備されていきました。

第四章

ことばの研究 IV 19世紀言語学 比較言語学の黎明期

1. フランツ・ボップ

§60 シュレーゲルがパリでサンスクリットを学んだことは既に述べましたが、このときに彼の補佐役を務めた若いドイツ人がいました。これは後にベルリン大学の教授になった、フランツ・ボップ (Franz Bopp 1791-1867) でした。彼は 1816 年にフランクフルト・アム・マインで『ギリシア語、ラテン語、ペルシア語、ゲルマン語の変化と比較した、サンスクリットの動詞変化について』 (*Über das Conjugationssystem der Sanskritsprache im Vergleichung mit jenem der griechischen, lateinischen, persischen und germanischen Sprache, nebst Episoden des Ramajan und Mahabharat in genauen metrischen Übersetzungen aus dem Originaltexte und einigen Abschnitten aus den Veda's*) という著書を公けにしました。これは動詞の語尾変化を取り扱って、表題にある色々な言語の変化が起源を同じくしていると主張したものでした。

§61 この表題から判りますように、ボップにとってはサンスクリットが研究の中心でした。すなわち、全てはサンスクリットとの比較において論じられたのです。それはサンスクリットが最も古い言語であり、それだけ源に近いと考えられていたからです。この黎明期の比較言語学者は、言語の歴史を古い方へと遡っていくと、起源にたどり着くと素朴に考えていた節があります。確かに起源に到達するためにはなるべく古い形を知る必要がありますが、そのためには個々の言語の音声の辿ってきた変化の歴史を知ることが必要です。

しかしそれだけでは起源に到達することはできません。なぜならある程度古い時代に遡ると、文献がなくなってしまうからです。この問題が解決できなければ、比較言語学は学問にはならず、単なる推測の域を出ることができ

なくなります。

§62 碩学といわれるアントワヌ・メイエ (Antoine Meillet 1866-1936) はポップについて、次のようにいっています。

彼は殆ど専ら形態論に専念しており — それは実際言語の最も安定した要素ではあったが — 形態論の中では変化語尾の研究に専念していた。しかし彼は音声の発達とそれを支配する法則の研究を無視した。彼は形式の使用法についても文の構造についても研究しなかった。

ポップの後に残されたのは、一つ一つの言語の発達を綿密に調べ、歴史音声学、語形と文の使用に関する理論を作り、厳密な法則を立てることであり、また特に彼が追い求めたところの、古代から引き継がれた(言語の)起源に関して彼自身が提唱したもの以上の推断を、取り除くことであった [17, pp.459-460]¹。

この最後の部分は、科学的な手続きを経ずに、いわば推量によって言語の起源を論じることを戒めたものでした。

2. ラスムス・ラスク

§63 一方これより2年前に、デンマーク人のラスムス・ラスク (Rasmus Kristian Rask 1787-1832) がデンマークの学術協会 Videnskabernes Selskab の懸賞論文に応募して受賞した、比較言語学についての論文がありました。『古ノルド語ないしはイスランド語の起源についての研究』(*Undersøgelse om det gamle nordiske eller islandske Sprogs Oprindelse*) がこれです。

彼は単語の一致というものは、たとえば外来語のように、後になって別の言語から借用されることがしばしば見られるので、これが一致したからといって必ずしもそれらの言語が同じ起源を持つとは限らないこと、および文法上の一致のばあいにはそういう借用の可能性が極めて少ないので、信頼性が高

¹Il s'est attaché presque exclusivement à la morphologie — qui est en effet l'élément le plus stable de la langue — et, dans la morphologie, à l'analyse de la flexion; mais il a négligé l'étude de l'évolution phonétique et des règles qui y président; il n'a examiné ni l'emploi des formes, ni la structure de la phrase. Après Bopp, il restait à suivre de près le développement de chaque langue, à constituer la phonétique historique, la théorie de l'emploi des formes et de la phrase, à poser des règles rigoureuses, et surtout à éliminer les spéculations sur les origines, où Bopp poursuit des idées anciennes plus qu'il n'est un initiateur.

いことを主張しました [67, pp.85-86].

§64 更に彼は従来の学者が音韻の側面に余り注意を払っていないことに対して、音韻変化の法則が多く of 基本的な語に対応として見られるときには、それらの言語が同じ起源を持つ可能性が高くなるともいっています。

この主張の正しさは今でも変わってはいません。これはポップの論文とは全く独立に書かれたものでしたが、公刊されたのはポップより2年後れた1818年でした。

先程述べたメイエは、ラスクについて次のように評しています。

ラスクはポップに較べてサンスクリットを導入しないという重大な欠陥を持つてはいたが、彼は比較する言語の起源的な同一性を示したものの、初原的な形を求めるといふむなしい試みを行おうとはしなかった。彼は「イスランド語の全ての語尾がギリシア語とラテン語のうちに多少とも明瞭に認められる」ことを証明することで満足した。この点で彼の書物は、ポップのものよりもより厳密で現代的である (*op. cit.*, p.460)²。

3. ヤコブ・グリム

§65 ラスクは、音韻変化の規則性について、注目しなければならないと主張しましたが、この考えを引き継いだのが、ヤコブ・グリム (Jakob Grimm 1785-1863) でした。ヤコブ・グリムには一つ違いの弟ヴィルヘルム (Wilhelm Grimm 1786-1859) がいました。早くに父を亡くした兄弟は、法律で身を立てようと考えて、マールブルグ大学で法律を学びました。兄弟は、当時有名な法学者だったドイツのサヴィーニ教授 (Friedrich Karl von Savigny 1779-1861) の学説に深く影響を受けました。

§66 教授は18世紀の啓蒙時代が歴史的な観点を見失って法を単なる規則

²Rask a vis-à-vis de Bopp la grave infériorité de ne pas faire intervenir le sanskrit; mais il démontre l'identité originelle des langues qu'il rapproche, sans se laisser aller à de vaines tentatives d'explication des formes primitives; il est satisfait quand il a pu constater que «chaque terminaison de la langue islandaise se retrouve plus ou moins clairement en grec et en latin», et, à ce point de vue, son livre est plus rigoureux, plus moderne que ceux de Bopp.

と考えてきたとしてこれに反対し、法というものは優れた個人が考え出したものではなく、民族の精神に深く根ざしたもので、民族と分ちがたく結びついたものであるとして、歴史法学を打ち樹てました。法律というものは、従って歴史的な観点から研究しなければならないというのでした。

グリム兄弟が、主としてドイツの民謡、伝説、物語などを蒐集したのは、このような民族精神と歴史という二つの観点が結びついたのだと考えれば、良く理解できます。世界的に有名になった「グリム童話」はこの二人の業績です。後に二人は共にゲッティンゲン大学の教授になりました。

一方、兄のヤコブ・グリムは、民衆の中に宿る民族精神の探求という立場から言語の研究を行いました。1819年に第1版が出た『ドイツ文法』*Deutsche Grammatik* という大著がその成果でした。

§67 高津春繁はこれについて次のようにいっています。

かれはいわゆる文語としての言語に対して、方言の重要性を認め、ホメーロスの叙事詩の誕生、中世バラッドの生成に働いたのと同じ力が言語の生成にもあずかって力ありとし、方言中に保存されている要素の研究に努力した。かれはその文法の序文において、文法家の課題は「言語の休むことなき時間的空間的に変化する要素を確認すること」にありとし、「一般的なる論理的概念に対して文法家は敵である。それは外面的な厳密さと緊密さを持っているが事実の観察を阻害する」。かくしてかれは古典的文法の最大の謬見たる規範文法の観念を破り、純粋に言語事実そのものの記述を求めると同時に、言語の変化という事実を目をむけて、個々に文法は言語のある層の記述であるか、あるいはその変遷の状態の記述である他はないという、史的な観点を確立したのである [59, p.33].

§68 要するに高津がここで言いたいのは、言語の研究は、どの使い方が正しいというように使い方を指図する「論理的」な「規範文法」を作ることではなく、実際に色々な人々が、色々なところで使われている言葉を調べ、その歴史的な変化をはっきりと記述する事であるということです。そうすればその中で言語の変化の法則が見つけれられるだろうと、グリムは考えました。そして実際、彼はゲルマン語の音韻が変化する一つの法則を見つけました。これは今でも「グリムの法則」と呼ばれているものです。

先に比較言語学のところで、比較を行おうとすれば、まずその前に、言語

の歴史を知らなければならぬと言いましたが、グリムのこの態度はまさにその方向へ進む一歩だったということが出来ます。

4. アウグスト・シュライハー

§69 19世紀の中頃、1859年にチャールス・ダーウィン (Charles Robert Darwin 1809-1882) の『種の起源』が発表されました。

またこのころには自然科学、特に生物学が、著しい発展を見せるようになってきました。人々は哲学的な思索よりも、具体的な事実に興味を示すようになりました。

ダーウィンの『種の起源』は、それまでの世界観を変える大事件でした。神が自分の御姿に似せて作られたはずの人間が、こともあろうに猿から進化したという考えは、地動説と同じくらいに衝撃的であったと思われます。ダーウィンの思想が、当時のあらゆる学問に対して深刻な影響を与えたことは、たやすく想像できます。

その結果、時代の精神は「歴史主義」に傾いていったと考えられるのです。

§70 「時代の精神」というのがどうして起ってくるのかと考えてみますと、それは研究する人々が自分と同時代のあらゆることがらに、絶えず身を曝しているからだと思われます。

人は霞の中で対象を眺め、研究するわけではありません。生活や経験、よそから得た知識をもとに対象を研究し、ものを考えるのです。ですからその考えには絶えずその時代のあらゆることがらが反映しているのです。だからこそ、よく似た考え方が独立して同じ頃に現れるということも、しばしば見られるのです。

こういうことがあちこちで起ってくると、それが一つの大きな「時代の精神」となって、更に人々の心に作用するようになるのだと思います。19世紀の歴史主義という「時代の精神」もそういうものだったと思われます。

§71 もちろんそこにはある種の偶然もありましょう。たとえばこのころに自然科学が発展し、生物学の研究が発展してきたこと、言語の比較という

考えが生れてきたこと、世界の歴史を世界精神の実現のプロセスと見るヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel 1770-1831) の哲学が現われたことなど、多くの現象がこのころに集中してきていたと思われます。そのような状況を決定的に方向づけるきっかけを作ったのが、ダーウィンの考えだったのだと思われるのです。

ダーウィンは、いわばだんだんと濃縮して来つつあったガスの固まりの中の一つの火花だったということもできましょう。

§72 このような状況は比較言語学にとって極めて好ましいものだったといえます。なぜならば、先に見ましたように比較言語学は色々な言語を比較することによってその共通の祖先の状態を知ろうとするものから、本質的に歴史性を持った学問だからです。

しかしそれと同時に当時の生物学の発達、およびこれと呼応するダーウィンの学説などによって、言語を生物と同じような有機体と見る考え方も広まりました。これは誤った考え方ですが、当時の研究者のかなりの部分にこの考え方が見られたこともたしかでした。この考えはやがて批判の対象になり、急速に克服されていきますが、いずれにせよ、言語の研究に歴史主義と同時に有機体説が持ち込まれたことが、この時期の一つの特徴であったということができましょう。

§73 このような状況を最もよく表していたのはアウグスト・シュライハー (August Schleicher 1821-1868) でした。

彼は哲学と植物学を学びましたので言語が有機体だという考えにとらわれていました。彼は有名な『印欧語比較文法提要。印欧祖語、古代インド語、古代イラン語、古代ギリシア語、古代イタリア語、古代ケルト語、古代スラヴ語、リトアニア語および古代ドイツ語の音声、形態論の概要』 (*Compendium der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen. Kurzer Abriß einer laut- und formenlehre der indogermanischen Ursprache, des altindischen, altiranischen, altgriechischen, altitalischen, altkeltischen, altslawischen, litauischen und altdeutschen.* Weimar 1861) を出版しました。

彼は言語を生命ある有機体 Organismus だと考え、生物のように進歩し成

長し、やがて死滅するものだと考えました。

§74 同時に彼はヘーゲルの哲学にしたがって、印欧語は歴史時代以前に完全なものに発展したのであって、歴史時代に入ってから言語は、どんどん衰退しつつあるのだ、と主張しました。そして印欧語の源になる「印欧祖語」Urindogermanisch から、ちょうど動植物の系統樹のように、さまざまな下位言語が生れたと考えました。

§75 しかしシュライハーの特徴は、彼が他の研究者のように、さまざまな言語の単語や語形が似ていて、共通の源から発生したものに違いないということを指摘するだけではないところにありました。

彼はもしこのような類似が音韻法則に照らして完全なものであったとすれば、似ていないところは、それぞれの言語の内部で起った独自の音の変化によるものだろうと考えたのです。そこで彼はこれらの全ての言語の共通の源になる、既に実際には存在していない言語に遡ってみることが必要だと考えました。

§76 しかし言語の比較は先にもいいましたように、当時はまだ恣意的な推論なしには、言語の歴史を遡ることによって祖語の状態を知ることが、不可能な理論水準にありました (cf. 33 頁)。たとえばサンスクリットの *ajras* 「牧地、野原」、ギリシア語の *agrós* (ἄγρός), ラテン語の *ager* 「野原、耕地、牧地」(cf. E. *agri-culture* 「農業」), ゴート語の *akrs* (cf. E. *acre* 土地、耕地、エーカー) はどれも「耕地、牧地、野原」などを意味していて、形もよく似ています。

ここから黎明期の学者たちは最初の音は皆 *a* だから **a* だろう。次の音はギリシア語とラテン語が *g* だから **g* だろう。ゴート語の *k* はもともと **g* だったのだろう。つぎの *r* は問題がない。その次はラテン語では *e* が挟まっているけれども恐らく **r* だろう。最後のものもおそらく **s* だろう。そうすれば *s* の前の音は何だろうか。ラテン語、ゴート語は *s* の前には母音がなく、サンスクリットでは *a* で、ギリシア語では *o* だが、サンスクリットの方が「古い」形を残していると思われるから **a* の可能性が高い……というよう

に考えて、起源になる語の形は *agras であろうというように考えたのだらうと思われまゝ (cf. [67, pp.143-145])³ .

彼はこの方法を使って彼が信じたところの「印欧祖語」を使って寓話を作りさえしたといひます (cf. *Beiträge zur vergleichenden Sprachforschung*, V. 1868, pp.206-208.)[59, pp.38].

³*agras のようなアスタリスクは比較言語学で再構成した祖語の推定形を表すのに用いられていますが、この表記の仕方を考えたのは、シュライハーだといわれています。

第五章

ことばの研究 V 青年文法学派と比較言語学

1. 音韻対応

§77 前章で述べたような黎明期を経て、いわゆる「青年文法学派」Junggrammatiker といわれる人々が現れてきました。

主だった人々はアウグスト・レスキーン (August Leskien 1840-1916), ヘルマン・オストホーフ (Hermann Osthoff 1847-1909), カール・ブルックマン (Karl Brugmann 1849-1919), ヘルマン・パウル (Hermann Paul 1846-1921), ベルトルト・デルブリュック (Bertold Delbrück 1842-1922) などでした。彼らは70年代には、主としてドイツのライプツィヒ大学を中心として活動していましたが、その後分れてさまざまところで活動するようになりました。

彼らはシュライハーなどの学説、特にその有機体説、退化説を批判しましたが、特に問題になったのは、推量による祖語の再建という方法論そのものであったと思われます。

§78 ブルックマンはオストホーフと共同で出版した『印欧諸語の領域における形態論的研究』(*Morphologische Untersuchungen auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen*, Bd.1-6. 1878-1910)において次のように述べています。

比較言語学は主として祖形の助けによって言語の生、その発展および変容についての一般的な理解を得つつある。しかし……もちろん仮説的な構築物であるこれら印欧語の祖形は、果してそれらが、言語の形式のその後の発展に関する正しい考え方に一致しているのだろうか、またそれらの再構築に際して正しい方法論的な原理が守られているのだろうか。……歴史以前の姿を常に仮説と再構築だけに基づく形ではなく、またインド諸語、イラン諸語、ギリシア諸語などの伝存する最古の形にも基づかないで、言語形式の発展の特徴の全体的な概観を描き出さなければならない。既知のものから出発しそれから未知のものに進まなければならないという原則に従って、この課題は、歴史を長い時間的な広がりの中で跡づけることができ、その出発点を我々が直接知ることができるような事実を

もとに、解決しなければならない [32, p.96].

§79 このようなブルックマンによる方法論の批判には、彼が原理的に推論に頼る必要のない、祖語の再構築の方法を見いだしたことがあったと思われます。

メイエはこれについて次のように述べています。

1876年以降、ブルックマンは印欧語の音韻は対応 correspondances によって決定できることを示した。skr. a, gr. α, lat. en, got. un, lit. iñ, uñ, および skr. a, gr. α, lat. em, got. um, lit. iñ, uñ は skr. ṛ が r を含む要素において果すのと同じ役割を n と m を含む形態論的要素において果している [17, p.473].

§80 これだけ見ると何のことか判らないと思いますが、これはメイエが印欧祖語の *n と *m とがそれぞれの言語でどういうようになっているかを示したものです。これを表にしてみますと次のようになります。

たとえば印欧語の否定の意味を表す形態素は *ne- です。印欧語では、後でいいますが、∅ (zero) : e : o という母音交替があり (48

印 欧 祖 語 の 鼻 音					
IE	skr.	gr.	lat.	got.	lit.
n/ ^o n	a	α	en/in	un	iñ, uñ
m/ ^o m	a	α	em/im	um	iñ, uñ

頁参照), ∅ をゼロ階梯, e を E 階梯, o を O 階梯と呼びます。そうすると *ne- のゼロ階梯は *n になります。これは英語などのゲルマン語に属するゴート語では、表から un となっています。またラテン語では en/in, ギリシア語では a となります。

したがって、たとえば英語の unknown の un-, ギリシア語源の agnosticism 「不可知論」の a-, ラテン語源の incognito 「知られずに、お忍びで」の in-などは元々同じ語だったのです。

§81 このようなことは何を意味するのでしょうか。もし印欧祖語にたとえば a という音があったと仮定してみます。もしこの音が A という言語では「規則的に」a₁ という音に変化し、B という言語では a₂, C という言語

では同じく規則的に $a_3 \dots$ というように変ったとします。そうすると A という言語の a_1 という音には規則的に B という言語の a_2 という音が対応し、C という言語には a_3 という音が対応するはずです。

つまり歴史的な縦の変化が言語毎の横の変化に反映されることとなります。これを対応といえます。

もしこのような規則的な対応が個々の言語に起ったならば、それは祖語の同じ音に変化したものに違いありません。すなわち同じ祖語から発達した言語 (同系言語) だということになります。

§82 そうすると次はこれらのどの音にも変化する可能性のある音は何かという問題の立て方ができます。

こういうようにして祖語の音を推定することができます。この推定は途中で文献がなくても理論的に可能ですから、それまでのいわば主観的当てずっぽうな推測とは違います。このような方法が見つかったことによって、比較言語学は強力な手段を手にするようになったのです。逆に言えば見たところとてもよく似た言語であるように見えても、このような対応が存在しなければ、同系だということとはできません。

§83 こういうようにしてまず音 (正確には音韻または音素といえます) が決定され、それによって音韻の体系が再構成されます。それから次に語根、ついで語尾というように、順次形態論に属する要素も再構築されていきます。

たとえば Skr. gam- 「行く」、Gr. bainō (βαίνω) < *baniō, Lat. veniō 「来る」、Germ. kam- 「来る」などは形がとても違うのですが、それぞれがきちんとした対応を持っているので、同じ印欧祖語の *g^wem- という語根からできていることが判ります。

おなじように、Skr. jīv- 「生きる」、Gr. bi(w)o- (βίος) 「生」、Lat. vivō 「生きる」、vita 「生命」、Sl. živ- 「生きる」などにも対応が立って *g^wiw- という語根からできていることが知られています。

英語の vitamin の vita-, survive の -vive, あるいは biochemistry 「生化

学」の bio- などに見られるとおりです (付録 A 参照)。

§84 このようにして印欧比較言語学は 19 世紀の言語学の主流になりました。これは今見ましたように、ほとんど数学的ともいえるような厳密な手続きで研究するものでしたから、この比較言語学の成立によって、言語学がはじめて理科系の学問と同じ厳密科学 strict science であると認められるようになったのです。

古典的な比較言語学の体系はアントワヌ・メイエ (Antoine Meillet 1866-1936) に至ってほぼ完成したと見られます。「古典的な」というのは、二十世紀の終り頃に起った内容的類型学以前という意味です。これ以前にはメイエの完成した印欧語比較言語学は、少なくともその大枠においては殆ど完成したものと見なされてきました。しかしその後これは内容的類型学の考え方を取り入れて急速な発展を見せつつあります。

2. 印欧語の音韻組織—印欧祖語の音韻の種類

(1) 子音

§85 今いったような対応表を作って印欧祖語の音韻を措定していった結果、音韻には次のような種類のあることが判りました。

まず第一に子音です。これはメイエなどの古典的な体系では、破裂音と擦音に別れますが、破裂音には無声無気音、有声無気音、有声有気音の三種類があるとされました。調音部位では唇音、歯音、喉音、喉唇音が区別されます。擦音は *s だけで *z は *s の位置による変化に過ぎないとされています。

印欧祖語の破裂音			
部位	無声音	有声音	有声有気音
唇音	*p	*b	*bh
歯音	*t	*d	*dh
喉音	*k	*g	*gh
喉唇音	*kʷ	*gʷ	*gʷh

§86 喉唇音というのは唇を丸めて同時に [k] の音を発音する「二重調音」double articulation と呼ばれるものです。[k] の仲間に [k] と [kʷ] との二つの音韻を措定したのは、言語によって対応が異なるためです。例として無声子音を表にすれば以下ようになります。

印 欧 祖 語 の 無 声 子 音											
IE	Hit.	Tokh.	Skr.	Av.	OCS	Lit.	Arm.	Gr.	Lat.	Irl.	Got.
*p	p	p	p	p	p	p	h(w)	π	p	ø	f(b)
*t	t	t(c)	t	t	t	t	th	τ	t	t	þ(d)
*k	k	k(ś)	ś	s	s	š	s	χ	c	c	h(g)
*k ^w	ku	k	k(c)	k(č)	k(č,c)	k	kh	π(τ)	qu	c	hw(w)

§87 ここでIEは印欧祖語, Hit.はヒッタイト語, Tokh.はトカラ語, Skr.はサンスクリット, Av.はアヴェスタ(古ペルシア語), OCSは古教会スラヴ語, Lit.はリトアニア語, Arm.はアルメニア語, Gr.はギリシア語, Lat.はラテン語, Irl.はアイルランド語, Got.はゴート語です。ゴート語はゲルマン語族に属する言語で, ドイツ語や英語の仲間ですから, 英語の音韻に最も近いといえます。

§88 表を見ますと*kと*k^wとの対応がはっきり異なっていることが判ります。また印欧祖語の*kの音韻は, サンスクリットからアルメニア語までの系統の音韻に対応し, その他の言語のkの音韻とは異なっています。これは印欧祖語が下位言語(下位方言ともいいます)に分裂する前に, 既に存在していた方言的な差異が反映しているのだと考えられています。sの系統の言語群をアヴェスタの「百」を表す語を使ってサタム *satam* 語群といい, その他のものをラテン語の「百」を表す語を使ってケントウム *centum* 語群と呼びます。印欧祖語の形は*k₁mt₁とされています。

英語は *hund-red*, ドイツ語は *Hund-ert* で, ゴート語の音韻と一致し, *centum* 語群に属しています。英語についていえば, 印欧祖語の疑問詞は*k^w-で, 指示詞は*t-でした。これを表で見るとゴート語ではh(w)およびþです。þは発音記号では[ð]に当りますから, 英語の *wh-at*, *th-at* などに变化したことはすぐに分ります。

印欧語の音韻対応表は付録Aにまとめてありますので, 適宜参照して下さい。

(2) 母音

§89 印欧祖語の母音は短母音 *e, *o, *a および長母音 *ē, *ō, *ā があります。

この外、厳密には母音とはいえませんが古典的な比較文法で *ə と表すものがあります。従って母音の体系は右の図のようになります。

印 欧 祖 語 の 母 音 の 体 系						
*e	*o	*a	*ə	*ē	*ō	ā

§90 これらの母音の対応表は次のようになります (付録 A の i 頁 参照).

母 音 の 対 応 表									
I.E	Gr.	Lat.	Celt.	Germ.	Ind.Ir.	Lit.	OCS	Arm.	Hit.
*e	ε	e	e	e	a	e	e	e	e/a
*o	o	o	o	a	a	a	o	o	a
*a	α	a	a	a	a	a	o	a	a
*ə	ε/o/α	a	a	a	i	a	o	a	a?
*ē	η	ē	ī/ē	ē	ā	é	ě	i	a(aa)
*ō	ω	ō	ā/ū	ō	ā	ŭ/o	a	u	e(ea)
*ā	ā	ā	ā	ō	ā	o	a	a	a(aa)

§91 ここで Celt. となっているのはケルト語派で、破裂音などの表のアイランド語 (Irl.) がこの派に属しています。

また Germ. となっているのはゲルマン語派で、破裂音などの表のゴート語 (Got.) のほか、英語、ドイツ語などがこれに属しています。

Ind.Ir. となっているのは、インド語派とイラン語派とをまとめたものです。インド語派にはサンスクリット (Skr.) の他、ヴェーダの言語などが属していますが、イラン語派にはアヴェスタの言語の他、現代語ではペルシア語、クルド語、アフガン語 (プシュトゥー語) などが属しています。

§92 これらの表を見ると、次のようなことに気が付きます。

- 1) サンスクリットの属するインド・イラン語派が、印欧祖語の母音の違いを無視して、a と ā にしてしまっていること。
- 2) 最も正確に祖語の母音体系を受け継いでいるのはギリシア語だけであること。
- 3) 共にバルト・スラヴ語派をつくっていて最も近い関係にある OCS と Lit. は、OCS が *a と *o, *ā と *ō とを混同して短音は o, 長音は a にし

ているのに対して、リトアニア語はスラヴ語とは逆に長音を a, 短音を o にしている点が対照的であること。

- 4) *ə を他の母音から明確に区別しているのはサンスクリットの i だけであること。なお, *ə は *schwa indogermanicum* と呼ばれています。

(3) ソナント

§93 ソナントとよばれているのは、子音と母音の間間的な音を表すものです。

子音は単独ではほとんど聞こえないような音声しか発しません、後ろに母音があると、はっきりした音として認識されます。それで子音は *con-sonant*, すなわち「共に (*con-*) 音を立てるもの (*sonant*)」とよばれるのです。

しかしソナントは「音を立てるもの (*sonant*)」という名が示しているように、響きが相対的に高いというその中間的な性質から、前や後ろに母音があれば原則として子音として働き、子音に挟まれたときには母音として働いて、音節を作ることができます。*l, *r, *m, *n がこれです。また *y や *w もソナントに属しています。*y や *w は子音として働くときの形で、母音として働くときは *i, *u と表記されます。

その他のソナントは母音として働くときの形を持っていませんので、*j, *r, *m, *n のようにして、これを表しています。子音としてのソナントの体系は、次の表の通りです。

子音としてのソナントの体系					
*y	*w	*r	*l	*m	*n

子音として働くソナントは、ほとんどそのままか、あるいは少し変化した形で受け継がれています (付録 A の ii 頁 参照)。

§94 これに対して母音として働くソナントのばあいは、母音に極めて近い *i, *u を除けば、かなり複雑な反映の仕方をしています。先にソナントは子音に挟まれたときは母音として働き、音節を作る (音節の核になる) と言いましたが、母音の前の位置なのに、音節を形成するばあひ、従って母音とし

て働くばあいがあります。このため母音として働くソナントには二つの種類があります。

1. 子音の前で母音として働くもの
2. 母音の前で母音として働くもの

子音の前で母音として働くソナントの対応表は付録 A の ii 頁の通りです。子音の前で母音として働くソナントは、長音も持っています。これは、*ī, *r̄, *m̄, *q̄ などとして表されます。*i と *u の長音はいうまでもなく *ī, *ū として表されます。これらの長音を使ってメロディーを口ずさむことができるのは、これらの音の「響き」が高いためです(付録 A の ii 頁参照)。

§95 母音の前なのにソナントがどうして母音として働くばあいがあるのかは疑問なのですが、本来は *el/*ol, *er/*or, *em/*om, *en/on であったものが、印欧祖語の段階で既に弱まって、「渡り音」をともない、音節の核になったものだと説明されています。たとえば *el/*ol > *al/*^ol, *er/*or > *ar/*^or のようなものです。

いずれにしてもこれらのソナントは子音の前にあるソナントとは異なった対応を示しています(付録 A の iii 頁参照)。

(4) 二重母音

§96 二重母音というのは、例えば英語の *eight* とか、*fight* の [ei], [ai] のように、二つの母音がつながって一音節をつくるものをいいます。

普通は二重母音は口の開きの小さいもの、すなわち [i] とか [u] のようなものが、口の開きの

二重母音						
	*i	*u	*l	*r	*m	*n
*e	*ei	*eu	*el	*er	*em	*en
*o	*oi	*ou	*ol	*or	*om	*on
*a	*ai	*au	*al	*ar	*am	*an
*ē	*ēi	*ēu	*ēl	*ēr	*ēm	*ēn
*ō	*ōi	*ōu	*ōl	*ōr	*ōm	*ōn
*ā	*āi	*āu	*āl	*ār	*ām	*ān

の大きいものの後に来ます。印欧語のばあいにもこの原則は守られています。現代語のばあいよりも二重母音の範囲が広く「母音 + ソナント」と定義されています。母音の項で言いましたように、印欧語の母音は *a, *ā, *e, *ē,

*o, *ō に限られていますから、結局表に見られるようなようなものが二重母音ということになります(短母音とソナントとから成るものの対応表は付録 A の iii 頁 参照)。

§97 第一要素が長母音であるものは、理論的には十分可能なのですが、インド・イラン語派に属するサンスクリット、アヴェスタの他はギリシア語に見られる程度で、他の言語にははっきりとした対応が得られません。サンスクリットとアヴェスタは表からも明らかのように、印欧祖語の *e/*ē, *o/*ō, *a/*ā を [a] の音色に変えて *a/*ā としてしまいましたが、それでもサンスクリットとアヴェスタとの間には少し対応の違いが見られます。これについては付録 A に表を載せてあります(付録 A の iv 頁 参照)。

(5) 印欧祖語の *s

§98 その他の子音で確実に再構成できるのは *s だけだといわれています。これに対して *z は独立した音ではなく、*s がたとえば有声子音の前などで有声化したものに過ぎません。語頭の *s はギリシア語(およびケルト語の一部において) h- に変ります。

§99 以上が大まかな音韻対応です。もちろん個々の条件によって対応がいくらか異なるばあいがありますが、詳しいことは省略します。

要は、比較言語学というものが、漠然と色々な言語を比べてみて何かを言うというようなものではなくて、厳密な手続きによって祖語を再構築しようとするものだということを、判ってもらふ必要があるということなのです。

比較言語学の発達によって、それまでのいわば思いつきに依存したような、思弁的な言語の学がはじめて「科学」といえる厳密さを持つことができたのです。

(6) 母音交替

§100 印欧語の音韻対応によって印欧祖語の語(正確には形態素)が再構築されましたが、それにもなつて印欧祖語には母音交替があることが判ってきました。前にアラビア語について言った(cf. 21 頁)のと同じように、印

欧祖語でも形態素に含まれている母音が、文法的な意味を持って交替していたということが判ってきたのです。

これは部分的に古代ギリシア語に残されています。ギリシア語の「残す」という動詞 *leipō* についてみると、これは次のようになります。

leipō (λείπω) 「残す」

leip-ō (λείπ-ω)	e-lip-on (ἐ-λιπ-ον)	le-loip-a (λέ-λοιπ-α)
現在形	アオリスト形	現在完了形

すなわち、印欧祖語では、文法的な意味の違いにしたがって次のような母音交替が行われていたのです。

	E 階梯	O 階梯	ゼロ階梯
短母音	*e	*o	*∅
長母音	*ē	*ō	*ə

§101 これらの階梯を「母音度」vocalism といいます。そして通常 E 階梯の形を語根の代表形とするのが慣用となっています。

以上、印欧語比較言語学の概要を述べましたが、いくつかの例を考えてみましょう。付録 A の表を眺めながら見てください。

*bher- 「運ぶ」: Gr. pher-ō (φερ-ω), Lat. fer-ō, Skr. bhar-āmi 「運ぶ」, OCS ber-q 「取る」, Arm. ber-em 「運ぶ」, Got. baír-an, (cf. E. bear).

sē- 「植える」: Lat. sē-men 「種, 蒔かれたもの」 (-men は中性名詞「もの」をつくる接尾辞), Irl. si-l < *sē-l, OCS sēmę сѣмѧ, (cf. German Sa-men, E. see-d).

*pā-/pə 「護る」: Gr. pa-tēr (πα-τήρ) < *pə-tēr 「父」, Irl. a-thir, Skr. pitár-, Got. fa-dar, (cf. E. father, German Vater).

*ped-/*pod- 「足」: Gr. pous < pōs, podos πούς < *pod-s 「足」, Lat. pēs < *ped-s, pedis (cf. E. pedal, pedestrian, R. пьедестал), Skr. pad-, Got. fōtus, (cf. E. foot).

* * *

§102 以下のものも、対応表によって祖語の形が分りますが、これについ

ては述べません。興味のある人は、付録の表をみながら考えてみてください。

*ten- 「延す」: Lit. tėvas 「薄い, 細い」, Skr. tanús 「薄い, 細い」, Gr. tanus τανός 「長い」, Lat. tenuis 「薄い, 細い」, OCS тънѣкъ < *t^onu-ko 「薄い」, (cf. E. tend).

*kerd-/*křd- 「心臓」: Gr. kardia καρδία 「心臓」, Hom. κῆρ, Lat. cor, cord-is, Ir. cride, Lit. širdis, OCS срѣдѣце > сердце, (cf. E. electrocardi-o-graphy 「心電図」, cardinal 「極めて重要な」, cordial 「心からの」).

*nebh-: Skr. nábhas 「雲」, Gr. nephos νέφος 「雲」, Hit. napiš 「空」, OCS нѣбо 「空」; cf. Gr. nephelē νεφέλη 「雲, 靄, 霧」, Lat. nebula 「靄, 霧, 水蒸気, 霞」, OSaxon nebal 「雲」, (cf. E. nebula, nebular, nebulous etc.).

*dhūm-: Skr. dhūmās 「煙」, Lat. fūmus, Lit. dúmai, R. дымъ, (cf. E. fume, fumigate).

*medhu 「蜜」: Lit. medūs, Skr. mādhu 「蜜酒」 > mādhuṣ, madhurás 「甘い, 甘美な」, Av. mađu- 「蜜酒」, Irl. mid 「酒」, Gr. methu μέθυ, OHG metu, (cf. E. mead).

*wegh- 「(乗って)行く, 運ぶ」: Lat. vehō 「運ぶ」, Got. ga-wigan 「動く, 振る」, OHG wegan 「行く」, Av. vazaiti 「旅行する」, Skr. vahati 「乗物で行く」, OCS везѣ > везу 「乗り物で運ぶ」 (cf. E. vehycle, wain 「荷馬車」, wag(g)on). O階梯: Gr. (w)okhos ὄχος 「(通常複数で)戦車」.

*domos 「家」: Gr. domos δόμος, Lat. domus, Skr. damas, OCS домъ, (cf. dome, domestic etc.).

*sed- 「坐る」: Lat. sedeō 「坐っている」, Gr. hezomai < *sed-y- ἕζομαι 「坐る」, Skr. asadat 「坐った」, Got. sitan, OCS сѣдѣти, (cf. E. sit, seat), ne-st 「巢」 < *ne-sd *ne- 「下に」 + *sd 「坐る」, (cf. Ne-ther-land).

*agros 「畑, 野原」: Gr. agros αγρός, Lat. ager, Skr. ajras, Got. akrs, (cf. E. agri-culture, acre etc.).

*genu /*gonu 「膝」: Gr. gonu γόνυ, Lat. gonu, Skr. jānu. (cf. E. knee).

*g^wiwoš /*g^wiwoš 「生きている」: Gr. bi(w)os βίος, Osc. bivus, Got. qius, OHG quek, cwic > E. quick 「生きている人, 生身」 (cf. the quick and the dead 「生者たちと死者たち」), Ir. beo, Skr. jīvas, OCS живѣ, (cf. E. bio-

logy).

*g^wem- 「行く」: Got. quiman, OHG queman > coman, Lat. ueniō 「来る」, Gr. bainō 「行く」 < *baniō βαίνω, (cf. E. come, con-ven-tion, inter-ven-e, inter-ven-tion).

*g^wen- 「女」: Gr. gynē γυνή, Got. qinō, qēns (> E. queen), Skr. jani- 「女, 妻」, Ir. ben, OPrus. genna, OCS жѣна, (cf. E. andro-gyn-ous 「半陰陽の」 < andro- 「男」 + gynē 「女」, gynecology/gynaecology [gáinikáledzi/dzínikólodzi/dzainikólodzi] 「婦人科」).

第六章

ことばの研究 VI 印欧語のなかま

1. 語族, 語派, 語群

§103 印欧祖語のように、さまざまな言語の「祖先」になった言語を「祖語」といいます。世界には印欧祖語の他に色々な祖語が考えられます。そういう祖語から分れてできた言語の全体を「語族」といいます。したがって印欧祖語から分れた言語の全体は「印欧語族」ということになります。

しかし印欧語族から別れた言語（これを「下位言語」とか「下位方言」といいます）は、ちょうどビッグ・パンのように一度に分れたわけではありません。まず始めは互いの交通が途絶えて少し異なった方言に分れ、やがてお互いに理解できなくなると、別の言語と認められるようになります。

このようなプロセスが始終起ってきます。印欧祖語から時代は少しずつれていますが、分れてできた中間的な「言語」を「共通語」とか「祖語」とかといいます。たとえば印欧祖語からまずバルト諸語やスラヴ諸語の祖先に当る言語が分れます。あるいはインド諸語イラン諸語の祖先に当る言語も分れてきます。このような中間的な「祖語」ないしは「共通語」をバルト・スラヴ共通語（祖語）とか、インド・イラン共通語（祖語）というようにいいます。

§104 このような中間的な「祖語」あるいは「共通語」から更に分れてできた言語をスラヴ・バルト語派、インド・イラン語派というようにいいます。したがって「語派」というのは、相対的な概念に過ぎません。スラヴ・バルト語派はやがてまた、スラヴ語派とバルト語派に分れます。このときの言語を「スラヴ共通語」、または「スラヴ祖語」および「バルト共通語」あるいは「バルト祖語」というようにいいます。スラヴ共通語はやがてまた二つの言語に分れます。東南スラヴ共通語と、西スラヴ共通語です。その中で東南スラヴ共通語は更に二つに分れ、南スラヴ共通語と東スラヴ共通語になります。

§105 このようにして生れた三つの共通語からさまざまな言語が生れてきます。これらの言語をまとめて東スラヴ語群、西スラヴ語群、南スラヴ語群

というようにいうのです。

このことから判りますように、一番始めの「祖語」、たとえば「印欧祖語」は客観的に決定できる、独立した、絶対的な概念ですが、その他の下位の中間的な「祖語」はどの段階の言語を「祖語」にするか、意見の違いの余地を残す、相対的な概念に過ぎません。それは一つにはいつの時期にお互いに理解できないようになったかという、言いかえればいつ独立した「言語」になったかという判定が難しいことによっています。

§106 共通祖語は、印欧祖語も含めて一例を除いては知られていません。したがってこれらの共通祖語は比較言語学によって再構成しなければなりません。実在している唯一の「祖語」はラテン語です。これはロマンス語派といわれるイタリア語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、ルーマニア語などの祖先に当たります。

こういう手続きを経て、印欧祖語がどういう風に分れていったかが、ほぼ明らかになっています。以下これら印欧語族に属する言語について簡単な解説をしておきましょう。

(1) ヒッタイト語

§107 1906年にトルコのアンカラの近くのボガズキョイ Boğazköy から、楔形文字の書かれたおびただしい粘土板が発掘されました。これはヒッタイト帝国の王たちが記したもので、紀元前 1500-1200 年くらいの間には作られたものとされます。これを 1917 年、チェコのプロズニー Bedřich Hrozný (1875-1952) が解読し、これが印欧語に属するものであることが分かりました。この言語が解読されたことをきっかけにして「ヒッタイト学」が生れ、さまざまなことが判ってきました。この言語を話していた民族は聖書の中に「ヘテびと」として現れるものですが、それまではどういう民族なのか分ってはいませんでした。

ヒッタイト語は印欧祖語が下位言語に分れていく最も早い時期に、祖語から分れたものだと考えられています。このことによって印欧祖語の内部の歴史が、ある程度までですが明らかになってきました。この作業は deep reconstruction

と呼ばれています。

(2) トカラ語

§108 トルケスタン地方から非常に近い関係にある二つの言語で書かれたテキストが発見されました。この言語は7世紀頃に用いられたものだと考えられ、多くの佛教関係のテキストから成っています。この二つの言語は「トカラ語 A」, 「トカラ語 B」と呼ばれています。これも古い印欧祖語の特徴の痕跡を保っています。

(3) インド・イラン語派

§109 この語派はインド語群とイラン語群に分れます。インド語群に属する最も古い言語はヴェーダ(吠陀)が書かれている言語です。時代としては紀元前1000年以前から紀元前数世紀までの言語であるとされています。それ以降のものは古典サンスクリットと呼ばれています。

一方イラン語群のなかで最も古い言語は、どこで話されていたかは分らないのですが、ギリシア人がゾーロアストレス (Zōroastrēs Ζωροάστρης) とよんでいた Zaratuštra, すなわちゾロアスターを教祖とする拝火教の聖典アヴェスタ Avesta の言語です。その最も古いものはガーサー Gāθā (雅歌) といわれる部分で、およそ紀元前1000-600年の間に書かれたものだとされています。

§110 もう一つはアヴェスタの言語とは異なった方言で、古代ペルシア帝国の言語です。これはダリウス1世 Darius (在位 BC522-486), クセルクセス1世 Xerxēs (在位 BC485-465), アルタクセルクセス Artaxerxēs (在位 BC465-424) などの王が岩に残した楔形文字の碑文によって伝えられているもので、古代ペルシア語と呼ばれ、紀元前520-350年頃のものとなっています。

この古代ペルシア語は紀元前400年頃から中期ペルシア語になりましたが、これは碑文の他アヴェスタの注釈に用いられて伝存しています。これはパーレヴィー語 Pāhlavī ともいわれます。

§111 インド語群には数多くの言語が属していますが、ヒンディー語が最

も有名で、公用語として使われています。

その他にはベンガル語、アッサム語、スリ・ランカで使われているシンハリ語、シンディー語、マラッティー語、グジャラッティー語、パンジャビー語等々があります。ロマ(ジプシー)の言語も、もともとはインド語群のパンジャビーに属していたと考えられています。

イラン語群に属している代表的なものはペルシア語ですが、その他にも多くの言語があります。たとえばタジクスタンのタジク語、アフガニスタンのプシュトゥー語、クルディスタンのクルド語などもこれに属しています。

(4) ギリシア語派

§112 ギリシア語派、あるいはイリュリア語派といわれる語派に属するものの代表はギリシア語です。ギリシア語で書かれた作品のうち、最も古いのはホメーロス (Homēros, Ὅμηρος, E. Homer) の二大叙事詩「イーリアス」(Ilias Ἰλιάς) と「オデュッセイア」(Odysseia Ὀδύσσεια) で、紀元前9世紀から8世紀頃に成立したといわれています。しかし碑文は紀元前14世紀に遡るということです。

ギリシア語はアッティカ方言、イオニア方言、ドーリア方言などの多くの方言から成っていましたが、紀元前5世紀末からアッティカ方言が一般的になりました。紀元前4世紀から紀元1世紀まで、ヘレニズムの時代にギリシア語がヘレニズムの地域全体の共通語のようになってから、ギリシア語は急速に簡単になって新約聖書に見られるコイネー(共通語)になりました。その後ローマ帝国の支配下に入ってから、アッティカ語を中心とする「先祖帰り」が起りますが、その後ビザンツ帝国の用語となり(中世ギリシア語)、現代ギリシア語に至っています。

そういうわけでギリシア語は印欧語の中でただ一つ、紀元前から現代まで生き延びた言語なのです。

§113 このほかクレタ島及びギリシア本土から発見された象形文字と線形文字の碑文があります。これは青銅器時代に遡るものだとされ、印章に記されて残っているものと、印章及び粘土板に記されたものがあります。古いものはミノア文化の第一期(BC 2100-1900)及び第二期(BC 1900-1700)に属し

ているといわれます。

ミノア文化の第三期 (BC 1700-1550) になると、これとは異なる線形文字で書かれたものが現れてきます (線形文字 A - Linear A)。この文字は現在のところ解読されていませんが、先の線形文字 (線形文字 B - Linear B) は解読され、印欧語に属し、ギリシア語に近い言語であることが分りました。そしてこの言語はクレタ島のミュケーナイ文化を支えた言語であって、紀元前 1200 年頃ギリシアのドーリア人がクレタ島を占領したとき以後消え去ったと考えられています。

(5) ゲルマン語派

§114 英語はゲルマン語派に属する言語ですが、この語派に属していて伝存する最も古い言語は、ウルフィラ Wulfila (Ulfila, Ulfilas ともいわれる、311 頃-382 頃) の翻訳した聖書の言語であるゴート語で、紀元 4 世紀頃のものです。この語派は、三つの語群に分れます。

I. 東ゲルマン語—ゴート語

II. 北ゲルマン語群

1. アイスランド語
2. ノルウェー語
3. スウェーデン語
4. デンマーク語

III. 西ゲルマン語群

A. 高地ドイツ語

1. ドイツ語
2. 上部ドイツ語 (オーストリア)

B. 低地ドイツ語群

1. オランダ語
2. アフリカーンス (南ア連邦) Afrikaans

C. アングロサクソン語群

1. 英語
2. フリジア語 (オランダ)

(6) ケルト語派

§115 ケルト語派はゲルマン語派やイタリア語派と密接に関係があった語派だと考えられています。この語派に属する人々は、かつては非常に強い勢力を持っていたと考えられ、紀元前の数世紀の間、イギリスのスコットランド、イングランド、アイルランドの外、スイス、スペインの一部、今のチェコのボヘミア地方、オーストリアなどに広がっていました。その一部はイタ

リア半島の北のポー川流域にも進出していたと伝えられます。

§116 大陸のケルト諸語は死滅してゆき、現在はアイルランド、スコットランド、マン島に残っているゲーリック語 Goedelic/Gaelic と、ウエールズ、フランスのブルターニュ地方のブルトン語 Brythonic/Britannic とがあります。イギリスのコーンウォール半島で話されていたコーンウォール語は1777年に最後の一人が死亡して死滅しました。またゲーリック語の方言であるマックスゲールといわれる言語も、1974年にこれを話す最後の一人亡くなって死滅しました。ゲーリック語とブルトン語の違いは、ゲーリック語が印欧祖語の *k^w を q としているのに対して、ブルトン語は p にしているところにあります。最も古い古アイルランド語は5-6世紀の碑文ですが、その他に8-11世紀に遡る聖書その他の文献があります。

§117 ケルト民族に由来する単語はたくさんありますが、O' が付く名字は、英語の of に当り、出身を表しています。また Mc または Mac は英語やドイツ語の son, sohn に当り、息子を表しています。cf. O'Connel 「コネルの子」、O'Henry 「ヘンリーの子」、MacArthur 「アーサーの子」、Johnson 「ジョンの子」、Mendelssohn 「メンデルの子」(Mendels の s は二格、すなわち英語の所有格の 's と同じです)。

(7) イタリア語派

§118 イタリアにはオスク語、ウンブリア語、エトルスク語など、色々な古代語があったことが知られていますが、いずれも断片的にしか残っていません。

ラティウムを中心としたラテン語がこれらの言語を吸収してイタリアの言語となっていくと考えられています。ローマが大帝国になり、ローマ帝国の州領に住み着いたローマ人の兵士たちの言葉として用いられていたラテン語がやがて変化してできた言語を、ひとまとめにしてロマンス諸語といいます。これらはいずれも土地土地の言語の

- | | |
|----|---------|
| 1. | フランス語 |
| 2. | イタリア語 |
| 3. | プロヴァンス語 |
| 4. | ポルトガル語 |
| 5. | スペイン語 |
| 6. | ルーマニア語 |

影響を受けて異なった発展をして、現在に至っています。

(8) スラヴ語派

§119 スラヴ語派は、現在でも有力な語派ですが、最も古いものは紀元9世紀にビザンツのテッサロニカ地方に住んでいたコンスタンティノス・キリルと兄のメトディオス兄弟が、当時大きな勢力を持っていた大モラヴィア帝国の王コツェルに請われて、今のチェコのパンノニア地方に行き、聖書を翻訳したものです。

これと彼ら兄弟の直接の弟子たちが訳した言語を、古教会スラヴ語といいます。現代のスラヴ語派はまず東方群と西方群、南方群に分れています。西方群が一番早く分れましたが、そのため東方群の言語と南方群の言語とは、西方群より比較的近い関係にあります。

A. 東スラヴ諸語	1. 大ロシア語 2. 白ロシア語 3. ウクライナ語
B. 南スラヴ諸語	1. ブルガリア語 2. セルビア語 3. クロアチア語 4. スロヴェニア語
C. 西スラヴ諸語	1. ポーランド語 2. チェコ語 3. スロヴァキア語 4. スロヴェン語 5. ソルブ語

(9) バルト語派

§120 バルト語派はスラヴ語派に最も近い語派です

から、バルト・スラヴ語派といわれることもあります。バルト語派に属しているのはラトヴィア語とリトアニア語、及び既に死語になっている古プロシア語です。このうちリトアニア語は、極めて古い形を残していますので、比較言語学にとっては重要な資料になっています。

第七章

ことばの研究 VII 一般言語学とフンボルト

(1) ひととなり

§121 19世紀には、言語の学をそれまでの哲学的な思索の対象から独立した学にした比較言語学と並んで、現代に至る言語研究に巨大ともいえる影響を与えた人物が現れました。ヴィルヘルム・フォン・フンボルト Wilhelm von Humboldt (1767-1835) がその人です。彼はプロシアの政治家で、さまざまな大臣の職に就き、特に外交の面では、ナポレオンが敗北した後のヨーロッパの運命を定めた有名なウィーン会議 (1814-1815) で、オーストリアの全権大使メッテルニヒ Klemens Metternich-Winneburg (1773-1859) と渡り合いました。メッテルニヒはプロシアとロシアに対抗する秘密条約をイギリス及びフランスと結んだ外交官です。

一方で彼は哲学、美学、文学、法律学などに関する著述を行う優れた文人でもありました。ドイツのフンボルト大学の創設 (1809) もまた、彼の手になるものでした。

§122 彼の弟のアレキサンダー Alexander von Humboldt (1769-1859) は有名な探検家・地理学者で、ヨーロッパの国々はもとより、中央アメリカ、南アメリカ、ウラル地方、シベリアなどの探検を行いました。彼の発見したもののなかで、彼の名が付けられたものに、フンボルトペンギン、今はペルー海流と呼ばれている、フンボルト海流などがあります。

この弟のもたらした言語資料も大きいと考えられますが、ヴィルヘルムは印欧語族に属する諸言語だけでなく、西はバスク語からインドの諸言語、マライ・ポリネシア語族に属する諸言語、アメリカの先住民の諸言語などに関して該博な知識を持っていたといわれます。

§123 日本語についての著作は、イエズス会会員のロドリゲシュ João Rodrigues (1561頃-1634) の『日本文典』(1604 長崎, 1620 Macao) が最初

のものといわれています。また 1738 年にはメキシコで出版されたオヤングーレンという神父 P. Oyanguren de Santa Ines, Molchor (1688-1747)¹の『日本の言語についての書』(*Arte de la lengua Japona, dividido en quatro libros segun el arte de Nebrixa*)があるとのことですが、日本には余り知られていませんでした。フンボルトが弟のアレキサンダーからもらったのはこのオヤングーレンのものだったといわれますが、実際にフンボルトが拠り所にしたのは、そのフランス語訳だったといわれています [19]。フンボルトはこれに拠って日本語についての論文も書いています (cf. [70, pp.601-665])。

(2) フンボルトの言語研究

§124 ロシアのニコライ・アンドレーヴィチ・コンドラーショフ Николай Андреевич Кондрашов は著書『言語学説史』[46]において、フンボルトの言語研究について次のように述べています。

フンボルトはさまざまな側面において教養のある人であり、トムセンの言葉によれば「ドイツの最も偉大な人々の一人」であった。彼は言語学者であり、文学者であり、哲学者であって、政治家であって、外交官であった。フンボルトの言語学の知識は異常なほどに広範なものであった。彼は印欧諸言語の知識だけでなく、バスク語からマライ・ポリネシア諸語及びアメリカのインディアン(ママ)の諸言語に及ぶ、世界のその他の諸言語の知識において際だっていた。……

彼はその諸労作によって理論的一般言語学の基礎を築いた。(観念論的な立場からではあったが)言語学上極めて重要な一連の諸問題を提起し、解決し、言語学のその後の発展に極めて深い影響を与えた [46, p.43]。

(3) 言語と社会

§125 こういう広い知識の上にフンボルトは言語についての論文を書きました。言語についての論文は、それ以外の分野における論文よりも数において少なかったといわれますが、彼の名を高からしめたのは、まさにこの分野の著作でした。特に晩年になって彼が執筆をはじめたものに『ジャワ島におけるカヴィ語について』*Über die Kawi-Sprache auf der Insel Jawa*がありますが、これは結局未完に終わりました。彼の死後、弟のアレキサンダーは兄の弟

¹ 生没年は国立国会図書館の記述に従った。例えば [70] を始めとして生年を 1668 年とするものも多い。

子であったヨハン・ブッシュマンに兄の遺稿の整理を依頼し、序説と思われるものを付け加えて 1836-1840 年に出版しました。この序説はアレキサンダーとブッシュマンが文中から言葉を選んで、仮に「人間の言語構造の種々性とその人間の精神的発達に及ぼす影響について」Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts という表題を付したものです。

この序文「人性言語の構造の種々性と人間の精神的発達におけるその影響について」は本文よりも有名になり、やがて独立して何度も刊行されるようになりました。

§126 フンボルトの思想にはカント並びにヘーゲルの影響があるとしばしば指摘され、難解な部分も多く含まれていますが、彼が何よりも優れている点は、数多くのさまざまな構造を持った言語についての知識に立っていたために、ヨーロッパの諸言語に見られる諸現象を普遍的なものとする先入観から相対的に独立した立場をとることができたというところにあると思われます。「相対的に」といっていたのは、やはりフンボルトといえども、完全に先入観から自由であったわけではありませんでした。たとえば彼は言語を孤立語、膠着語、屈折語に分類し、ヨーロッパの多くの言語が属している屈折語が最も完成したものであると考え、膠着語は屈折語になろうとして未だ成りきれないものであると考えていました。

この孤立語、膠着語、屈折語という分類は、1970 年代以降内容の類型学が姿を現すまで、言語の類型としてしばしば用いられていた概念です。

§127 しかし一方フンボルトは、言語というものがどのようなものであるかを、構造の違う、具体的なさまざまな言語の研究を通じて追求しようとしてきました。言語の普遍的な本質と、現実の言語の多様性、並びに人間の精神活動との関係を追求したといってもいいと思います。

そしてフンボルトは、人間がその根底において生まれつき共通に持っている言語能力というようなものを想定し、これを「一つの言語」eine Sprache と名付けました。フンボルトに代表される言語研究の流れは、言語の研究の全体に深い影響を与えました。これは比較言語学的な研究と並んで、20 世紀の

言語学を準備するものでした。

また言語というものを彼はその言語を話す民族の精神と堅く結びついたものと考えていました。これは一步間違うと国粋主義的なものになりかねない危険性を持っていますが、その反面これは言語が人間の社会と結びついてはじめて存在できるものだということを、述べているということができません。

§128 この点に関してフンボルトは次のようにいっています。

さて、言語というものは、人間性^{メンシュハイト}という深みの奥底から湧き出てくるものであるが故に、その言語が個々の民族の固有の作品であり、創造物であるなどを見倣すことは到底許されないところである。つまり、言語に自己活動性^{セルブステアティビタート}が備わっていることは我々にとって歴然たる事実なのであって、ただ、そういう自己活動性の本質が何であるかということが、説明し難いというだけのことである。そこで、言語というものを、こういった側面から考察してみると、言語は、人間の活動性の所産ではなくて、精神がやむにやまれずに自己を流出させたもの^{エグレス}ということになる。又、言語は、民族・国民^{ナチオーネン}の作ったものではなく、民族・国民の内的な運命^{グレンツ}に基づいて彼らに恵まれた天与の贈り物なのである。どの民族、どの国民をとってみても、どのようにして自らがその言語を形成したのか、少しも知らずに、言語を用いている。そういう事情があるにも拘わらず個々の言語は、民族・種族の興隆と期を同じうして、そういう民族・種族において展開してきたことは間違いないし、それぞれの民族・種族の精神的独自性 — こういう特性は同時に、民族にとって多くの制限を課していることにもなる — の中から、個々の言語が織り出されてきたことも、また事実である。そこで言語そのものは、自己活動を行いながら己の内からのみ生起してくるものであって、神のように自由であるが、しかし現実の諸言語は拘束を免れてはおらず、その帰属する諸民族に依倚²しているといつてよい。cf. [70, pp.23-24].

更に彼はこうも言います。

言語の創造は人類の内的な必要によって条件付けられている。言語は人々のコミュニケーションという外的な手段であるだけではなく、人間の本性そのものの中に根を持ち、人間の精神的な諸力を発展させ、世界観を作り上げるのに無くてはならないものである。人間がこのことを達成できるのは、個人的な思惟を社会

²いい。「たよる、よりかかる」。

的な思惟と一致させたときだけなのである。

§129 言語が完全に無意識に生れ、発展するものであり、人為的に言語に干渉することはできないのだということ、また言語というものは人間の精神を作り、発達させるのであるが、それは社会とのつながりの中ではじめて可能になるという、このフンボルトの考えは、やがて20世紀構造主義の祖となるソシュールやその他の人々に受け継がれ、発展させられていきます。

(4) エルゴンとエネルギー

§130 フンボルトは言語というものが人間の精神活動と不離一体のものと考えていましたから、言語は「もの」ではなくて「働き」だと考えていました。彼はいいます。

言語というものは、その実際の本質に則して捉えてみると、実は、終始中断することなく、あらゆる瞬間ごとに移ろい続けてゆくものである。文字に書き写して移ろう言語を留めようとする事さえも、結局は、言語をミイラのような形で保存するだけの不完全なやり方に他ならず、書かれたものをもう一度、生々と口に出して我々の身近なものとする事が、どうしても必要となってくることになる。言語そのものは、できあがった作品(エルゴン)ではなくて、活動性(エネルギー)である。

それ故、言語の本当の定義は、生成に即した定義しかあり得ないことになる。すなわち、言語とは、分節音声を思考の表現たり得るものとするための、永劫に反復される精神の働きなのである。

ところが、この定義をそのまま直接に受け取って厳密に考えると、これは言語とはいうものの、人が語るとき、その場限りで一回ごとに行われる発音の定義であるということになる。しかしこの定義を本来の本質的な意味において考えれば、このように、その都度語ることをいわば全体性としてまとめたものだけが、言語であるということにもなり得る [70, p.73].

§131 言語は「もの」エルゴン ἔργονではなくて「働き」エネルギー ἐνεργεῖαである、というのはフンボルトの有名なことばです。しかし「それ故、言語の本当の定義は、生成に即した定義しかあり得ない」というのはどういうことでしょうか。

例えば日本語では「ツクエ」といえば、ふつう日本で書き物や勉強などに使われる、ある種類の「もの」を指します。これを指すのに「トゥクエ」といっても、「ツウクウエ」といっても、「ツクイエ」といっても、たいていの場合、聞いた人は理解ができます。「ああ、このひとは「ツクエ」と言いたいのだな」というわけです。言い換えれば、「トゥクエ」も「ツウクウエ」も「ツクイエ」も頭の中にある「ツクエ」という理念的な音のつながりが、現実のことばの中でいろいろな形を取っているだけだと、聞く人に受け取られれば、分ってもらえるということになります。このようにことばには、頭の中にある理念的なものと、それが現実実現される音声という、二つの異なったものが含まれています。逆に「チクワ」という音で理念的な「ツクエ」を示すことはできません。それは「チクワ」という音が、頭の中にある別の理念的な音のつながりの実現したものだと、受け取られるからです。

§132 しかし現実の生活の中ではそういうことも起ります。例えばある人が上等な背広を着て現れたとします。そしてそれを見た人がその人に、「いい背広を着ていらっしゃるんですね」と褒めたとします。そのとき背広を着た人が、「いいえ、ほんの寝間着でして」ということがあります。これには二通りの解釈が可能です。一つはこの人の着ていた「上等の背広」が「寝間着」のようにつまらないものだと言いたいばあい、及びもう一つはこの程度の上等さは「寝間着」みたいなもので、自分はもっと上等なものを持っていると言いたいばあいです。たいていの場合には最初の意味で用いられますが、どちらにしても、「ネマキ」が「セビロ」を指しています。

§133 このようにことばは具体的な場面ではさまざまな使い方ができます。このように実生活では、具体的な場面のことばが絶えず新しい状況に対応して、生れています。「生れ変っている」といってもよいでしょう。それがことばが「生きている」ということなのです。言語がそういうものの総体であるという考え方に基づけば、言語はそのことばの「生れ変る」瞬間をとらえて定義しなければならないということになるのだと思われます。

§134 さらに、例えばあなたが町を歩いているとしましょう。そうすると

通りの向うからきな臭いにおいが漂ってきたとしましょう。ふと見やると、家らしいものの窓から黒い煙が出ていて、窓の中が赤くなっているとしましょう。このとき、あなたはこれら全ての状況は、「火事」という言葉が指すものと同じだと感じます。そのときあなたは直ちに119番に電話して「火事です!」と消防局に緊急電話を入れるでしょう。もしその事態が例えば家を焼き払っているのだと判断できるような、何かの付加的な状況から「火事」ではないと思えば、そういう行動はとらないでしょう。

言い換えれば、「火事」は、認識の主体である人から独立して客観的に存在しているものではなく、客観的には別々に存在している要素、及びこれに基づく判断(たとえば嗅覚による「キナ臭さ」、視覚によるものの燃焼過程、対象が「家」であるという判断、「燃えてはならないものだ」という判断)を総合して、人が主観的に判断し、「火事」と認定するものなのです。こういう具体的な例を考えてみれば、ある事態がある言葉の指す内容に一致しているかどうかということが、個々人の外界の認識に深く関わっていることが分ります。このように考えれば、言葉というものは認識に欠かすことができないものであることが分ります。

§135 このことは、先の引用に続いている次のような言葉と完全に一致しています。

.....我々が通常ある一つの言語と呼び慣わしているものは、実は多くの語やさまざまな規則がただ漫然と無秩序に並んでいるに過ぎないのであって、そういう混沌の中では、今述べたような発語によって生れてくる個別的なものだけが現存しているに過ぎず、しかも、この個別的なものも決して十全なものではなく、この個別的なものの中から生きた発語とは何かを見出し、生命の通った言語とは何かという正しい像を得るためには、更に新しい作業が必要となるほどのものだからである。けだし、最も高度のもの、最も微妙なものは、そういうばらばらに切り離された要素だけをいくら見つめたところで認識できるものではなく、結合されて発語となつてまとまったものにおいてのみ知覚されたり予感されたりすることができるものである。.....言語を調査し研究することは言語の生きた本質の内部にまで立ち入ることに他ならないのであるが、言語を対象として研究活動を行う場合はどんな時でも、今挙げたような実際に発せられてまとまった発語だけを、真なるもの、第一義的なものとする必要があるのである。こういう生

きた言語をばらばらにして、単なる語や規則にまで打ち砕いてしまえば、それは学問的分析と名乗ってはいても、所詮、生命の失せた小手先の作り物でしかない[70, pp.73-74].

(5) 言語と発語

§136 今引用したものを見れば、フンボルトは言^{シユプラーヘ}語と発語^{レーヂ}とを区別しています。先ほど述べた説明から「言語」は頭の中にある理念的なものの体系に相当し、「発語」がそれを実際の場面で実現するものに当ることは容易に分ります。そして言語を研究する場合には、「発語」を第一義的なものとして重視することが主張されています。

後で見ますように、ソシュールも頭の中にある「言語」をラング、その実現を「パロール」と呼んで区別していますが、彼の『一般言語学講義』を読む限りでは、ソシュールはラングを中心に考えていたように思われます。21世紀を控えてソシュールの言語理論についての疑義や批判が色々ななされてきましたが、その中心的なものは「ラング」と「パロール」の問題に関連していたと思われる。私はソシュール自身は決してラングが第一義的なものだと考えていたわけではないと思っていますが、これについてはまた別の機会に述べることにしましょう。

(6) 認識と言語

§137 認識と言語の関係については、フンボルトは次のようにいいます。かなり分り難い表現ですが、注意して読んでみましょう。

主観(体)^{スブイェクティーフ}的活動は、思考において、客観(体)^{オブイェクトビルデツェン}を構成する。というのは、どのような種類^{フォルム}の表象^{フォルムシユテレング}であろうとも、表象は、すでに現存している何らかの対象を純粹に受動的に静観するものに過ぎない、などは、とても考えられないからである。感官の活動は、精神の営む内面的な行為と総合的に結びつかなくてはならず、しかも、そこに生れた表象はこうした結びつきから自己を解き放ち、主観の力に対立して、それなりに対象になってしまう。更にこの表象は、今度は新しく対象として知覚されつつ、主観の中へと還帰してゆく。この場合にこそ言語が不可欠なのである。そのわけは、言語において、精神^{グース}の働^{ガイステリッヒ}こうとする力が唇を破って解放される道が開かれることになり、この精神の力の生み出したものは、自分の耳へと戻ってゆくことになるからである。このようにして、表象は現実の

客観性へと移行してゆくのであるが、そうだからと言って、主観性から切り離されてしまうことにはならない。このような過程を成し遂げることができるのは、言語だけである (第十四節参照)[58, pp.243-244].

§138 フンボルトは、人間はたとえば目の前に「机」があるのを見て、それをそのまま受動的に受け入れて机の概念 (表象) を作るのではない、と述べています。ものを見る目、聞く耳、さわる触感などは、精神の活動と一体になって働き、たとえば「ツクエ」という音と結びつけて、はじめて概念を自ら作り上げるのだ、ということです。たとえばスペクトルのような連続した色のばあい、どこからどこまでが「赤」なのか、あるいは「青」なのかを客観的に決めることはできません。

§139 それぞれの民族は自分の国の「赤」に当る言葉と、現実のスペクトルとを対応させて、色の連続に切れ目を入れるのです。ですから言語によって必ずしも切れ目が一致するとは限りません。日本語のばあいは昔は「青」と「緑」の間に切れ目を入れず、ひっくるめて「青」という言葉で示していました。しかし一旦こうした「精神の内面的作用」と結びついた視覚によって、たとえば「青」という言葉に対応する概念が確立しますと、今度はそれは、あたかも言語主体とは関係のないもののように、受け取られることとなります。すなわち、「そこに生れた表象はこうした結びつきから自己を解き放ち、主観の力に対立して、それなりに対象になってしまう」のです。

§140 そうすると、たとえば「青」という概念は、現実に見るものがこの概念に当てはまるかどうかという物差になります。「青」であるとか「青」ではないとかいうように、これを基に現実にあるものを、主観的に判断をするようになります。「この表象は、今度は新しく対象として知覚されつつ、主観の中へと還帰してゆく」というのはこのような意味だと思われます。

つまり、フンボルトは、ここでは言語というものは、客観世界をそのまま写し取るものではなく、言語毎に客観世界をいわば「切り取って」、それぞれに異なる「客観世界」を作り出すのだ、と述べているのです。そしてこれが「主観スブイェクティーフ(体)的活動は、思考において、客観オブイェクト(体)を構成する」ということ

意味なのだ、といているのです。

§141 さらにいえば、例えばここに「この道の所々にはほぼ一定の距離において椅子が配置されていて、道を行く人が歩き疲れるといつでも腰を下ろして足を休めることができる」というような文章があるとしましょう。

この文章は誰でも理解でき、直ぐに情景を想像することができます。しかし本当にそうでしょうか。例えば今ここに木で作られた椅子があるとします。しばらく行くと今度は岩を削って座れるようにした椅子があります。さらに行けば今度は鉄製の椅子が見えてきます。大理石でできているものもあるかも知れませんが。しかし客観的に存在しているものは、「木」であり、「岩」であり、「鉄」であり、「大理石」であるに過ぎません。「椅子」なるものは客観的には存在してはいないのです。それにもかかわらず私たちは先ほどの文章から、あたかも「椅子」が客観的に存在していると思ってしまう。これはどうしてでしょうか。

§142 実は「椅子」というのは客観的な存在に対して与えられた名前ではなく、その用途ないしは機能に対して与えられたものにすぎないのです。

言い換えれば、これらの実在する「木の塊」や「鉄」や「岩」などは機能の点で等質なものと観念され、したがってあたかも「椅子」が客観世界に実在しているかのように思いこみ、その結果先ほどの文章の意味が理解されることになるのです。従って熊であれ兎であれ、機能を理解できないものには、それらの「椅子」はすべて相異なるものとししか認識できないでしょう。

このことは「椅子」が客観的実在ではあり得ないことを示しています。

§143 このようなものは言語に関して無数にあります。私たちが客観世界であると信じているものは実は精神活動の結果そう信じているに過ぎないものなのです。従って極端に言えば、私たちを取り巻いている「客観」なるものは決して同一ではなく、言語が異なる毎に異なっているということもできます。

実はこのような考え方は、最近問題にされてきている環境言語学の理論的な鍵となるのだと、考えられます。

これは後に「言語相対論」といわれ、20世紀のアメリカ構造言語学の二人の先駆者ベンジャミン・リー・ウォーフ Benjamin Lee Whorf (1897-1941) とエドワード・サピア Edward Sapir (1884-1939) と共に、フンボルト・サピア・ウォーフの仮説といわれるものになりました。

第八章

ことばの研究 VIII 20世紀構造主義の先駆

フェルディナン・ド・ソシュール

(1) ひととなり

§144 20世紀にはいると、自然科学の分野では科学基礎論などの考え方が現れてきましたが、この世紀の言語学のあり方がある意味で決定したといってもよい、言語学者が現れました。フェルディナン・ド・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913) です。ソシュールはスイスのジュネーヴ切っの名家の出で、父はアンリ Henri (1829-1905) という地質学者で、母はジュネーヴの名門貴族の令嬢だと伝えられます。彼はその父母の長子として生まれました。弟にはオラス Horace (1859-1926), レオポルド Léopold (1866-1925), ルネ René (1868-?) の三人がいたといえます。次男のオラスは肖像画家、風景画家として知られ、三男のレオポルドは安南語、支那学、中国の古天文学の研究家でした。末子のルネは数学者で、27才でワシントンのカトリック大学の教授になったといわれます。彼は数学の外、言語哲学や人工語の研究をしていたといわれます [65, p.xviii].

§145 このような一家のプロフィールをみれば、ソシュールには自然科学、数学と哲学、言語学の血が流れていたと想像できます。ソシュールは1870年にマルチネ Martinet という学校に入り、ミレネ Millenet という教授からギリシア語を学んだといわれます。このとき彼は13才だったと思われませんが、すでにフランス語、ドイツ語、英語、ラテン語はできたといわれます。伝えられるところによれば、そんなある日、彼は学校でヘロドトスを読まされたことがありました。このとき、彼は tetákhatai τετάχεται という形に出会ったといえます。これは tássō τάσσω 「戦闘態勢をとらせる」という意味の中動相現在完了三人称複数形だと思われませんが、ソシュールによれば、「この語形を見た瞬間、これまで何の気なしに過ごしてきた私の注意は、突如異常にも呼びさまされた。なぜといってこんな風に推論したからだ…… legómetha λεγόμεθα : légontai λέγονται, それゆえ tetágmetha τετάγμεθα : tetákhatai

τετάχεται, それゆえ N=a だ」と理解した、というのです [22, p.xix].

§146 これがどういう意味かといえば, legó-metha というのは, légō「読む」の中・受動相現在一人称複数の形で, légontai というのは同じく三人称複数形です. これに対して tetágmetha というのは中動相現在完了一人称複数です. このばあい語尾の形は変わりませんから, 次のような比例式が成り立ちます. legó-metha : tetág-metha = légo-n-tai : tetákh-a-tai ここで g/kh はしばしば交代しますから, n=a となるということになります. 比較文法の章で母音として働くソナント η がギリシア語で a になることを学びましたが (ii 頁参照), ソシュールは, 弱冠 16 才ですでにこの法則を発見したブルックマン Karl Brugmann (1849-1919) よりも 3 年早く, これを見つけたことになりました.

§147 ソシュールは 1873 年, 16 才でギムナジウムに入学してサンスクリットの勉強をはじめ, 1875 年に卒業後, ジュネーヴ大学で物理化学・物理学課程に在籍したといわれますが, 1876 年, 19 才の時に創立間もないパリ言語学会に入会します. 手元から離れたがらなかった彼の両親も, とうとう諦めてライプツィヒ留学を認めました. ライプツィヒでは青年文法学派に属するヒュープシマン Heinrich Johann Hübschmann (1848-1908) から古代ペルシア語を学び, またヴィンディシ Ernst Windisch (1844-1914) から古代アイルランド語, レスキーン August Leskien (1840-1916) にスラヴ語とリトアニア語を学んだといえます.

(2) ソシュールと比較言語学

§148 ソシュールは 1878 年に有名な「インドヨーロッパ語における母音の原始体系についての覚書き」(*Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes*) という論文を発表し, 翌 1879 年にこれを出版しました. 彼が 21 才の時でした. 翌年卒業の少し前にゲルマン語学者として当時有名だったツアルンケ教授 Friedrich Zarncke (1825-1891) の授業に出席したとき, 教授から「もしや君はスイスの著名な言語学者フェルディナン・ド・ソシュールの親戚かなにかではありませんか?」と聞かれたとい

ます [22, p.xxii].

§149 当時の比較言語学では、サンスクリットが最も古いと考えられていました。ここからポップ (32 頁参照) は、かつてヨーロッパの言語はサンスクリットに「保存」されているような、*a というただ一つの母音しか持っていなかったが、それがやがて外の言語に見られるようにヨーロッパの北の諸言語では *e と *a に、また南の諸言語では *e, *o, *a というように、二つあるいは三つの母音に分裂したという説を唱えました。しかしその後の研究で少なくとも *e と *o とは印欧祖語に既にあったということが示されました。

§150 一方、すでに言いましたように、印欧祖語では *e : *o : *ø や *ē : *ō : *ǣ という交替があることも知られていました (49 頁参照)。

ここでは *i も *u も母音交替に参加してはいませんでしたから、母音ではないとソシュールは考えました。そして *i あるいは *u は

	E 階梯	O 階梯	ゼロ階梯
短母音	*e	*o	*ø
長母音	*ē	*ō	*ǣ

二重母音 *ei あるいは *oi の母音がゼロになった結果できたものに過ぎないと考えたのです。そうするとこれは *er や *el などの *e がゼロになった結果できた *r̥ や *l̥ と全く変るものではないことになります。*i, *u を含めてこれらの音が母音ではないことをはじめて指摘したのが、外ならぬソシュールだったのです。私たちはすでに、これらが母音ではなくて、「ソナント」というものに属する音であることを知っています。

§151 もしそうであるとすれば、*ǣ も実はソナントであると考えられます。なぜならたとえば *pā- > L. pāscō 「(羊などを) 養う」、OCS pas-ti (пас-ти) 「牧する」と *pæ- > Gr. patēr (πατήρ), L. pater, Skr. pitā(r)- 「父」とが同じ語根であるとすれば、*pæ- は *pā- の零階梯の形と見ることができるからです。そうすると長母音の交替 *ē : *ō : *ǣ も、実は *eā : *oā : *ǣ ということになるでしょう。

§152 更に印欧語の母音交替を見てみると、表に見られるように零階梯を

*ə とするだけでは説明できないものがあることに、ソシュールは気づきました。

その一つは *ā も母音交替に加わっていることです。たとえば次の表から分りますように、*ē : *ō (ti-thē-mi : thō-mos) と同じように *ā も *ō と交替しています (phē-mi < *phā-mi: phō-nē)。更にもう一つはもし di-dō-mi を *di-dōə-mi から、また ti-thē-mi を *ti-dheə-mi からできたものとするれば、零階梯の語根はそれぞれ *də-, *dhə- になるはずでず。そうすれば表にあるように同じ零階梯の *ə から作られる筈の過去分詞に見られる、do-tos, the-tos のような異なった母音が同じ *ə の位置にどうして出てくるのか、その理由が分らなくなります。

phē-mi < *phā-mi (言う)	phō-nē (声)	pha-tos (言われた)
di-dō-mi (与える)	dō-ron (贈物)	do-tos (与えられた)
ti-thē-mi (置く)	thō-mos (堆積)	the-tos (置かれた)

§153 話を簡単にするために、ここではソシュールのこの指摘と現在の考えに基づいて、現在の比較言語学が得た結果だけを述べますと、次のようになります。

印欧祖語にはその後どの言語にも残らずに消えてしまった音が少なくとも三つあったと仮定します。これを *ə₁, *ə₂, *ə₃ とします。このとき ə_x は前に立つ母音 *e の音色を変え、脱落するとき代償延長でこの母音を長くします。

*ē	ti-thē-mi	thō-mos	the-tos
*eə ₁	*dheə ₁ -	*dhoə ₁	*dhe ₁ -
*ā	phā-mi	phō-nē	pha-tos
*eə ₂	*bheə ₂ -	*bhoə ₂	*bhe ₂ -
*ō	di-dō-mi	dō-ron	do-tos
*eə ₃	*deə ₃	*doə ₃ -	*dē ₃ -

すなわち *e+*ə₁ → *eə₁ → *ē, *e+*ə₂ → *eə₂ → *ā, *e+*ə₃ → *eə₃ → *ō となります。もし *e 以外の母音の後に来たときには、音色を変えずにこの母音を延長します。すなわち *a/*o+ə₁/ə₂/ə₃ → *ā/*ō です。

この働きは母音として現れるソナントの場合にも妥当すると考えられます。例えば *r̄+ə_{1/2/3} → *r̄̄ や *l̄+ə_{1/2/3} → *l̄̄ のような場合です。

そうすると上に述べた大きくいって二つあった問題点，すなわちなぜ同じ * ə が零階梯の時に違った音として現れるのかという問題，ならびになぜ * ā と * ō が交替するのか，という問題が，一度に解決できるだけでなく，長母音の交替も，結局は短母音の交替に帰することができます。

これらの音がどのような発音（音価）を持っていたかは明らかではありませんが，恐らく喉の奥の方で発音されたものであろうとされ，喉頭を意味する Larynx からラリungal laryngal または laryngeal と呼んでいます。これによってこの説全体もラリungal理論 laryngeal theory と呼ばれています。

その後キューニー (Albert Cuny 1870-1947) やメラー (Hermann Møller 1850-1923) の研究などを経て，これらの音声は母音の前にあるときにも，後に続く母音の音色を変えることが，明らかにされました。

* $\text{ə}_1\text{e}$	>	* e
* $\text{ə}_2\text{e}$	>	* a
* $\text{ə}_3\text{e}$	>	* o

§154 ところでこのような天才的な論文は，当時の専門家たちには理解されませんでした。その結果この論文は長いこと忘れられた状態にありました。ソシュール自身もこの事に嫌気がさしたのでしょうか，印欧語比較言語学から手を引いてしまいました。

そうこうしているうちに，前にも述べましたように (53頁参照)，1906年に楔形文字の書かれた粘土板が発掘され，1917年にチェコのプロズニーがこれを解説して，この言語が印欧語族に属するものであることが明らかになりました。ヒッタイト語です。ポーランドのクリロヴィチは，この言語の h という音が，かつてソシュールが述べた「消えた音韻」に当たっていることを指摘しました。Hitt. paḫ- 「護る」L. pāstor 「羊飼い」です。この語根は * pā- ですから，正確に言えば * ea_2 に当ります。ついでに言えば母音の前にあるものとしては，たとえば Hitt. ḫanti 「額」，L. ante 「前」，Gr. $\text{antí} \alpha\upsilon\tau\acute{\iota}$ 「向かいに」のようなばあいがあります。このようにかつて若き日のソシュールが予言したまさにその位置にヒッタイト語の h があったことによって，彼の理論の正しさが劇的な形で証明されることになったのです。

§155 以上のことから，ソシュールは若い日に比較言語学を学び，驚くような才能を示しましたが，ラリungal理論に見られるように，すでにこのと

きから、全体の体系というものを考えていたということが出来ます。これはすでに述べたように、彼の家系に見える数学的自然科学的な素質を彼が持っていたためであろうと思われれます。

(3) 一般言語学講義

§156 さて、ソシュールは1880年、当時の比較言語学の一つの中心であったライプツィヒ留学を終えてパリに行き、*École pratique des hautes études*において、意味論の創始者として知られる言語学者のブレアル (Michel Jules Alfred Bréal 1832-1915) の講義を聞きました。ブレアルはソシュールの学才が並々ならないのを知って、彼に講座を任せました。こうして彼は「ゴート語及び古代高地ドイツ語講師」に迎えられました。24歳の時でした。1891年に彼は故郷スイスに帰り、ジュネーヴ大学で教鞭を執りました。その大部分はサンスクリットと印欧比較言語学の講義であったといわれますが、晩年1907年から1911年までの間に3回一般言語学の講義を行いました。

§157 ソシュールはこの講義の内容を出版しようとはしませんでした。彼の弟子のシャルル・バイイ (Charles Bally 1865-1943) とアルベール・セシエ (Albert Séchehaye 1870-1946) が学生たちの取ったノートを集めて整理し、1916年に『一般言語学講義』*Cours de linguistique générale*として出版しました。この書物は構造主義言語学の先駆となり、やがてさまざまな分野において構造主義的な考えが広まる基となりました。こうして構造主義は、やがて20世紀を特徴づける時代の思潮となっていったのです。

§158 ソシュールの思想の中心になったのは、19世紀の比較言語学に見られるような歴史的な立場から言語を見ようとするのは正しくないということでした。彼は言語の本質は、歴史的に言語がどのようにできてきたのかという研究によっては捉えられない、言語の本質はその体系性にあるのだ、と主張しました。彼は言語をある時点で横に切ったものを考えてこれを共時とし、時間の軸に沿った歴史的なものを通時としました。体系性は共時態にのみあるのだから、言語の学は共時言語学を優先させなければならないといったのです。このような共時態 *synchronie* と通時態 *diachronie* の峻別が彼の

学説の一つの特徴になっています。

§159 ソシユールは体系を説明するのに好んでチェスのゲームを例にしていますが、私たちにはなじみが薄く、かえって分り難いので、次のように説明してみたいと思います。いまなにかの機械があったとします。これは全体として一つの構造または体系を持っています。それは色々な部品からできていますが、これらの部品は組み立てられずにばらばらで置かれているときには、何の意味もなく、役に立ちません。しかしこれを一定の構造にしたがって組み立てていけば、全体としてある働きをする機械になります。言いかえれば、一つ一つの部品は、別の部品との関係で意味を持っているのです。一つの歯車は他の歯車に動きを伝えることで、はじめて意味を持つこととなります。いいかえれば、個々の部品は他の部品との関係、あるいは全体の構造の中で、意味を持つということができるとでしょう。このような部品のもつ「意味」というのを「価値」と言い換え、部品を「単位」と言いかえることもできます。すなわち、一つの体系あるいは構造は、「単位」と「関係」からできており、「単位」の持っている「意味」あるいは「価値」は、体系に属している他の単位との関係で決ることになるのです。

§160 それではこの「単位」というのは何でしょうか。これには色々なレベルのものが考えられます。「音」も単位ですし、「単語」も単位に違いありません。しかし音だけだとそれ自身では何の意味も持ちません。色々な言語は音の世界から、色々な音を切り出して利用します。ここで「補遺」で述べていることを参照してください。日本語は [p] と [ph] とを現実には存在している音なのに、区別できませんでした。それはこの二つを入れ替えても意味に違いが生れないからでした。しかし [b] を [p] または [ph] のどちらと入れかえても、意味が変わります。ですから日本人は [b] は [ph] とも [p] とも違う音だとすぐに聞き分けることができます。

§161 逆のいい方をすれば、日本人は [p] も [ph] も同じ音声のイメージ /p/ と結びついているのです。朝鮮・韓国語では逆に [p] と [b] は同じ音と感じ、区別ができません。それは彼らが [p] と [b] とを、同じ音声イメージ /p/

と結びつけているからです。そして [ph] は /p/ とは違う音声イメージ /ph/ と結びついています。このために彼らは常に [p] と [ph] を違った音として聞き分けることができるのです。これも結局は日本語と朝鮮・韓国語との構造の違いによるものです。

このような音声イメージを言語学では音素または音韻 phoneme といいます。そして phoneme が具体的な場で実現される音を音または音声 phone と言って、これを区別します。

このことから、言語の音の面での単位になるのが音素であることは、すぐに分ります。ソシュールはこのように人の頭の中にある理念的な音声のイメージ(音素)と、それが具体的なばあいに発音される音とを厳密に区別しました。

これと同じように、文でも理念的に頭の中にある「文」と、それが具体的な場面で実現されるものとを区別し、理念的なものをラング langue に属するもの、実際に実現され、したがって人によって、あるいは場面によって色々に変る具体的なものを、パロール parole に属するもの、としました。

§162 ソシュールの『一般言語学講義』(cf. [65])をはじめて訳した小林英夫(1903-1978)は、ラングを「言語」、パロールを「言」と訳しました。言語における音素の働きを研究する学問を「音素論」あるいは「音韻論」phonemics または phonology といい、音声の性質を研究する学問を「音声学」phonetics といいます。いうまでもなく、音素論はラングの学、音声学はパロールの学ということになります。文のレベルでいえば、たとえば日本語の文の構造というのは一定の規則によって決められています。しかし「文は人なり」といわれるように、同じ内容のことで人によってさまざまな表現があります。これを文体 style といいます。これなどはやはり大部分はパロールを扱っています。



小林英夫訳 1937 年版

§163 それでは単語のばあいはどうでしょうか。私たちがいま「ツクエ」

という、音素のつながりを聞いたとします。

そうすると私たちの脳の中には机のイメージが浮んできます。逆に頭の中で机のイメージが浮んで、それを相手に伝えようとすると「ツクエ」という音素のつながりが浮んできます。そこでこの音素にしたがって私たちは「ツクエ」という音を出すことになります。このとき実際には [tsukhue] と発音しても、[tshukue] と発音しても、相手は分ってくれるでしょう。音素としては同じ「ツクエ」だからです。



これと同じことが認識のばあいにも働きます。朝鮮・韓国語の [p] と [b] および [ph] の話はすでにしました。このばあいは [p] と [b] とが同じ音素 (音素は /p/ のように表します) の異なった実現 (音) に過ぎないために、朝鮮・韓国の人とは区別できません。同じようにたとえば私たちが「暗い赤」のものを見たときも、「明るい赤」を見たときにも、「赤い」と思い、そう表現します。それは私たちの頭の中にある理念的なラングにおいて「赤」というものしかないからです。そして表現するだけでなく「赤」として認識し、記憶します。

§164 ですからたとえば警察に犯人の着ていた赤いコートについて「どんな赤でしたか」と質問されても、服装に関心のあるおしゃれな人でなければ、なかなか的確に答えられないでしょう。警察に色々な赤の色表を見せられても、「もうちょっと明るかったような」というように曖昧な答しかできないのが普通です。それは日本人にとって、その人が見たものはラングの「赤」の単なる実現に過ぎないからです。もしいくつかの明るさの「赤」に別々の名前が付いている言語があったとしたら、そういう言語を話している人は、はるかに的確に犯人のコートの色を指摘することができるはずですが。色彩を扱うことを専門にしている人々は、2000 以上の色彩語を持ち、直ちに必要な色を思い浮べることができるそうです。

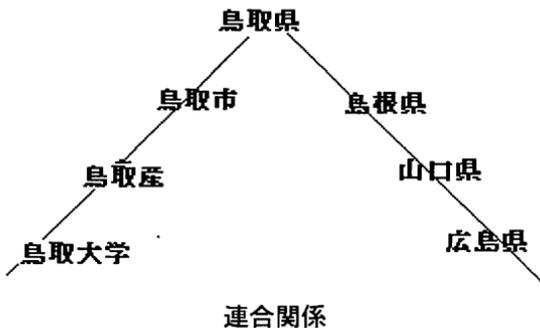
§165 こういうように、私たちの頭の中では「机」のイメージと「ツクエ」という音素のつながりが緊密につながっていると考えられます。ソシュールは音素のつながりを「意味するもの」という意味のシニフィアン signifiant と名づけ、それによって意味される「机」のイメージを「意味されるもの」を意

味するシニフィエ *signifié* と名付けました。ソシュールのこの書物をはじめに訳した小林英夫は、シニフィアンを能記、シニフィエを所記と訳しました。このようなシニフィアンとシニフィエが堅く結びついている全体をソシュールはシーニュ *signe* すなわち記号と名付けたのです。

§166 ソシュールは、このような「記号」における「能記」と「所記」の結びつきは、恣意的なもの、すなわち約束事に過ぎないのであって、言語が違えばその結びつきの仕方も変わる、と考えました。これはたとえば日本語の「ツクエ」の指すもの、つまり「所記」は英語では「desk」という能記で表されることを考えれば、誰でもすぐに分ることです。このことが何を意味するかといえば、ソシュールはここでははっきりと「テセイ」(cf. p.4)の立場に立つことを宣言したということになります。

現代の言語学はこのようにはっきりとテセイの立場に立っています。

§167 次にソシュールは、先に述べました構造を形作る単位の間関係として、言語のばあい「連合関係」と「統合関係」があるとして、これを区別しました。



連合関係というのは話の中で入れ替えができる単位の間関係をいいます。たとえば「私は～が食べたい」という文章があったとしますと、～の部分には「お菓子」を入れても、「お魚」を入れても、意味は違いますが文は成り立ちます。「お肉」でも「鳥」でも「卵」でもなりたちますが、何も入れないと成

り立ちません。また「水」、「お酒」などを入れても成り立ちません。しかもこれら連合関係をつくる単位である「お菓子」、「お魚」、「お肉」、「卵」……は、そのうちの 하나가選ばれて使われる(実現する)と、外のものは用済みになって使われません。したがって連合関係は、このように「選択的な関係」なのです。

§168 また「統合関係」というのは、「連合関係」とは異なって、両方とも実現されている関係を指します。たとえば「鳥取県」という単語の中の「鳥取」という部分は、「鳥取市」、「鳥取産」、「鳥取環境大学」「鳥取大学」などのような単語の中の一部と連合関係をもっています。同じように「県」という部分は「島根県」、「山口県」などの中の一部と連合関係をもちます。この二つの連合関係が交わったところが、その両方の部分が使われている(実現している)「鳥取県」という単語なのです。

このようなばあい、「鳥取」と「県」とは統合関係にあるといます。したがって「鳥取環境大学」は三つの連合関係の系列(これを連合系列とといいます)からできあがっている統合だということになります。

§169 このような例から分りますように、統合関係は連合関係によって支えられてはじめて成り立つものです。もし連合関係によって支えられていなければ、統合関係は成り立ちません。

たとえば英語の nest「巣」という単語は、印欧祖語の *ne「下」(cf. Nether-land「オランダ」)。これはももとは、ne「低い」の比較級 nether「より低い」と land「土地、国」からできています)と *sed「坐る」(cf. E. sit)の零階梯 *sd > *st からできていました。しかし今では *st という連合系列がありませんし、ne という連合系列も、nether, nethermost 以外にはありませんから、はっきりした連合系列とはいえません。このため nest はそれ以上分解できないので、一つの語だと考えられるようになりました。

また日本語のばあい、かつて「曲る、正道から外れる」という意味の「かぶく」という動詞がありました。派手な着物を着て河原で小屋をかけて芝居をする人たちは「河原乞食」とか「かぶき者」すなわち「正道から外れた人たち」というようにさげすまれていました。しかし「かぶく」という動詞が

使われなくなると連合系列が無くなるので意味が分からなくなってきます。それで「歌舞伎者」というような字が当てられて、なおさら元の意味が分からなくなりました。

§170 詳しいことは述べませんが、ソシュールはこのように言語を体系、今の言い方でいえば構造として見ようという考え方を示しました。そして体系とは単位と関係からなり、関係は連合関係と統合関係からできているということを示したのです。言語の「価値」すなわち広い意味での「意味」もこのような関係の網によって決ってきます。

たとえば日本語では人が泣くとき「泣く」という言葉しか持っていません。言い換えれば「泣く」という動詞は色々な泣き方の総てを表すことができます。しかし英語では涙を流して泣くことを表す weep と、声をあげて泣くことを示す cry の外に、「すすり泣く」あるいは「むせび泣く」ことを表す sob もあります。中国語でも「泣」と「号」と「涕」のような区別がありました。このような連合系列があることによって日本語の「泣く」とは違った意味範囲を、それぞれの語が持つことになります。

§171 最後にソシュールが示した重要な考えに「共時」(*synchronie*)と「通時」(*diachronie*)という考え方があります。「通時」というのはいわば歴史であって、言語の歴史的な変化を考えるものです。したがってすでに説明しました比較文法なども通時に属する学問だといえます。

これに対して「共時」というのは言語をある時点で「輪切り」にしたときに現れる体系を考えようとするものです。ソシュールは言語の本質はその働きにあり、働きは体系あるいは構造がないとあり得ないと考えましたから、言語を共時の立場から観察することが最も大切だと考えました。これが20世紀の学問を特徴づける構造主義という考えの基になりました。20世紀の時代の精神はこのような構造主義的な考えであったといっても過言ではないと思われます。

しかし一方では、このような構造主義に対する批判も、さまざまなところから起ってきました。21世紀の時代の精神はどのようなものになるでしょうか。これは偏に21世紀を担う人々の肩にかかっています。

第九章

ことばの研究 IX ソシュールの直弟子たち

I. ジュネーヴ学派

(1) バイイ

§172 ソシュールは1881年から10年間、パリの「高等教育学院」*École pratique des hautes études* でゴート語、古高地ドイツ語、ラテン語、リトアニア語などを教えました。このとき彼はアントワヌ・メイエ Antoine Meillet (1866-1936)、シュトライトベルグ Wilhelm Streitberg (1864-1925)、ガストン・パリス Gaston Paris (1839-1903)、ミシェル・ブレアル Michel Jules Alfred Bréal (1832-1915)、ダルメステテ Jean Darmesteter (1849-1894)、ポドゥエン・デ・クルテネ Jan Baudouin de Courtenay (1845-1929) などと親しく交わり、彼の講義を聞いた人々の中には、グラモン Maurice Grammont (1866-1946)、パッシイ Paul-Édouard Passy (1859-1940)、メイエの外、アルベール・セシエ Albert Sécheyne (1870-1946)、シャルル・バイイ Charles Bally (1865-1947) など、後に有名な言語学者となる人々がいました [21, p.17].

§173 前にも言いましたように (cf. 八章)、1913年にソシュールは56才で亡くなりましたが、1907年から1911年までに3回、ジュネーヴ大学で一般言語学の講義を行いました。彼自身はこれをまとめて出版することはありませんでしたが、この3回の講義に出席した人々のノートを集め、それを取捨選択してまとまりのある『一般言語学講義』という書物に纏めあげたのが、バイイとセシエでした。講義に出席した人々は延べ29人だったと伝えられますが、そのうち何らかのノートを残したのは11人だったといわれます。

ただしここで言うておかなければならないのは、ソシュールの遺稿の取捨選択を行ったのは、あくまでバイイとセシエという、二人の弟子でありましたから、その選択の仕方も、まとめ方も、二人が理解した限りの、師の思想でした。ですから時間が経ち、言語学の研究が更に深まるにつれて、いろいろな疑問が生れてきました。二人の解釈とソシュールの考えていたこととは、違っていて、ソシュールは本当はもっと別のことを言おうとしていたのでは

ないかという問題です。これはやがてソシュールの学説の解釈の問題に発展していきます。しかしこの問題については、これ以上ここで述べることはしません。

§174 ソシュールは、通時と共時の区別、ラングとパロールの区別など、言語学の根本に関わる重要な概念を打ち立てましたが、彼自身は言語学の対象となるのは体系を作っているラングであって、しかも歴史的な観方ではなく、言語が実際に働いている共時について研究することが大切であると説きました。

少しおさらいをしておきますと、ラングというのは、簡単に言えば、ある言語を話す集団に属する個々の人の頭の中にある、理念的なものを指し、パロールというのはそれを具体的な場面で人が使う具体的なものを指しています。

§175 たとえば「パパ」という言葉が子どもの頭の中にあって、目の前に父親がいる、というような場面を想像してみましょ。子どもが父親の注意を惹こうとして「パパ」という音を立てるとします。このときそれは [papa] かもしれず、[phapa] かもしれず、あるいは [phapha] かもしれませぬ。

娘さんならば男の子よりも高い音で発音するでしょう。また「パパ」といったのに振り向いてくれない父親に [pa:pa:] というかもしれませぬ。こういう風に具体的に言葉を使うパロールは、人により、場面により、さまざまな形を取ります。

こういうように、状況によって千差万別なパロールは、言語の対象としてはあまりに「不安定」なものだと、ソシュールは考えたのかもしれませぬ。彼は『一般言語学講義』のなかで、パロールについては「パロールの言語学も考えられる」としか述べてはいないのです¹。

§176 ソシュールを心から尊敬し、ソシュールの第一の弟子だと思っていたパイイは、恐らく師が展開しなかつたパロールの学を研究したいと思った

¹小林英夫はソシュールのラングを「言語」、パロールを「言」と訳しています。ソシュールは『一般言語学講義』のなかで、「パロールの言語学」について、次のように述べています。「しだいによっては、これら二つの学科のそれぞれに、言語学の名前を据えおき、言の言語学といっていえないこともない。しかしこれと、言語をその独自の対象とする、ほんらいの言語学とを、混同してはならないであろう。」[65, p.34]

のではないのでしょうか。だから彼は「文体論」の研究をしようと考えたのだと思います。

「文は人なり」とはよく言われることですが、例えば日本語という「ラング」を使っているとしても、それによってできる文章は人によって異なります。夏目漱石には漱石らしい文章、森鷗外には鷗外らしい文章があり、読むとだいたい書いた作家がだれか見当がつかます。これは丁度「パパ」というラングが人やばあいによって異なった風を実現されるのとよく似ています。したがって文体にはそれを書いた人の刻印が印されているとってよいでしょう。また同じ人の書く文章でも、手紙の文章、論文の文章、お話の文章など、ばあいによって異なっています。そう考えてみれば、文体というのはパロールに属するものだと言えましょう。

§177 パイイはソシュールの『一般言語学講義』を出版する1916年に先立つ1909年に『フランス語文体論概説』(*Traité de stylistique française* [1])という著書を著していました。しかしソシュールが一般言語学の講義をおこなったのは1907年、1907-1908年、1910-1911年の3回だけであり、パイイは前にもいいましたように、同じくソシュールの弟子だったアルベール・セシエとソシュールの講義を聞いた人々のノートを集めて、それから『一般言語学講義』という形にまとめて出版したのですから、パイイはすでにソシュールの講義の内容を、かなり知っていたと思われます。パイイがどれだけソシュールに傾倒していたかは、彼の書いたものを見れば一目瞭然です。「F. ド・ソシュールと言語学研究の現状」[2], 「ラングとパロール」[3], 「通時と共時」[5], 「記号とは何か」[6], 「記号の恣意性、価値と意義」[7], などの論文は、ソシュールの『一般言語学講義』の中のトピックについてのものなのです。

§178 パイイの学説の集大成として有名なのは『一般言語学とフランス言語学』(*Linguistique générale et linguistique française*) [4]という書物です。この中でパイイはソシュールの学説を承けて、共時的体系の観点から言語を研究する必要性を強調しています。

体系においては全てのものが相互に結びついている。言語体系についても、このことは、他の体系のばあいと同じように、正しい。ソシュールが明らかにした

この原理は我々に対してもその意義を失ってはいない。「この著書のただ一つの目的は、このことを確認することである。」

§179 しかし、言語体系は、一見したように調和のとれた体系ではありません。この点についてアルパートフ Владимир Михайлович Алпатов (1945-) は、その著『言語学史』[32, p.158]の中で、次のように述べています。

しかし言語を「対称性を持ち、調和のとれた構造物」であると考えるのは、正しくない。ほとんど全ての言語は「いくつかの、部分的には互いに矛盾する傾向によって引き裂かれている」のである。バイイは、著書の中でこれらの傾向を、フランス語、および一部はドイツ語について、明らかにしようと努力した。その上に「記号の形式とその意義、能記と所記のあいだの絶えざる矛盾」が存在していた。

このような言語の調和の欠如を、バイイはソシュールの『講義』の考えにしたがって説明している。「言語というものは絶えず変化しているが、それは変化しないことによってのみ機能することができる。言語の存在のどの瞬間をとってみても、それは一時的な平衡の産物である。したがってこの平衡は、相反し、対抗する二つの力の平衡である。すなわち、一方では、言語の正常な使用とは相容れない変化を抑制する、伝統の力であり、また他方ではこの言語を一定の方向に衝き動かす、積極的な力である。…… 伝統の力はそれ自体言語体系に比例している。」特に、「伝統を厳格に護るフランス語は、思惟や生活の絶えず変化する要求に応えるために、知らず知らず発展を余儀なくされているが、その発展の、ほとんど全ての時代の遺産を注意深く保存している。」

§180 ここでバイイが「言語というものは絶えず変化しているが、それは変化しないことによってのみ機能することができる」としているのは、後に「言語学的二律背反」*antinomie linguistique* と呼ばれて有名になった箇所です。もしそうであるならば、絶えず変化している言語が、どうして同時に機能することができるのかという問題が生れて来るからです。この矛盾の最終的な理論的解決は、後のプラグ学派の理論によってなされることになったと、私は考えていますが、ともかくもこういう矛盾が共時の優先という問題に内包されているということ指摘した点は、バイイの功績だったと思わ

れます。

§181 事実、パイイもこの矛盾が共時と通時を峻別するところに起因しているということには気がついていたと思われます。なぜならばパイイは次のようにいっているからです。

それにも拘わらず、絶えず言語を使用することが示しているのは、我々の思想が言語財の要素を事実上絶えず同化し、連合させ、比較し、対立させるということであり、これらの要素が互いにどれほど異なっていたとしても、それらは記憶の中で単に対比されているだけではなく、互いに引き合い、退け合って、決して孤立しているわけではないということである。作用と反作用とのこのような絶えざる連鎖が、最終的に常に一時的であり、常に可逆的ではあるが、現実的なある種の統一を作り出すのである。

この考えに従うと、通時と共時は区別することができなくなり、またラングとパロールの区別も危うくなります。なぜなら、言語財すなわちソシュールの意味でのラングを互いに同化させたり連合させたりするのはパロールの営みでなければならないからです。

(2) セシエ

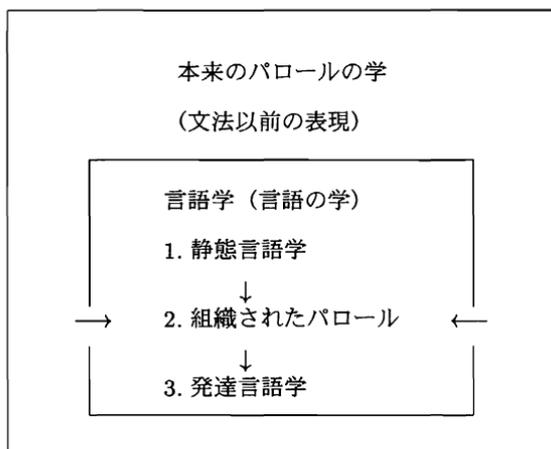
§182 アルベール・セシエは、パイイと共にソシュールの『一般言語学講義』を編纂した人ですが、パイイほどには知られていません。しかし彼が書いた「ソシュールの三つの言語学」(Les trois linguistiques saussuriennes)は大きな反響を呼びました。師のソシュールを真っ向から批判したと見なされたからです。しかし彼はソシュールの学説を否定しようとしていたわけではなく、ソシュールの学説が未だ細部に亘っては未完成だと考えていたと思われれます。

彼はラングとパロールというソシュールの区別に対して「組織されたパロール」というものを立て、共時言語学と通時言語学の間に、組織されたパロールの言語学をおくことを考えました。その根拠は、先にパイイの「言語学的二律背反」について述べましたが、この根拠を理論的に克服しようと考えたからだと思われれます。

§183 彼はこれについて次のように述べています。

人が何かを伝達しようとして話すとき、あるいは言われたことを理解しよう

と試みる時には、いつもたとえ極くわずかであっても、革新の可能性はある。話し手は多少とも一般に認められた規範から逸脱する可能性があり、聞き手にも新しい表現手段を本能的に理解する可能性がある。まさにパロールに含まれる最小限の変化の総体が、その蓄積の程度にしたがってほとんど気付かれぬ位ではあるが、時には深刻な変化をラングの構造にもたらすものである。したがってパロールは、それが一定の言語状態に基づいているから共時にも、またあらゆる可能な変化を萌芽的に含んでいるから通時にも、同時に関係している。



§184 したがって、彼によればこの三つの学問分野が全ての言語学の問題を包括することになる、という訳です。組織されたパロールというのは、例えて言えば、小学生に「富士山の絵を描きましょう」といったときに人によって色々に描くでしょうが、それでも富士山であるという、一定の形になるというのに似ています。人さまざまであっても、ある大まかな枠があるからです。組織されたパロールというのも、確実に細部まで決った「記号」とまでは行かないけれど、人々が話しているうちに、大まかに決ってくるものです。これはそのうちに少しずつ形を変えることもあります。そしてこの組織されたパロールが固まってくれば、それがラングということになります。それが更にパロールとして話されているうちに、また少しずつ形を変えて皆が話すようになってくると新しい組織されたパロールの段階を経て、再びラングに

なります。

つまり組織されたパロールというのは、言語の共時と通時を媒介するものといってもよいでしょう。

§185 このような考え方を突き詰めていくと、ラングの優先を説いたソシュールに対して、パロールの方が重要だと考えることになります。変化はまさにパロールの中で起こることになるからです。セシエはこの点に関して次のように言っています (cf. [63])。

パロールは論理的に、またしばしば実践的にも、ソシュール的な意味でのラングに優先する。……もしもラングがパロールによって生み出されるとすれば、パロールはどのような瞬間においてもラングによって完全に生成されることはあり得ない。

セシエのこのような考えは、パイイの考えを更に推し進めたものであって、ソシュールの学説にある問題点を、先取りしたものであるといえます。

(3) カルツェフスキー

§186 セルゲイ・オシポヴィチ・カルツェフスキー Сергей Осипович Карцевский (1884-1955) もジュネーヴ大学でソシュールの講義を聞いた一人でした。この人はモスクワ言語学派にも、またプラーク学派にも関わった人です。ですから彼をどこに所属させるべきかは問題ですが、その考えからすれば、どこに所属させてもかまわないように思えます。この人はロシア人でモスクワ大学に学びましたが、彼が未だ学生の時、1905年の革命が起りました²。カルツェフスキーはこのデモンストレーションに参加したために口

²いわゆるソヴエト社会主義革命は1917年ですから、1905年の革命というのは、ロシア史を研究している人にしか余り馴染がないと思いますが、日露戦争(1904-1905)が日本の勝利によって終わったとき、ロシアは経済的に非常に疲弊していました。このとき当時のペトログラードの民衆が1905年の1月9日の日曜日(旧暦)、デモンストレーションをおこないました。これは8時間労働制、集会の自由などについて皇帝に請願するためのものでしたが、ツァーの政府はこれに対して民衆に発砲しました。死者およそ1000人、傷ついた者2000人にのぼったといわれます。「血の日曜日」といわれる事件です。これは映画監督エイゼンシュテインの名を不朽のものとした「巡洋艦ポチョムキン」Броненосец Почёмкин(日本の映画の題名は「戦艦ポチョムキン」となっていました)で描かれています。彼はこの映画で世界ではじめてモンタージュの手法を映画に用いたのです。それはともかく、民衆はこのことで激高し、その動揺は軍隊にも広がっていきました。これがやがて来るべき社会主義革命を準備したといえます。

シアにおれなくなり、亡命してジュネーヴに来て、たまたまソシュール及びバイイの講義を聞いたということです。1917年社会主義革命が起ると、彼は祖国に帰りました。そこで彼はロシアにソシュールの学説を伝える役目を果すこととなります。しかし祖国も彼の考えとは異なるように動いて行きました。そのため彼は再び亡命してプラークに住み、プラーク学派の学者たちと研究を続けることとなりました。

§187 彼はいくつかの著作を残していますが、一番重要と思われるのは『プラーク言語学集団論集』(*Travaux du Cercle Linguistique de Prague*)の第1号(1929)に載せられた「言語記号の非対称的二重性」*Dualisme asymétrique du signe linguistique* という論文です。

「非対称性」というのは言語記号のばあい、能記と所記とが必ずしもぴつたりと対応しているわけではなく、「ずれ」があることが多いという意味で使われています。例えば英語の *cold* という単語は「冷たい」とか「寒い」という意味にも使われますが、名詞として使われると「寒さ」や「風邪」の意味になります。つまり同じ能記が違う所記と対応することになります。このようなばあいを同音異義語 *homonym* というわけです。逆に異なった能記が同じ所記に対応するばあいがあります。たとえば、英語で *doubt* と *suspect* とは、能記が異なっていますが、所記は「疑い」という意味を持っています。このようなばあいは同義語 *synonym* といわれます。もちろん多少のニュアンスの違いはこの際問題にしません。論理的なレヴェルの話です。

日本語のばあいには更に表記の問題が絡んできます。例えば詩人はこれを利用して「悲しさ」とか「哀しさ」というように、ニュアンスの違いを巧みに利用しています。

II. パリ学派

(1) メイエ

§188 メイエ Antoine Meillet (1866-1936) は、ソシュールがパリを去った1889年から1890年に彼の後を承けてパリの「高等教育学院」のアルメニア語講座の職に就きました。翌1991年、彼は同学院の印欧語比較言語学部門の長となり、1902年から1906年まで東洋語学校でアルメニア語を教えまし

た。その後ブレアルの跡を継いでコレージュ・ド・フランス Collège de France の印欧語比較言語学の教授になりました。彼は印欧語のほとんど全ての語派について研究を行い、非常に広範な知識を持った学者になりました。ある意味で彼はそれまでの比較言語学を集大成したということもできます。

§189 こういう経歴によって、彼はフランスを代表する有名な比較言語学者になりました。しかし彼は決して 19 世紀の青年文法学派の比較言語学をそのまま引き継いだわけではありませんでした。彼は 1903 年に名著『印欧語比較文法序説』[17] を出版しましたが、その中で、ある種の言語の間には一定の音韻の対応、文法の類似などが見られ、これらがかつて存在していた一つの言語から分れ、変化してきたものだと考えないわけには行かないこと、そのような祖語に当るものは印欧語以外にもいろいろあることを述べています。それと同時に彼は、比較文法の目的は決してこの「失われた祖語」そのものを得ようとするものではなく、「歴史的に実証される一定の対応の体系」であると言っています [17, p.41].

§190 このようなメイエの考えは、文字にならない前に消えてしまった言語がたくさんあるに違いないこと、そのためにそれらの言語の内のいくつかにしか伝えられていなかった祖語の要素が消えてしまって、現在「歴史的に実証できる」言語だけでは祖語の状態が分らないはずだという、非常に冷静で科学的な学問態度によるものと思われます。比較言語学の方法には、厳密に考えれば、このほかにもいろいろな方法上の問題があることが分ってきました。

彼は言います。

印欧諸語の比較文法は、ラテン語が知られていないばあいのロマンス諸語と同じ状況にある。それが関わるただ一つの実証された諸言語間の対応だけである。これらの対応は共通の事実を仮定させる。しかし仮説に頼らないでこの事実から何らかの概念を作ることにはできないが、この仮説は実証不可能である。したがって対応だけがこの学問の対象なのである。比較によって消え去った言語を再建することはできない。ロマンス諸語の比較によって紀元 4 世紀に話されていたラテン語について正確な姿も、完全な姿も得ることはできない。印欧諸語の比較がこれよりもっと示唆的であると信じる理由はない。したがって印欧祖

語を再建することはできないのである [17, pp.40-41]³.

§191 例えばロマンス諸語の源となったラテン語は、印欧語族の言語の中でただ一つ、文献によって知られている祖語です (cf. p.53). 普通ラテン語といわれるのは大まかに言うとキケロ (Marcus Tullius Cicero BC 106-43) から、帝政ローマの初代皇帝となったアウグストゥス (Augustus, 本名 Gaius Julius Caesar Octavianus BC 63-AD 14) に至る金の時代のラテン語、及びその後の帝政時代に用いられた銀の時代のラテン語を指します。それ以降はだんだん生きたことばとして使われることがなくなって、専ら教会の文書など、書き言葉として使われるようになっていきます。

§192 金の時代以前の作家として知られているのはエンニウス (Quintus Ennius BC239 頃-169 頃) とプラウトゥス (Titus Maccius Plautus BC 254 頃-184 頃) ですが、エンニウスはすべて逸文 (他の人々の作品の中で引用されることで、今に伝わっている文章) で伝えられているに過ぎません。これに対してプラウトゥスの喜劇は 19 編がほぼ完全な形で残されており、一部は逸文の形で残されています。プラウトゥスの戯曲のなかの登場人物は殆ど庶民で、地口や冗談、洒落などを交えた生き生きとしたことばで、当時の社会のありさまを描き出しています。これは一種の大道芝居で、観客も庶民だったと思われる。ここで示されているような統一した言語世界を比較方法によって得ることは不可能です。

§193 メイエは「比較方法の限界」という論文の中で、これらの問題につ

³La grammaire comparée des langues indo-européennes est dans la situation où serait la grammaire comparée des langues romanes si le latin n'était par(sic) connu: la seule réalité à laquelle elle ait affaire, ce sont les correspondances entre les langues attestées. Les correspondances supposent une réalité commune; mais de cette réalité on ne peut se faire une idée que par des hypothèses, et ces hypothèses sont invérifiables: la coprrespondance seule est donc objet de science. On ne restitue pas par la comparaison une langue disparue: la comparaison des langues romanes ne donnerait du latin parlé au IV^e siècle ap. J.-C. ni une idée exacte, ni une idée complète; il n'y a pas de raison de croire que la comparaison des langues indo-européennes soit plus instructive. On ne restitue doc pas l'indo-européen.

いて論じていますが、その中で最も大きいと思われるものを一つあげるとすれば、次の点ではないかと思われます。

たとえばサンスクリットでは「彼らは運ぶ」という、複数3人称現在の形は *bhar-anti* といいます。ギリシア語ではこれは *fér-ousi φέρουσι(v) < *phér-onti* (ドーリア方言 *féronti φέροντι*) といい、ラテン語の *fer-unt*、スラヴ語の *ber-qt БЕРѢТ* (意味は「取る」) に対応します。ここから「音韻対応表」によって **bher-*「運ぶ」という語根 (cf. E. *bear*, *Christopher* 「人名」 < *Khristophóros* < *Χριστοφόρος* 「キリストを運ぶ(人)」) と、三人称複数の語尾 **-onti* が求められます。

§194 しかし、これらの語幹と語尾が比較方法によって求められたとしても、これらの要素が同じ時代にあったという保証は、理論的にはないのです。これはちょうど星座に似ています。実際の星は地球からの距離がそれぞれ非常に違っていますが、距離がとても遠いために、地球から見れば同じ平面に並んでいるように見えるだけです。これと同じことが、比較方法のばあいにもないということではできません。

このためメイエは比較方法を、先に述べたように「歴史的に実証される一定の対応の体系」に限定したのです。

§195 更にメイエが19世紀の「青年文法学派」の唱道した言語の観方と異なっているのは、言語における社会的な性格と個人的な性格の問題でした。青年文法学派のばあいには、現実存在しているのは個人的な心理であって、社会的な産物としての言語というのは言語学者が考え出した抽象的なものに過ぎない、というものでした。これに対してメイエは、次のように述べています。

個人の観点からすれば、ラングは運動と感覚の無意識的な連合から成る複雑な体系であり、それをを用いて話したり、他の人々の発するパロールを理解することができる。この体系は各人に固有のものであり、どのような人とも同じではない。しかしそれは、個人が属している社会的なグループがかなり類似した体系を持っていないと、価値を持たない。そうでなければ、人は他人のいうことを理解したり、また理解するであろうなどということは、無いであろう。……人間の社会がランガージュ(言語活動)なしに存在できないのと同じように、ラング

が存在するのは社会によってである [17, p.18]⁴.

このような考えはソシュールから受け継いだものであり、この点で彼は紛れもなく、ソシュールの弟子であったといえます。ソシュールはこのような社会的な観点を、当時広く知られていたフランス社会学派の創始者とされるデュルケム Émile Durkheim (1858-1917) の思想から取り入れたといわれています。

§196 他方、彼は「ラングという連想の体系は個人から個人へと直接に伝わるものではない。いわれているように、言語活動が、もの, ἔργονではなく、はたらき, ἐνέργεια だからである」 [17, p.18]⁵ と述べています。このことから、メイエがフンボルトの思想を良く理解していたことが分ります。ソシュールの『一般言語学講義』では、「言語活動」le langage の理論的な位置付けがはっきりせず、研究者の疑問や批判がさまざまに提出されるようになりますが、その後の研究から、ソシュールの本来の意図は、メイエのこの箇所と同じであったと考えられるようになりました。

(2) ヴァンドリエス

§197 ヴァンドリエス Joseph Vendryes (1875-1960) はメイエの弟子で、師と同じく印欧語学者でした。彼が最も力を注いだのは、言語の社会的な機能と言語変化の社会的な要因の研究でした。この意味で彼は社会言語学の先駆者となりました。

メイエと同じように、ヴァンドリエスは言語を社会的な現象と考えていました。彼は言語の起源について、社会的な要因を重要なものと考え、次のよう

⁴Au point de vue de l'individu, la langue est un système complète d'associations inconscientes de mouvements et de sensations au moyen desquelles il peut parler et comprendre les paroles émises par d'autres individus. Ce système est propre à chaque homme et ne se retrouve identique chez aucun autre; mais il n'a une valeur qu'autant que les membres du groupe social auquel appartient l'individu en présentent de sensiblement pareils: sinon celui-ci ne serait pas compris et ne comprendrait pas autrui La langue n'existe qu'en vertu de la société, de même que les sociétés humaines ne sauraient exister sans langage.

⁵La système d'associations qu'est la langue ne se transmet pas directement d'individu à individu; comme on l'a dit, le langage n'est pas une œuvre, un ἔργον, c'est une activité, une ἐνέργεια.

に述べています。

言語は社会の中で形成されたものである。それは人々が相互にコミュニケーションする必要を感じたそのときに発生した。言語は感覚器官を支配し、自然がくれた自己のコミュニケーション手段を利用することのできる若干の存在の接触から生れるものである [32, 146].

従って彼は言語というものを社会的な契約によって生じたものだと考えました。これは彼自身が認めているように、ジャン・ジャック・ルソー Jean Jacques Rousseau (1712-1778) の社会契約説を受け継いだものだとされています。

第十章

ことばの研究 X ロシア一般言語学

ボドゥエン・デ・クルテネとポテブニャ

1. ボドゥエン・デ・クルテネ

§198 特に日本ではソシュールほどには知られていませんが、ヨーロッパにおいて有名な言語学者に、ボドゥエン・デ・クルテネ Jan Baudouin de Courtenay (1845-1929) がいました。彼はポーランド人で1863年の反乱のあと、ポーランド人は大学に進学できなかったので、ワルシャワの「大学校」Szkoła Główna¹ 歴史・哲学部に入ることになりました。1870年に一家はライプツィヒに移り住みましたが、ヤンは1867/68年度に給費留学生として、チェコのプラハ、ドイツのイェナ及びベルリンに学び、やがてベオグラード、クラカウ、コレージュ・ド・フランス Collège de France などからの招きを断って、ペテルブルグ大学の助教授になりました。

§199 彼の考えによれば、第一にあらゆる言語的事実は、孤立した状態で考察してはならないのであって、それが存在している固有の環境、空間及び時間の中で考察しなければならない、というものでした。また第二に研究の方法としては、ある言語を研究する際にはそれを直接に観察して得られる知識に依拠しなければならないと、彼は主張しました。この第一の考え方から、言語が社会的な存在であるという彼の考え、また第二の考え方から文字と音声並びに語の形態的側面と音声的側面とを厳格に区別せねばならないことが導かれます。

§200 ここで「文字」というのは今のことばで言えば「音韻」または「音素」phonemeということになり、また語の「形態論的側面」と「音声的側面」というのは、「形態素」morpheme と「形態」morph ということになります。音韻と形態素はソシュールのいうラングに属するものですし、また音声 phone

¹当時ポーランドを支配していたロシア帝国は、ワルシャワに大学の設置を認めなかったため、実質的に大学に当り、しかもポーランド語で教育する施設を「大学校」と称しました。

と音声的側面というのはパロールに属するものです。ポドゥエンはソシュールより早く「音韻」という言葉を使ったとされていますが、今述べたことから、ポドゥエンはソシュールが述べた「ラング」に属するものと「パロール」に属するものを厳密に区別する必要があることを、主張していたことが分ります。

§201 更にまたこの区別が第二の主張、すなわち言語を研究する際に直接に観察して得られる知識に基づかなければならないという主張は、明らかにパロールを優先させるべきであると彼が考えていたことを示すものだといってもよいと思います。これはすでにソシュール及びその直接の弟子たちの項で見ましたように、ソシュールの『一般言語学講義』に見られる問題点をすでに先取りしたものだといえることができます。

§202 また彼はある時点に起るプロセスと長い間に言語に起るプロセスとを厳格に区別しなければならないともいっています。これはソシュールのいう「共時」と「通時」がポドゥエンにおいてもすでに区別されていたことを示していますが、ここで注目すべきことは彼が「プロセス」と表現していることです。これは彼が通時的変化が生じるのは偏にパロールにおいてであると考えていることを示すものと思われるからです。さらにこの考えを推し進めれば、パロールにも、通時的なものと共時的なものとを区別することができるかもしれません。共時面において生じる無数のパロールのゆれのあるものが、通時面におけるゆれとして継承され、やがてラングにおける通時的な変化へ導くと考えることもできるからです。このような考えは、ポドゥエンのこの理論の直接の継承であるかどうかは分かりませんが、後にプラーグ学派において理論化されることになりました。

§203 彼は、1874年に南ロシアのカザン大学にはじめ助教授として着任し、後に教授としてさまざまな講義を行いました。彼のもとで学んだ弟子たちの中には、クルシェフスキー Miłołaj Kruszewski (1851-1887) の他に、例えばロシア最初の実験音声学者の一人である、ボゴロヂツキー (Vasilij Alekseevich Bogoroditskij Василий Алексеевич Богородицкий 1857-1941)、大著『ロ

シア言語学史』を著したブーリッチ (Sergej Konstantinovich Bulich Сергей Константинович Булич 1859-1921), ラドロフ (Vasilij Vasil'evich Radlov Василий Васильевич Радлов 1837-1918) などがいました。古代チュルク語の碑文の文字は 1893 年トムセンによって解読されましたが、ラドロフはこの文字で書かれたオルホンの碑文の翻訳を初めて試み、翌 1894 年にこれを出版しました。

2. ポテブニャ

§204 ポドゥエンがこのように考えるようになったのは彼が言葉を心理的な存在であると考え、また「自我」を心理的・社会的なものと捉えていたからだと思います。そしてこれはまたフンボルトに深い影響を受け、名著『ロシア文法覚書より』*Из записок по русской грамматике* 全 4 巻 (I, II — 1874, II — 1899, IV — 1941) を著した大学者ポテブニャ (Aleksandr Afanasievich Potebnja Александр Афанасьевич Потебня 1835-1891) の影響を受けたからだと考えられます。『言語学説史』を書いたコンドラシヨフは、ポテブニャについて、「ロシアの文法学においてポテブニャほど文法的な諸問題と言語形式の諸問題、及び思惟と認識の形式をこれほど緊密にかつ深く結びつけたものはいない」[46, p.89] といっています。

§205 ポテブニャは、次のようにいいます。

語が人間と自然の関係を含む一貫した諸体系の形成に参加していることを示すのが、言語史の基本的課題である。もし言語が既存の思想を表す手段ではなく、思想を形成するものであり、言語はすでにできあがった世界観を反映するものではなく、世界観を作り上げる働きであるという基本的な命題を受け入れるならば、我々はこの参与の意義を正しく理解することができよう。自己の精神的な運動を捉え、自己の外的な諸知覚を意味づけるためには、人はそれらの一つ一つを語として客体化し、それを他の語と関係づけなければならない。自己の(内的な — I.Y.) 世界と外的な世界とを理解するためには、我々にこの世界がどう見えるか、その個々の性質が、どのような比較によって理性にとって感覚できるようになったかというのは、全くどうでも良いことである。要するに、思想にとってはどうでも良いことでないのは、語の内的形式のもともとの性質と忘却の程度

である [48, p.141].

§206 ここでポテブニャは言語というものがすでにできあがったものを表現するだけのものではなくて思惟そのもの、認識そのものを作り上げる活動であると考えていました。言い換えれば、フンボルトのいうように言語はエルゴンではなくエネルギーだということです。だからこそ言語というものは常に変化し続けるものでなければならないということになります。そしてそのようなエネルギーであるということは思惟を表しうるものでなければなりません。それは文でなければならないでしょう。ポテブニャはこのようにして個々の意味単位ではなくして文が最も重要なものだと考えます。

§207 それでは上に引用した文章の中で述べられている「内的形式」とはどういうものだったのでしょうか。この「内的形式」innere Sprachform というのは、もともとフンボルトが言いだしたもので、その真意については色々な解釈や批判があります。しかしポテブニャが考えていたのは、形のない客観世界の事象に語や文という形を与えることによってはじめてそれを人間が客観化し、認識できるということだと思われまます。「言語は……思惟の形式であるがそれは言語以外に見いだせないような形式である」と彼はいいまます。

§208 彼は更に「言語の内容は言語外的な意義のシンボルから成るに過ぎず、言語外的な意義に対して形式なのである」とも、また「言語の形式性は、言語の個別的な内容が思惟においてそれが表わされると同時に、それにしたがって配置されるところの一般的な分類が言語の中に存在しているということである」ともいっています。

例えば言語の中に予め名詞、形容詞というような分類があつて、現実世界に例えば赤い色をしたものが見え、それが「花」という名詞に分類できるものに伴われていると判断したときに、「赤い花」という認識が、そのことばと同時に意識に表れるというような働きがある、というようなばあいを指していることができるでしょう。もしその「赤い色」が特殊な赤さであると意識されたときには、それは名詞という分類にしたがって、たとえば「朱」

と表現され、独立の存在として認識されることになるかもしれません。そうとすれば、言語は現実世界の事象が存在するための、いわば枠だとも言えましょう。

§209 したがってポテブニャにとって「ことば (i.e. パロール) や言語 (i.e. ラング) が、意味以外のものによって、すなわち他の語や他の形式以外のものによって、その存在や機能が認められるような形式は、存在しない」ということになります。すなわちパロールであれラングであれ、そこに現れる言語の形式は全体として他の形式の存在を予定していること、すなわち全ての形式は体系をなしていることを、彼は主張していると考えられるのです。これもまたソシュールの理論に見られる体系という考えに彼がすでに到達していたことを示すものだと考えられます。しかもポテブニャの考える体系はソシュールの『一般言語学講義』に見られるように、ラングに限られたものではないという点で、注目すべき考えだということができましよう。

§210 上で述べたように、言語がエルゴンではなくエネルギー、すなわち働きであるとするならば、それは毎回一回限りの事件でなければなりません。フンボルトはこのことを「言語は生成に即して定義されなければならない」としました。それは必然的にパロールの中の事件でなければなりませんし、したがって常に新しい言語の歴史を作ることであります。「言語の現実的な生は……ことば (i.e. パロール) の中で営まれる……ことばの中で語はその度毎に思惟の一つの行為に対応するのであって、いくつもの行為に対応するのではない。すなわち発音され、あるいは理解されるたびに一つの意義しか持たないのである」と彼はいいます。

§211 このように、ポテブニャは強くかつ深くフンボルトの影響を受けた学者だということができますが、決してフンボルトの学説を鵜呑みにしているのではなく、それを深い学識に基づいて解釈し、自分の説を展開した学者だということができます。しかし彼の著作は古今東西の言語資料を駆使し、大変難解なものであることと、ロシア語で書かれたという条件もあって、スラヴ言語学以外の人にはほとんど知られていないのが実状です。しかしその希

有の才能によって、彼の著作の中の多くの事柄は、現在でもその価値を失ってはいません。先に述べたように、ポドゥエン・デ・クルテネがポテブニャの思想に深く影響されたのも、当然であったと思われます。

§212 ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、当時盛んであった青年文法学派を中心とする比較言語学に対して、言語の本質、言語の認識における役割などを考察する一般言語学的な研究を行いました。もちろんこれは単に抽象的で理論的な思弁の問題ではなく、さまざまな言語現象の具体的で綿密な研究に裏打ちされるものでありましたが、逆にこのような理論が具体的な言語の諸現象の解明に、潜在的ではあっても、大きな役割を果たしました。このことは、彼の思想が長くかつ深刻な影響をその後の言語研究全体に及ぼしたことからも、明らかだと思われます。

§213 丁度これと同じような状況が、フェルディナン・ド・ソシュールに始る 20 世紀構造主義言語学の流れと並ぶ、フンボルトの流れを汲むポテブニャやポドゥエン・デ・クルテネの理論の中に、見ることができます。これは丁度数学的なものの見方が、それ自身表には出ないけれども、例えば物理的な諸現象、化学的な諸現象などの解明に隠然とした力を発揮することに似ているとも言えましょう。一般言語学の伝統は、日本では主として京都の研究者によって受け継がれ、京都学派の言語研究の特徴ともいわれました。

§214 ロシアではソヴェト期にマール (Nikolaj Jakovlevich Marr Николай Яковлевич Марр 1864/65-1934) の理論にそれが見られると思われます。マールは「マルクス主義言語学」の構築を目指すと主張していましたが、その内実はマルクス主義とは似て非なるもので、本質的にはポテブニャの流れを引くものでした。しかし彼の理論は一般言語学としては、さまざまな功績は認められるものの、行き過ぎて荒唐無稽な説を唱えるに至り、批判されました。しかしより中庸を得た理論は彼の同僚でもあり、弟子でもあったメシチャニーノフ (Ivan Ivanovich Meshchaninov Иван Иванович Мещанинов 1883-1967) に受け継がれました。彼は一連の著作や論文によって、今日見られる内容的類型学の基礎を準備したとすることができます。

第十一章

構造言語学の主な流派 |

アメリカ記述言語学

ブルームフィールドとアメリカ記述言語学

§215 アメリカにおいては、19世紀から20世紀にかけて興った人類学が、言語研究に大きな影響を与えました。

アメリカにはさまざまな先住民がおり、その研究は狭い意味での人類学、すなわち人類を対象に自然科学的な方法で研究するというのではなく、またある民族を自然科学的な方法だけでもなく、その風俗、習慣、文化、言語などにわたって幅広く研究しようとするものでした。このような人類学者として有名なのはフランツ・ボアス Franz Boas (1858-1942) でした。したがって言語の研究は民族学に含まれていたのです。

§216 これは何よりも、最初に研究の対象になった北アメリカ先住民の研究には、それに先だって彼らの言語の研究がまず必要になったからだと思われれます。先住民の言語がそれ以前には誰も研究したことがなかったからです。またこれらの先住民は文字を持ってはいませんでしたから、研究者には、まず、その時点で話されていた言語を記述することが、必要となりました。言語の共時態の研究から始めなければならなかったのです。

§217 しかもそのばあい、事情はヨーロッパにおけるのと全く異なっていました。その違いはヨーロッパの人々の予想をはるかに超えるものでありました。例えば、エドワード・サピア (Edward Sapir 1884-1939) の挙げている例を引用しますと、チヌークの言語では、inialudam という「文」は、はじめの a にはっきりしたアクセントをもっていて、形の上では一つの単語と見なすことができます。しかしこれを分析すれば、次のようになるといいます。

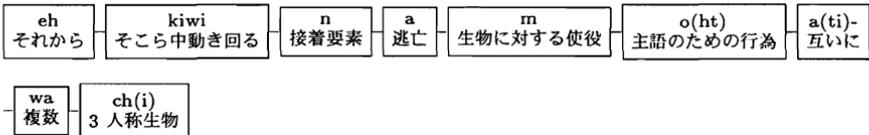
i-	n-	i-	a-	l-	u-	d-	am
近過去	私は	3人称	彼女を	間接目的	話手からの分離	与える	特定目的で来る/行く

したがって、全体の意味は「私は (-n-) 彼女に (-a-l-) それを (-i-) 与える (-u-d-) ために来 (-am) た (-i-)」というようになるといいます。

§218 あるいはまた、アルゴンキン語族に属するフォックス語では、同じように、

ehkiwinamohtatiwach(i)

という「文」は次のように分析されるといいます。



従ってこれは「それから (eh) 彼ら生き物は (chi)ある生き物に (m) 彼ら自身の (oht) 相互 (ati) から逃れて (a) さまよ わせた(kiwi)」= 「それから彼ら是一緒になって(彼を)自分たちのもとからずっと追ひ払っていた」という意味になるといいます。つまりここではヨーロッパの学者たちが自明と考えていた語と文の境界が、ほとんど明らかではないということなのです。

このような訳で、アメリカ先住民族の言語の研究のためには全く新しい方法と基準を考え出さなければなりません。しかもそれは厳密なものでなければなりません。何となく皆に分るというような方法が無効だったからです。

§219 第三の問題はヨーロッパの言語ならば、例えば格とか数とか性とかのように、言語毎に異なってはいても、共通に理解できるものがありました。が、アメリカ先住民の言語では、そのような共通性は必ずしも認められないということでした。また意味に至っては、例えば「雪」という言葉にはエスキモーの言語ではいくつかの異なる単語があり、逆にダコタの言語では「咬む」、「突つつく」、「束ねる」という意味が一つの語で表されるというようなものも見られるといいます。

日本語でも例えば出世魚といわれるような魚のばあい、「はく」(3-4cmのもの)―「おぼこ・すばしり」(小型のもの)―「いな」(20-23cmのもの)―「ぼら」(成魚)―「すばしり」(特に大きいもの)、「せいご」(幼魚)―「ふっこ」(少し成長したもの)―「すずき」(成魚),あるいは東京地方では「わかし」―「いなだ」―「わらさ」―「ぶり」,大阪地方で「つばす」―「はまち」―「めじろ」―「ぶり」のように,同じ魚が大きさによって呼び名を変えるばあいがあります。アラビア語では駱駝を表す語が,駱駝の年齢,毛の色,雌雄,歯の数などによって二百くらいの異なる名で呼ばれるという話があります。これらは何れもその民族の住んでいる環境によるものだと思います。

§220 やがてこのような民族的な特徴の言語に対する影響ないし反映を重視しながら研究を進める方向と,もう一つ,先住民の言語を正確に記述し分析するという手続の面を重視する方向の二つが生れてきました。なぜならば,先住民の言語を,それまでヨーロッパの言語学で蓄えられてきた知識で記述できない以上,先住民の言語を話す住民(informant)の言語を記録し,これを分析して,そのinformantの言語の体系を記述し,分析するということが,まず大切なことだという,考えも生れてきたからです。

前者はエドワード・サピアに代表される流れで,民族言語学 ethnolinguistics という名で呼ばれています。もう一つの流れはレオナード・ブルームフィールド Leonard Bloomfield (1887-1945) にはじまる流れで,共にフランツ・ポアスに学んだ経歴を持っています。

§221 ブルームフィールドのばあい,厳密には意味を定義することができない以上,意味を除外する必要があると考えました。これには当時興って来た心理学の行動主義 behaviorism というのが大きい影響を与えました。

これは例えばジャックとジルが歩いているとき,ジルがジャックに何か話しかけたとします。するとジャックは側にあるリングの木に登って実をもぎ,それをジルに与えたとします。それが例えばジルが「お腹が空いた」と言った意味だということになるということです。

ブルームフィールドの考えは,彼自身の挙げている例を引用すれば,次のように主張することになります。

$$S \rightarrow r \rightarrow s \rightarrow R$$

ここで S は「刺激」Stimulus, R は「反応」Reaction を意味しています。もし例えばジャックが「お腹が空いた」という刺激を感じ、自分で木に登って「リンゴをとった」というばあいならば「刺激」と「反応」は直結しています。しかし上に挙げたような状況のばあい、ジルは自分の中に生じた「刺激」S に対して擬似的な「反応」r を示します。この「反応」は空気その他を伝わってジャックに伝達されます。するとジャックはこの擬似的な「反応」r を擬似的な「刺激」s として受け取り、「リンゴをとって来て、それをジルに与える」という現実的な「反応」R を行うというのです。ブルームフィールドによればこのような擬似的な「刺激」と「反応」r → s が言語行為だということになります。

§222 このような単純化した理解で、彼は「意味」という、厳密にはつかめられないものを除外しようとしたと考えられます。ブルームフィールドが彼の立場を確立したのは、彼が 1933 年に出版した『言語』[8] という著書でした。これは当時アメリカの言語学的研究のほとんど全ての分野に影響を与え、日本でも特に英語学の分野を中心として大きな影響を与えました。ブルームフィールドのこの著作は「言語学のバイブル」とさえいわれて「記述言語学」の基本的な文献としてもてはやされました。もちろん世界的に見ればそのようないわば「熱にうかされた」状況が到るところに蔓延していたわけではなく、日本においても批判的な意見は依然として根強く存在していました。

§223 彼はこの著作の中で次のように言っています。

「人々が一定の状況において一定のことがらをはなすようにし向けるメカニズム、あるいはあれこれの言葉の音声は彼らの耳に達したとき、彼らが然る可きように反応するようにし向けるメカニズムを我々は知らない。」

あるいはまた次のようにも言います。

「我々が生きているこの世界についての我々の知識は極めて不完全であって、なんらかの < 言語形式 > の意味を正確に捉えることはまれにしかできない。」

明らかのように、ブルームフィールドはこのことによってこのようなメカ

ニズムが存在していること自体は否定していないのですが、それを研究するのは言語学者の領域ではないとしています。もしそうとすれば言語の研究は、意味を除外し、直接に与えられる音声というパロールに属するものを対象にして、そこから純客観的に例えば音素、形態素、文などを決定しなければならないこととなります。これは理論的に不可能でした。

§224 ブルームフィールドは、直接に与えられる音声を一次的な対象とするというその考えから、現地人のインフォーマントを使いました。そして「一定の(言語的 — I.Y.) 集団においてはある種の発話は形と意義に関して似通っている」という前提に立って分析するという理論を立てました。この前提なくしては分析ができないからです。しかしブルームフィールドを批判する学者たちが指摘していたように、ここでは少なくとも「意味的な相似」を仮定しなくてはならず、たとえ研究者がその意味を排除しても、インフォーマントが意味を知っているからこそ、ある断片と他の断片が「意味的に似ている」か否かを決定できるという点に、彼は目をつぶっていたということになります。

§225 このように基本的な前提において誤っているという点で、ブルームフィールドの所説は理論的に致命的な欠陥を持っていたといわなければなりません。それにもかかわらず、なるべく意味を関与させないで客観的に対象を研究しようとする彼の努力が、言語研究にさまざまな厳密化をもたらしたことは、認めなければならぬでしょう。

§226 そのようなものとして、例えば「相補分布」complementary distribution という概念があります。これはその前提に「環境」environment という概念を用いています。例えば前に述べた例を使いますと、日本語のばあい、[p] という音声は語中の位置に現れます。この環境を [V-V] あるいは [Vm-V] などとします(ここで V は母音を表しています。また [Vm-V] は [m] の後、母音の前の位置を表しています)。例えば [su-p-onji] 「スポンジ」あるいは [sim-p-o] 「進歩」など。これに対して有気音 [ph] は [# -V], [Vp-V] という環境(ここで # というのは前に何も無いこと、すなわち語頭の位置を、[Vp-V] の [Vp] というのは促音を表しています)には現れますが、[V-V] あるいは [Vm-V] と

いう環境に現れることはありません。例えば [# -ph-an] 「パン」, [ʃup-ph-an] 「出版」, [bap-ph-onteki] 「抜本的」など。

§227 これに対して [b] という音声は [# -b-anana] 「バナナ」, [sa-b-anna] 「サバンナ」, [tom-b-o] 「トンボ」 などには現れます。ただし [Vp-V] という環境には現れないようです。これを表にすると、次のようになるでしょう。

音声	環 境			
	[V-V]	[Vm-V]	[Vp-V]	[-V]
[p]	[su-p-onji]	[sim-p-o]	—	—
[ph]	—	—	[shup-ph-an]	[-ph-an]
[b]	[sa-b-anna]	[tom-b-o]	—	[-b-anana]

§228 明らかなように [p] と [ph] とは同じ環境には現れません。このような分布をするものを、相補分布といいます。棲み分けをしているのです。このようなばあい、[p] と [ph] は同じ音素に属する異音 allophone であるといえます。したがってこれらを入れかえても意味の上には変化が生じないのです。これに対して [b] は [ph] とも [p] とも相補分布をしてはいません。したがって [b] は [ph] および [p] とは異なった音素に属し、これを入れかえると意味が異なることとなります。

§229 一方中国語あるいは朝鮮・韓国語のばあいは、日本語と異なって、[p] と [b] は相補分布をしていて、同じ音素に属しています。

したがってこれらの音声と [ph] あるいは [ʔp] (ʔ は朝鮮・韓国語にある音で、声門を一旦閉鎖することを表しています。これを声門閉鎖 glottal stop といい、声門閉鎖を伴う音を声門閉鎖音 glottalized consonant といいます) は、それぞれ異

音 声	[ph]	[p]	[b]	[ʔp]
日 本 語	/p/		/b/	?
中 国 語	/ph/		/p/	?
朝鮮韓国語	/ph/		/p/	/ʔp/

なった音素に属しています。

§230 このような分布の相違によって、日本人にはその違いがはっきり分り、どこに出てきても即座に判別できる [p] と [b] が、朝鮮・韓国の人には同じ音に聞えてしまいますし、逆に朝鮮・韓国の人には全然違う音と感じられる [ph] と [p] とが、日本人には同じ音に聞える、ということがしばしば起ります。もし中国語、あるいは朝鮮・韓国語で例えば [pa] という音を日本語の「パ」で表記すると、日本人はこれを [pha] あるいは [pa] と発音します。たまたま [pa] と発音すればよいのですが、[pha] と発音すると、これらの国語を話す人たちには、全く違った単語に聞えてしますということになります。

この危険を避けようとするれば、「パ」と表記すれば良いことになります。[ba] は朝鮮・韓国語でも、中国語でも必ず /p/ に対応するからです。北京は日本人の耳にも「ペイチン」といっているように聞えます。しかしこれを訓練を受けていない日本人の感覚でそのまま真似すると、日本語の特性から [pheitʃin] となってしまうでしょう。英語のばあいこの都市の名は Beijing と書かれ、[beidʒin] と発音されているのは、こうすれば少なくとも中国人の耳には [p] と同じ音に聞こえるからだと思います。

§231 逆に中国人あるいは朝鮮・韓国人が日本語の「パ」を発音しようとしたときはどうしたらよいでしょうか。再び先に挙げた対応表をみれば、[pa] と発音すれば、「バ」も [pa] と発音される可能性がありますから、適当ではありません。朝鮮・韓国語のばあい語頭では /pa/ は [pa] と発音され、語中の母音間では [ba] と発音されますから「パバ」も「ババ」も共に [paba] と発音され、区別がつかません。したがって間違われなくするために「パ」は [pha]、「バ」は [ba] と発音すればよいことになります。そうすれば、「パバ」は [phapha]、「ババ」は [paba] もしくは [baba] となって、少なくとも区別することはできることになります。ただし [paba] という、「普通」の発音では、日本人には違和感が残ることでしょう。著者自身戦前のソウルで、当時の朝鮮人の人が「下駄」のことを [keda] と発音しているのを聴いて、始めは何のことだろうと思った経験があります。

補説

§232 日本語の異音を説明するのに著者はしばしば「ばば」という語を使ってきました。これは語頭の「パ」と語中の「パ」とが異なった音であることを印象づけるためでした。しかしこれは外来語ですから、本当は余り適当ではありません。その理由は外来語というのは常にそれを借用した言語の音韻規則と少し異なるところがあるからです。ただ異音の説明に用いるばあいにはそのことを意識しなくて良かっただけです。

日本語の本来語に「母」があり、[haha]と発音されています。このような「は」という文字は、上代には[pa]という音価を持っていたということが分っています。したがって「母」は[papa]と発音されていました。これが奈良時代になると[p] > [ɸ]という変化が起って[ɸaɸa]と発音されるようになったといわれます。[ɸ]というのは両唇摩擦音で「ファファ」というように聞えます。更に平安時代になると、母音間の[ɸ]は[w]に変わり、それ以外の位置にある[ɸ]は[h]になりました。そうすれば「母」は[hawa]となるに違いありません。事実院政期に成立した古今集の写本『元永本古今集』には「はわ」と書かれたものがあるそうです。

例えば「川」は当然[kapa] > [kaɸa] > [kawa]というようになりました。歴史的仮名遣で「川」のことを「かは」と書くのはそういう歴史を写していたわけです。私は国語の専門家ではありませんから当否は分かりませんが、「は」を仮に機械的に[p]で置き換えると、例えば「かはのはしのうへにははがた」（「川の橋の上に母がいた」）というのは、上代ではひょっとして[kapa no pasi no upe ni papa ga wita]となるのかも知れません。面白いではありませんか。

しかしこのことからなぜ「母」が[hawa]とならなかつたのかが、逆に問題になるでしょう。これには「父」[titi]との類推のためだという説があるそうです。

第十二章

構造言語学的主要流派 II

プラーグ機能主義言語学

1. プラーグ学派をつくった人々

§233 アメリカの構造主義言語学と異なってヨーロッパではプラーグ学派という有力な構造主義言語学が現れました。正確にはこれは「機能主義的構造言語学」funkční a strukturální linguistika (lingvistika または jazykozpyt) といわれているものです。

機能主義は、チェコのプラーグにおいて、もともと英語学者として有名であったヴィレーム・マテジウス Vilém Mathesius (1882-1945) を中心として結成されたプラーグ言語学集団 Pražský linguistický kroužek のメンバーたちの標榜するものであります。

ここに結集した人々の中で、特に有名なのはロシア人ロマン・ヤコブソン (Roman Jakobson Роман Осипович Якобсон, 1896-1982), セルゲイ・カルツェフスキー (Sergej Kartsevskij Сергей Осипович Карцевский, 1884-1955) の外、ニコライ・トルベツコイ (Nikolaj Trubetskoy Николай Сергеевич Трубецкой, 1890-1938) などですが、その外当時プラハのカレル大学の助教授で、その後亡くなる直前まで大阪外国語大学で講師として音声学を講じておられたオレスト・プレットネル (Orest Pletner Орест Викторович Плетнер 1892-1970) 先生も居られました。

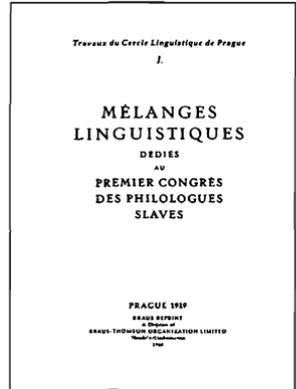
§234 これらの学者たちは何れもロシア人でしたが、中核となったのは、もちろんチェコの学者たちでした。それらの学者の名前は、世界的に広く知られていますが、残念ながら日本では有名であるとは言えません。

特に有名な人々を挙げれば、第一世代に属する学者として、既に述べたマテジウスの外、ボフミル・トルンカ (Bohumil Trnka 1895-1984), ボフスラフ・ハヴラーネク (Bohuslav Havránek 1893-1978), ヨゼフ・ヴァヘク (Josef Vachek 1909-1996) など、及び構造主義美学・文芸理論を専門としたヤン・ムカルジョフスキー (Jan Mukařovský 1891-1975) などが挙げられます。

また第2世代に属する人々としては、ヴラヂミール・スカリチカ (Vladimír Skalička 1909-1990), ヨゼフ・コルジーンネク (Josef Miroslav Kořínek 1899-1945), パヴェル・トロスト (Pavel Trost 1907-1988) などが挙げられます。

2. 機能主義とは

§235 この学派は、1929年にプラハで開かれた第一回国際スラヴィスト会議に向けて発行された「国際語」による論集『プラーク言語学集団論集』(*Travaux du Cercle linguistique de Prague*)の創刊号 [26] によって、一躍国際舞台に登場しました。この冒頭にこの学団の基本的な立場を明らかにする「テーゼ」が掲げられています。この中で言語というものは「機能的な体系」であるとされています。テーゼの言葉を用いれば、「言語は人間の活動の産物であるから、その活動と目的性という性格を共有している。表現あるいはコミュニケーションとして言語活動を分析するに当っては、話し手の意図が最も容易でかつ最も自然な説明となる、…… また言語というものはある目的に適合した表現手段の体系である」¹ ということになります。



論集創刊号

§236 つまり、言語活動というのは、必ず何かを伝えようとする活動であって、目的をもっているのであり、その目的に最も適した形で作られているものが言語体系なのだ、ということを主張しているのです。したがって、言語の体系は、それがどういう風に活用できるか、言い換えれば、どのような「機能」をもっているか、という点を抜きにしては、研究できないのだということです。この意味でプラーク学派は、自分たちの研究方法を「機能的・構造主義的言語学」(*funkční a strukturální lingvistika*)と名付けています。

§237 これについてプラーク学派の生みの親ともいべきマテジウスは次

¹Produit de l'activité humaine, la langue partage avec cette activité le caractère de finalité. Lorsqu'on analyse le langage comme expression ou comme communication, l'intention du sujet parlant est l'explication qui se présente le plus aisément et qui est la plus naturelle... *la langue est un système de moyens d'expression appropriés à un but.*(p.7)

のように言っています。

これまでの言語研究の方法が形式的であるといわれる意味は、文を研究する際にいつも既知のものとして形から出発し、この形式の意味あるいは機能は到達点だと考えられていることであった。これは言語学が長い間主として古いテキストを解釈し、したがって読者の立場に立っていたという事情による、自然な結果であった。形式的な方法を日常生活に移せば、聞いた語や文の意味を見つけ出さなければならぬ聞き手の立場と同じになる。現代の言語学はこれまでの形式の解釈と逆の立場に立ち、できるだけ意味あるいは機能から出発して、それがどのような手段で表現されるかを研究しようとする。それは自分が表したいと思うことに対する言語的形式を見つけなければならない、話し手あるいは書き手の立場である²。

§238 しかし、機能主義的なアプローチと構造主義的なアプローチを完全に調和させることは、現実にはなかなか難しいことです。機能主義的な立場に重きを置いていると感じられるのは、マテジウスをはじめとするチェコの学者たちでしたが、ロシア人学者たち、特にトルベツコイは、どちらかといえば体系、すなわち構造の問題に主な注意を払っていたように思います。もちろんこれは程度問題だと思われ、ロシア人学者のロマーン・ヤコブソンなどは機能の面も大事にしていたと思われま。

この間の事情をヴァヘクは次のように述べています。

機能的な観点には、プラーグ学派の「チェコ派」をなす他の研究者のばあいにも、多かれ少なかれ特徴的に現れていた(たとえば既に20年代におけるB. トルンカの言語の正しさについての結論、ムカルジョフスキーの詩の言語に関する研究その他を参照せよ)。これに対してプラーグ学派の「ロシア派」の研究者たちの研究は、言語の機能的側面を看過しはしなかったものの、それにもかかわらず

²Tradiční metodu jazykovědného bádání lze nazvat formální v tom smyslu, že se při zkoumání vždy vycházelo z formy jakožto věci známé, kdežto význam neboli funkce této formy se pokládala za to, k čemu je třeba dojíti. Byl to přirozený důsledek skutečnosti, že jazykověda se po dlouhou dobu zakládala hlavně na interpretaci starých textů a že se proto její stanovisko ztotožňovalo se stanoviskem čtenáře. V přenesení do běžného života se formální metoda ztotožňuje s metodou posluchače, který musí odhalit význam slov a vět, jež poslouchá. Stavějíc se proti tradiční interpretaci forem, vychází novodobá jazykověda naopak stále více z významu nebo funkce a snaží se zjistiti, jakými prostředky se vyjadřuje. Je to stanovisko mluvčího nebo pisatele, který musí najít jazykové formy pro to, co si přejí vyjádřit[14, p. 12].

その構造的な構成により大きな重点を置いた (たとえばトルベツコイの壮大な音韻体系の理論, 言語変化を破壊された体系の平衡を更新しようとする努力する治療手段であると理解することによって, 既にソシュールの場合に大きく口を開いている共時態と通時態の間の深淵に橋を架けようとする, ロマーン・ヤコブソンの試み, を参照せよ). またマテジウスとトルンカがプラーク学派において初めて量的音韻論の問題を扱ったのに対し, ロシアの会員の興味の前面に押し出されたのが, 常にむしろ質的音韻論の諸問題であったのは, 偶然のことではなかった [28, pp.13-14][73, p.83].

§239 以上のことから「機能」というのは, 少し手荒くまとめると, 話し手が何か表現したいと思ったときに, 話し手が最も効果的に自分の考えていることを, 彼の知っている言語を使って表現する働きであるということができるでしょう. そうすればこれは話し手の属している社会と深く関係している問題だと言えましょう. 相手が何を言いたいのか分ってくれなくてはならないからです. そして話し手がお互いに利用するのはラングに違いありませんが, 時と場合によってそれを一番効果的に使おうとします. その結果はパロールとなって相手に届くこととなります.

§240 ところで以前に「はは」は昔 [papa] と発音されていたと言いました. それがやがて [ɸaɸa] と発音されるようになり, やがて今日見られるように [haha] と発音されるようになりました. しかしこのばあい, たとえば [p] がある日突然「ファファ」[ɸ] に変わったわけではありません³. そんなことが現実には起ったら, バベルの塔の時と同じように, お互いに相手に言うことが分らずに, 大混乱に陥ってしまうに違いないからです. 実際は恐らくははじめ若者の間で [ɸaɸa] という発音が行われるようになり, 意味としては [papa] というのと変りがなかったに違いありません. 大人たちはこのような発音を聞いて「何というキザな発音だろう」と思ったかも知れません. しかし一方で, [papa] と発音しても [ɸaɸa] と発音しても意味が変わらないということは, [p] と [ɸ] とが同じ音素 /p/ の異音になったということを示すこととなります. やがて時が経ち, [ɸaɸa] という人たちが社会の大多数を占めるようになると,

³[ɸ] は [f] が下唇を歯で噛んで発音するのではなく, 上下の唇を合せて息を出す両唇摩擦音です.

逆に [papa] と発音する人々は、「なんと爺むさい発音だろう」といわれるようになったかも知れません。その内この発音をする人々が亡くなってしまうと、[p] は晴れて [ɸ] に変ることになります。

§241 このように、当り前のことですが、言語は社会的側面から独立して存在することはできませんし、また社会的な活動はパロールなしではあり得ません。したがって、パロールにおける小さい変化が重なって、やがてラングの変化に反映されることになります。そうすれば、パロールは言語の共時態と通時態とを媒介するものだといえます。

このようなことは日常的に起っています。たとえば最近テレビで「僕的には興味がありません」などという人を見ることがあります。一昔前にはこの言い方はあり得ませんでした。聞いても恐らくは意味が分らなかったでしょう。可能なのは「僕としては興味がありません」です。しかし「~的」という言い方が最近増えて来るにつれて、変な言い方だと思ふ人は未だ多いと思いますが、少なくとも何を言いたいかは分るようになってきました。この言い方はやがて消えていくかも知れませんし、便利なので「~として」に取って代るかも知れませんが、今は両方の言い方が「理解できる」状態にあることは間違いありません。

このようにしてみれば、プラーグ学派は、第九章で引用したシャルル・バイイの、「言語というものは絶えず変化しているが、それは変化しないことによるのみ機能することができる」という、有名な言語学的二律背反を理論的に解決していたということが出来ます。

3. 思想的先駆

§242 プラーグ学派は、言語学だけにかかわるものというよりも、言語現象を広く全体として扱おうとする、伝統的な環境の中で生れたということが出来ます。たとえばムカルジョフスキーは1940年に、構造主義美学について次のように書いています。

構造主義美学の成立は、もちろんそれほど以前には遡らない。しかしその根は一方では美学そのもの、他方では哲学という、かなり遠い過去に求めねばならず、更に記号の学問でこれまで最も研究された分野である言語学に求めねばなら

ない。美学の先駆者の中ではまず第一に、ヘルバルト⁴の美学が挙げられねばならない。チェコにおけるその美学の信奉者ドゥルジーク⁵とホステンスキー⁶が道を拓き、その道の上でホステンスキーの弟子ジフ⁷が、最後の頃の仕事で、構造的把握に近づいている。更にこのチェコ国内での発展は、ロシア・フォルマリズムとの出逢いによって刺激を受け、方法的に深められたが、しかしチェコの発展は、記号の総体としての構造という着想によって、ロシア・フォルマリズムを凌駕した。近代ドイツ美学からは、クリスチャンゼン⁸が構造主義の初期の発展に影響をおよぼした。美学的先駆者には更にその重要な構成要素として、文学においては象徴主義と共に始まり、絵画においては印象主義と共に始まり、建築においては機能主義と共に始まる、芸術家たちの数多くの理論的発言も入れることができる。

哲学的諸前提を与えたのは特にヘーゲルの哲学(構造とその発展の内的矛盾についての弁証法的把握)並びに、記号一般、特に言語記号の構成に関するフッサール⁹とピューラー¹⁰の認識である……構造主義美学は、言語学からはマルティ¹¹、マテジウス、メイエ、ド・ソシュールとジュネーヴ学派一般、並びにズバティーの業績に依存している。現在の状態では、構造主義美学の発展はチェコの学問の一現象であり、他の民族においても、部分的には類似した現象に出会うこともあるとはいえ、その方法論的な基礎は、どこにおいてもチェコにおけるほどには徹底的に考え抜かれてはいない [71, pp.33-34].

§243 ここでムカルジョフスキーは、ロシア・フォルマリズムとの出逢いについて語っています。この出逢いはプラーク学派にとって、極めて大きい意味

⁴Johann Friedrich Herbart (1776-1841). 彼は倫理学を広義の美学と結びつけ、これをヘーゲル的な内容的美学に対して形式的な美学の基礎となるものであるとしたといわれます。彼は美学的な契機を対称性、均整、調和、韻律性などのうちに見ていたといわれます。この学説は1940年代にチェコに知られるようになりました。

⁵Josef Durdík (1837-1902). 彼は最初ヘルバルトの見解にしたがっていましたが、後にカント、コントに影響を受けたといわれます。チェコで初めて美学についての著作『一般美学、詩学』(Všeobecná estetika, poetika 1875)を著したといわれます。

⁶Otakar Hostinský (1847-1910). チェコの現代音楽と美学の理論の創設者といわれます。

⁷Otakar Zich (1879-1934). 作曲家、美学者、カレル大学教授。講義ノートを基にした著作『音楽の美学』(Estetika hudby)があります。

⁸Broder Christiansen (1869-?).

⁹Edmund Husserl (1859-1938).

¹⁰Karl Ludvig Bühler (1879-1963).

¹¹Anton Marty (1847-1914) スイス人学者で、プラークのドイツ大学教授。言語、認識理論と心理学、特に時間と空間の認識を研究したといわれます。

を持っていました。ロシア・フォルマリズムというのは、1910年代の半ばから1920年代の終り頃まで、「オポヤス」(Ороуаз Опояз) という団体に拠って活動した人々についていわれているものです。これは「詩言語研究会」(Общество изучения поэтического языка) と訳されるもので、その代表的なメンバーとしては、エヴゲーニー・ポリヴァーノフ (Evgenij Dmitrievich Polivanov Евгений Дмитриевич Поливанов 1891-1938)、ユーリー・トゥイニャーノフ (Yurij Nikolaevich Tynjanov Юрий Николаевич Тынянов 1894-1943)、ヴィクトル・シクロフスキー (Viktor Vorisovich Shklovskij Виктор Борисович Шкловский 1893-1984)、ボリース・エイヘンバウム (Boris Mikhajlovich Ejkenbaum Борис Михайлович Эйхенбаум 1886-1959)、ロマーン・ヤコブソン、レフ・ヤクビンスキー (Lev Petrovich Yakubinskij Лев Петрович Якубинский 1892-1945) などが日本でも良く知られています。

§244 彼らの主張は、プラーグ学派のテーゼが発表された1929年の前年の1928年に、トゥイニャーノフとヤコブソンの連名で発表された綱領的な文書、「文学研究・言語研究の諸問題」によって示されています。これは9項目からなるものですが、要点は次のようにまとめることができます。

まず「構造」という概念については、「文学(あるいは芸術)の歴史は、他の歴史的な諸系列と関連しており、他の諸系列のすべてと同じく、固有の構造的な諸法則の複雑な複合体として特徴づけられる……」(第2項)とし、引き続き「機能」という概念について、「……文学的な材料、あるいはまた非文学的な材料が文学において用いられているとき、それは機能の観点から考察されるときにのみ、学問的研究の軌道に乗せることができる」(第3項)といます¹²。

§245 また通時と共時の関係については、「共時的(静態的)断面と通時的断面の鋭い対立は、つい最近まで言語学にとっても、また文学史にとっても、実り豊かな作業仮説であった。それが言語(あるいは文学)の、個々の生の瞬間における体系的性格を示していたからである。……今では純粋な共時主義は幻想である。すべての共時的体系は体系の分ちがたい構造的要素として、

¹²構造については [18, p.352].

自己の過去と未来をもっているのである……共時と通時の対立は体系という概念と進化という概念の対立であったが、これは原理的な重要性を失いつつある。あらゆる体系が必然的に進化として与えられ、他方進化は不可避免的に体系的性格をもつということを、我々が認めるからである」(第4項)と述べられています。

§246 この通時と共時を媒介するパロールとラングの関係についても、この文書は次のように言います。「parole と langue という、二つの異なった概念を主張し、それらの間の相互関係を分析すること(ジュネーヴ学派)は、言語の学にとって極めて捻り多いものであった。これら二つのカテゴリー(現存するところの規範と個別的な発話)間の相互関係という問題を、文学に対応して原理的に構築する必要がある。ここにおいても、個別的な発話は現存する規範に関係なく考察することはできない……」(第6項)[73, pp.285-288].

§247 プラーク学派の「テーゼ」では、その冒頭に「言語が機能的体系であるという考え」として、次のように述べています。

人間の活動の所産であるから、言語はこの活動と目的性という性格を共有している。言語活動を表現あるいは伝達として分析する場合、最も自然な説明は、言主の意図である。この故に言語学の分析においては、機能的見地を考慮しなければならない。この観点からすれば、言語は、目的に適合せしめられた、表現手段の体系である。いかなる言語事実も、それが所属する体系への考慮なしには理解できない……

更に前節にすぐ引続いて、「共時的方法の課題、その通時的方法との関係」については、次のように言います。

……言語を機能的な体系とする考え方は、過去の言語状態の再建、あるいはその発達の検証をこととする過去の言語状態の研究においても、同じように考慮されなければならない。ジュネーヴ学派が行ったように、共時的方法と通時的な方法とのあいだに、乗り越えがたい障壁を設けることはできない。もし共時言語学において、言語体系の諸要素をそれらの機能の観点から考察するならば、この諸変化を蒙った体系に対する顧慮なしには、言語の蒙った諸変化を判断することは、もはやできない……

他方、共時的記述も、もはや発達の観点を中心に除外できない。なぜなら共時的に考察された部門においてすら、消滅の途上にある段階、現在の段階、及び形成されつつある段階という意識が存在するからである。……[73, pp.351-353.]¹³

この二つの「テーゼ」を較べてみれば、ロシア・フォルマリズムがプラーグ学派の考え方にどれほど大きな影響をもっていたか明らかでしょう。

4. マテジウス

§248 しかしプラーグ学派の機能主義的な考えは、上で述べたような、チェコの伝統的な思想的環境や、ロシア・フォルマリズムの単なる模倣ではありませんでした。マテジウスはフンボルトについて次のように言っています。

言語を分析することははたらき(エネルギー)を分析することであって、もの(エルゴン)を分析するものではないという考えは、彼が言語における機能の意味を理解することを容易にしたが、同時に心理的な立場を過大評価するという誤りを彼に犯させた [73, p.334][15].

同時に彼はポドゥエン・デ・クルテネについて、次のように言っています。

ヤン・ポドゥエン・デ・クルテネの言語学の論文に見られる、溢れんばかりの豊かな思想において、機能という考えが顕著な役割を果たしている。ポドゥエンは所与の言語において音声の有し、その生理的性格とは同一でない役割を強調して音韻の概念を創り出したが、これは近代言語学の基礎をなしている。

しかしながら彼は自己の先駆的な考えから、言語学の方法及び言語学の体系にとって有用なすべての結果を導き出すことはできなかった。なぜなら彼は心理学の光に幻惑され、また言語が間断なく変化するという事実を余りにも重視し過ぎたからである (*op. cit.*, p.338).

§249 このような二人の先駆者の考えを批判的に取り入れることによって、マテジウスは「機能的構造主義」という考えに到達したというのです。

……しかしながら言語の共時的分析の必要と言語体系、言語構造というド・ソシュールの二つの基本的な思想は、ポドゥエンが既にソシュール以前に宣明した言語の機能という理念と共に、まさしく新しい言語学を建設するための基本的

¹³原文は cf. “Thèses” [26, pp.7-8].

な視点であることは疑いがない (*op. cit.*, p.338).

5. トルベツコイ

§250 これに対してトルベツコイは、もちまへの強い理論的体系的な志向から、音素(音韻)のあり方とその体系の可能性について、徹底的ともいえる分析と理論の構築を行いました。

言語の最も基本的な構成要素は音素(音韻)ですから、このことによって現代の言語学の最も基礎的な部分が明らかにされたと言えます。彼の『音韻論の原理』(*Grundzüge der Phonologie*)は1939年に発行されたプラーク言語学集団の第7巻に収録されています[27]。

たとえば音韻の分析においては、相補分布という考え方も取り入れていますが、機能的言語学の音素(音韻)の分析のばあいには、言語の意味を一切排除しようとする記述言語学とは反対に、「同一言語の2つの音が全く同一の音環境に現れ、それらを互いに入れ換えても単語の知的意味に違いがない場合、これら2つの音は唯1つの音素の単なる随意的な音声の変換である」[68, p.52]というように、音素の決定に「意味」の参与を認めています。

§251 音素の体系についても、彼は厳密な論理を用いました。たとえばあるもの(音素)が他のもの(音素)と対立するばあい、二つの種類があるといっています。一つは次元 Dimension による対立、もう一つは「平行性」とでもいべき対立です。対立というのは、その項の間に何か共通のものがないと対立とはいえない、というのが、トルベツコイの考えでした。「共通のものを1つも持っていない2つの物(たとえば、インク壺と自由意志)は対立を成さない」[68, pp.76-77]と彼はいっています。この共通のものをトルベツコイは「比較の基盤」*Vergleichungsgrundlage*と呼んでいます。たとえば E という文字と F という文字は F という共通なもの(要素)を持っています。比較の基盤です。その上でこの二つを比べてみますと文字 E は比較の基盤 F のほかに要素“_”を持っていますが、文字 F はこれを持っていません。このようにある特徴(標識 *Merkmal*)を持っているかいないかによって区別される対立を、欠如的対立 *privative Opposition* といい、対立の標識を持っている項を有標的(有徴的) *merkmalhaltig* な項、持っていないものを無標的(無徴的) *merkmallos* な項といっています。

§252 このことから P という文字と B という文字も要素 P を比較の基盤とする欠如的対立を成していることが分ります。しかし要素 P は文字 P と文字 B との比較の基盤というだけではなく、文字 P と文字 R との比較の基盤でもあります。このように比較の基盤が、相異なる二組以上の対立の基盤になっているような対立を、多次元的対立 *mehrdimensionale Opposition* といい、要素 F のように他のどのような対立の比較の基盤としても用いられていないものを比較の基盤とする文字 E と文字 F とは一次元的対立 *eindimensionale Opposition* と呼ばれます。

§253 この外に彼は 2) 漸次的対立 *gradueller Opp.*, 3) 等価的対立 *äquipollente Opp.* の三つのあり方があることを示しました (*op. cit.*, pp.81-82)。

たとえば [e] を発音しながら口の開きを小さくしていくと、やがて [i] の音になります。しかしどこから [i] になるのか、その境界ははっきりしません。このように次第に変化するようなものの対立は、漸次的対立 *gradueller Opposition* といいます。

§254 これに対して、ある特徴 (標識) があるかないかによる対立、あるいはある特徴の段階によって対立するようなもの (漸次的対立) のどちらでもないような対立もあります。

これは等価的対立 *äquipollente Opposition* と呼ばれます。たとえば [p] と [k] は「破裂音」、「無声音」という点で同じ基礎を持っています。[p] を特徴づける「唇音」と [t] を特徴づける「歯茎音」という対立は、欠如的対立でも、漸次的対立のどちらでもありません。したがってこれは等価的対立ということになります。

§255 この他にもトルベツコイは対立について細かく論じていますが、いずれにしてもこれらの分類は極めて論理的なもので、音素だけでなく、ほかのさまざまなカテゴリーを論じるばあいにもとても有用な考え方だといえます。

しかしこのようなトルベツコイの著作が有名になったために、プラーグ学派全体が音韻を中心にした研究をする学派だとか、もっぱらラングを研究する学派だとかいう誤解も生れました。日本でも、まだ今でもそう誤解している人は多くいます。

第十三章

構造言語学の主な流派 III

北欧学派と公理的言語学

1. ブレナルとウルダル

§256 構造主義言語学の有力な一派である北欧学派あるいはコペンハーゲン学派は、グロセマティックス *glossematics* と称されています。これは日本では「言理学」と訳されています。その先駆をなしたのはブレナル Viggo Brøndal (1887-1942) です。彼は元々論理学者で、ギリシア以来の論理学が発見して体系づけてきた論理的なカテゴリーを言語の中に再発見することに、主な関心があったといわれます。彼は自分の学問の目的は、「アリストテレスから現代の論理学者たちに至る人々が、哲学において作り上げてきた論理概念を言語活動の中に見いだすところにある」と述べているといえます¹。

§257 彼はその際に、次のようなことを述べています。

- 1) 学問の対象は、時間から切り離された一つの状態でなくてはならないこと、そしてこれらの状態の間には漸次的な発達ではなく、突然の飛躍があること。

- 2) 純粹に形式的な現象とその素材とを区別する必要があること

1) はソシュールのいう「共時」と「通時」の対立に対応し、2) は「ラング」と「パロール」の区別に対応しています。彼自身、言語の要素が互いに関係を持ち、一つの構造を作っていることを主張し、それが「構造主義という名のもとに既に知られている」考え方であると述べています [25, p.99]。通時は突然の飛躍によって起るという考えについては、たとえば生物学における突然変異が例としてあげられています [38, II, p.96]。

§258 彼はウルダル (Hans Jørgen Uldall 1907-1957) およびイェルムス

¹Seine Lehre "consiste à retrouver dans le langage les concepts de la logique, tels qu'ils ont été élaborés par la philosophie depuis Aristote jusqu'aux logiciens modernes" (Essais, S. XII) [25, p.98].

レウ (Louis Hjelmslev 1899-1965) と共に、1934 年「コペンハーゲン言語学集団」Cercle linguistique de Copenhague を結成し、1944 年には国際誌として *Travaux du Cercle linguistique de Copenhague* を刊行しました。

特に重要なのは、彼が理論としてそれまでの帰納に対して演繹の重要性を強調していると思われることです。

§259 この点について彼は次のようにいいます。

(特に論理実証主義の同志たちと同じく) 多くの言語学者は、(たとえば音声学的な現象のような) 諸現象を、予備的ないし同時的な分析を経ないで発見し、指定しそして記録することが可能であり、ただ一つの可能な方法は帰納的方法、すなわち個別的なものから一般的なものに至る方法であって、これら剥き出しの事実および直接的な現象の背後にはなにも隠されていないと考えてきた。ここで指摘することが重要なのは(しかもこれは現代哲学のすべての学者たちがますます明確な形で証明していることであるが)、経験や実験は、仮説や分析、抽象および一般化の基礎知識に依存しているのである。従って帰納は仮面を付けた演繹に過ぎないのであって、対象とする諸現象の間に指定された純粋な関係の背後には、所与の科学に特有な対象である現実が、必然的に前提されているのである。

.....

20世紀の優れた認識論者たちは、論理実証主義的な観点の弱点を感じてこれを明らかにした。そればかりか明白になったのは、この考えがもはや現代科学の進歩に寄与するものではないということである。一連の諸領域と同じく言語学においても新しい学問の精神は、反論理実証主義的なものである [38, II, p.95].

§260 これはどういうことを意味しているのでしょうか。科学には仮説が不可欠であることは、既にアンリ・ポアンカレ (Jules Henri Poincaré 1854-1912) が『科学と仮説』において述べています。たとえば幾何学でいえば仮説は公理あるいは公準に当たります。古典的な幾何学は紀元前 300 年頃のアレキサンドリアの学者エウクレイデース Eukleides (Εὐκλείδης) に遡るもので、彼の名を冠してユークリッド幾何学と呼ばれるものですが、これは五つの公準からなっています。すなわち、

1. 任意の点と他の任意の点とを結ぶ一本にしてただ一本の直線を引くことができる。

2. 任意の線分は、これを左右にいかほどでも延長することができる。
3. 任意の点を中心として、任意の半径の円を描くことができる。
4. 直角はすべて相等しい。
5. 2直線が1直線と交わっているとき、もしその同じ側にある内角の和が直角よりも小さかったならば、2直線は、限りなく延長すれば必ずその側で交わる [51].

§261 この最後のものは平行線の公準ですが、ロシアのカザン大学の教授であったロバチエフスキー (Nikolaj Ivanovich Lobachevskij Николай Иванович Лобачевский 1793-1856) やハンガリーのボーヤイ (Bóyai János 1802-1860) は、それぞれ「ある直線の外にある一点を通してこの直線に平行な直線は無数にある」(双曲的幾何学) という公準を採用しても、「そのような直線は一本も引けない」(楕円の幾何学) という公準を採用しても、内部矛盾を起さない体系ができることを示しました。またドイツのゲッティンゲン大学のリーマン (Bernhardt Riemann 1826-1866) は、これらの幾何学を特殊なばあいとして含む幾何学(リーマン空間の幾何学)を作りました。これらは非ユークリッド幾何学といわれています。

§262 このように一見自明であると思われていた公準を否定しても矛盾のない理論を作ることができることが示されたことは、公準あるいは公理の自明性を否定するものでもありました。一方このような「理論」の構築は、決して単なる知的な遊びではありません。これについて近藤洋逸、好並英司の『論理学概論』は、次のように述べています。

幾何学を例にとってみよう。普通の平行線公理を前提するユークリッド幾何学、それを否定し一平面上で一点を通り所与の直線と交わらぬ多くの直線が引けるという命題を公理にする双曲的非ユークリッド幾何学、一本も引けぬとする楕円の非ユークリッド幾何学、さらにこれら幾何学を特殊な場合として含むリーマン幾何学。その他多くの幾何学があるが、幾何学そのものの立場からは、どの幾何学の空間が現実の空間であるかは問題ではない。事実上の、実質上の真偽は幾何学の中心問題ではなく、しかじかの公理系からどのような定理が演繹されるかが関心の焦点にある。勿論、幾何学は現実の空間関係の考察から多くの命題を撰

取したのであるが、この摂取した命題を自由に変様して新しいものを構成し、さまざまな公理系を設定して、さまざまな幾何学を展開するのである。しかしこれは空虚な知的遊戯ではない。現実の空間は多様であるから、さまざまな幾何学のうちの或ものが役に立つ。そのよい例はリーマン幾何学が相対性理論に役立った場合である。いかに自由な公理系を作るにせよ、その源は現実の空間の考察にあるから、幾何学の多様化はかえって現実の空間認識にいつそう役立つことにもなるのである [61, p.262].

§263 このように同じ対象（このばあいは図形）に対して、一つ以上の理論があり得るとすれば、どの理論が一番優れていて、どれがそうではないか、あるいは少なくともある目的に関して、どれがもっとも都合がよいかというような、理論そのものの評価が必要になってきます。こうして図形というような具体的なものを対象にするのではなく、この対象を扱う理論そのものをあつかう「理論」が必要になってきます。「理論」の「理論」です。このような「理論」は「メタ理論」といわれます。言語学でいえば、具体的な言語を対象にした理論ではなく、言語理論を対象にした理論、いわば「理論の理論」がメタ理論ということになります。後のイェルムスレウのところでも触れますように、言理学はこのようなメタ理論をあつかおうとしている点でも、極めて注目されます。

2. イェルムスレウ

§264 イェルムスレウ (Louis Trolle Hjelmstev 1899-1965) はデンマークの言語学者で、1917年コペンハーゲン大学に入学、印欧語比較文法講座に所属して、ペーザセン (ペデルセン — Holger Pedersen 1867-1953) に師事し、印欧語比較文法を専攻しました。

やがて彼は1923-1924年にプラハに留学してズバティー (Josef Zubatý 1855-1931) のもとに学びました。1926年から1927年にかけてパリに学び、メイエ (Antoine Meillet 1866-1936)、ヴァンドリエス (Joseph Vendryes 1875-1960) のもとに学んだといわれています。ですから、もともとは比較言語学、社会言語学などを専門にしようとしていたと思われます。ここで彼はソシュール

の学説にも接したといわれます。

§265 彼はここで彼のはじめての著書となった『一般文法の原理』(*Principes de grammaire générale*) を著しましたが、これはソシュールの学説に刺激されたものと思われ、博士論文となった1932年の『バルト語研究』(*Études baltiques*) には比較言語学者としての知識が基底にあったと思われ。

しかし彼が続いて著した『格の範疇』(*La catégorie des cas*, I 1935, II 1937) は、既に格の意義を「計算」calculusによって導き出そうという、言語学に通じる方法を用いていました。彼は論理学者で、哲学のウィーン学団を代表する一人であったカルナップ (Rudolf Carnap 1891-1970) のいわゆる論理実証主義論理学とソシュールの学説とを統合しようとしたといわれます。

§266 イェルムスレウの言語理論としてもっとも有名なのは1943年に発表された『言語理論の基礎について』(*Omkring sprogteoriens grundlaeggelse*) という書物ですが、これは1953年に『言語理論序説』(*Prolegomena to a theory of language*) というタイトルで英訳されました。

イェルムスレウは言語理論を、すべての学問の中心的なものでなければならないと考えました。言語理論の「主要な目的は定義によって普遍的な演算 general calculus を演繹できるような言語の構造原理を決定することである」、といいます。可能な組合せのこのような普遍的網羅的な演算は、体系的かつ厳密な普遍的学問の基礎となり、その学問の理論においてはあらゆる出来事(要素の可能な組合せ)が予見され、それらの実現の条件が定められることができるということです。

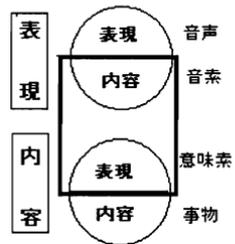
§267 ここで言語理論は一連のあらかじめ定義された構造原理、すなわち公理から演算によって、言い換えれば、演繹によって、全体の構造を導き出すことによって得られる、という考えが主張されます。さらに彼のいう「経験則」empirical principle というのは、理論に矛盾のないこと、網羅的なこと、できるだけ単純なことであって、その理論が適用可能であるか、経験的なデータに関係あるかどうかは理論そのものについては一切問題にしないということです。

彼によれば、それは明示的でない前提 implicit premises を避け、対象の性質を反映させたり、存在論的な意味 ontological sense での「実質」substance という概念にとらわれてはならない、といいます。従って経験的データは理論そのものには無関係で、理論の妥当性 applicability の問題に過ぎないということになります。これは先に挙げた近藤洋逸、好並英司の『論理学概論』で述べられている論理学の考えと瓜二つです。

それはともあれ、ここで述べられている 1) 無矛盾性、2) 網羅性 3) 単純性、および 4) 妥当性は、メタ理論に関わっている概念ですが、これについては、後で述べます。

§268 一方、イエラムスレウはソシュールの学説をその立脚点の一つとして継承していると述べています。しかし今まで述べた理論あるいは言語理論の内容から、これが言語の変化といった、通時的なものに適用できないことは明らかです。この点で彼の言語理論は共時に限られたものであることが分ります。

また言語が記号からなることは、イエラムスレウも認めています。能記は「表現」expression、所記は「内容」content としています。そしてこの間を結ぶのは「記号機能」sign function であるといいます。ここまではソシュールの学説と用語の違いに過ぎませんが、イエラムスレウは「表現」および「内容」のそれぞれに「表現」と「内容」を認め、「表現の表現」expression of expression と「表現の内容」content of expression、および「内容の表現」expression of content と「内容の内容」content of content という、いわば二重構造をとっています。



§269 私見ですが、これはイエラムスレウのこれまでの体系と深く関わっていると考えられます。イエラムスレウは具体的な対象、彼のいう「存在論的な意味での実質」を彼の構想する理論から排除しようと努めてきました。そうすることによって初めて彼の体系は、いわば数学が極めて抽象的であるため、たとえば物理学を始めさまざまな対象に対する学に応用できるように、彼の構想する言語理論がすべての領域の学問の基礎になることができると、彼は考えたのだと思います。

したがって言語の表現における音声、あるいは内容における「意味」のような具体的なものを、それぞれ「表現の表現」、「内容の内容」として体系の外に置いて理論から排除し、抽象的な「表現の内容」と「内容の表現」のみを純粹に体系に属するものとしようとしたのだと考えられます。したがってこれらは、彼のいう「定数」constant であって、現実にはいろいろなものが入りうる「変数」とは異なるものになります。こうすることによって体系を構成する単位であるものの関係は機能 function にすぎないものとなり、単位そのものはさまざまな機能が交錯する点としてこれらの機能を担う funcitive として定義されることになります。

§270 分りにくい話なので、例を挙げると、たとえば「イス」というのは、現実に発音された「イス」という音からできたものには違いありませんが、現実の音とは関係なく、「イス」という音声に対する符丁みたいなものだと考えます。またその内容は現実に存在する色々な椅子から作られたものには違いありませんが、そういう具体的な観念そのものではなく、同じくそのような観念に対する抽象的な符丁のようなものだと考えます。そうするとそういう「符丁」同志が結合したものは、現実の音声や事物とは関係のない、切り離されたものになります。

そうするとそれは現実の「イス」という音声や、具体的な事物とは関係のないものになってしまうでしょう。イェルムスレウのいう「変数」ではなくなるのです。

§271 こうしてできたものを「記号」というとすれば、たとえば「椅子」という記号は「座椅子」という記号と「腰を掛ける」という機能があるかないかという点で異なると定義します。またこれは「ソファ」という記号と「複数の人が座る」という機能があるかないかで異なると定義されます。「肘掛椅子」との対比では、腕がついているかいないかが問題になります。こういうように色々な「椅子」やそれ以外の記号との機能の違いを定義すると、「椅子」という記号は、色々な機能のあつまりを示すことになって、現実の色々な椅子とは直接の関係はなくなることになります。そういう理論が有用であるかどうかは疑問ですが、ともかく数学のように、直接には具体的な対象とは関係のない、抽象的なものになることはたしかです。

第十四章

北欧学派

言語のオートマトンの導出とメタ理論

1. 言語の導出と有限状態言語

§272 教室での講義においてイェルムスレウの基準について述べたとき、理論の導出との関係が分らなかったという声がありました。そこで基準について述べるに先だて、理論と理論の導出という概念について簡単に述べることにしました。

§273 一般に理論は (Σ, V^*, P, L) の組からなると言われます。ここで Σ というのは、一般には初期集合と呼ばれ、公理からなる集合を意味しています。 V は理論に用いられる記号の集合です。これはたとえば文字や理論に用いられる特別な記号などからなります。理論にだけ用いられる記号は普通は大文字などを使って、実際の記号と区別することになっているようです。場合によっては V を末端記号に限り、大文字で書かれるような理論に用いられる記号 — これを非末端記号といいます — の集合を例えば C のように別のものとして表す場合もあります。 V^* のように、アスタリスクが付けられているのは、星積 star といい、これらの記号が 0 個以上繋がった (接続した) ものの全体の集合を表します。

§274 たとえば $V = \{a, b\}$ (ここで { および } で囲まれたものは集合を表します。) から成る集合の星積は $\{a, aa, aaa, \dots b, bb, bbb, \dots ab, ba, aab, \dots\}$ などの集合を表します。したがって星積の集合は無限集合になります。

P は Σ からこれらを導出する規則の集合で、たとえば $\Sigma = \sigma_1, \sigma_2 \dots \sigma_n$ とするとき、 $\sigma_1 \rightarrow aA$ あるいは $\sigma_2 \rightarrow Aa$, $A \rightarrow b$ などという形をしています。こういう規則によって作り出された結果の集合が L です。

§275 たとえば V がアルファベットの集合であるばあい、星積はこのアルファベットから作り出されることの可能な (現実に存在しているかどうかは

問わない) 全ての語の集合ということになります。またもし V が単語だとすると、 L は単語から導出規則によって作られた文の集合ということになるでしょう。言語理論のばあいには、上に挙げた組は、しばしば $L = (\sigma, V^*, P)$ という形でも表されることがあります。ここで L というのは文法 (σ, V^*, P) によって生成された連糸 string の集合で、言語を意味することになります。明らかのように非末端記号は何かの導出の出発点になります。

§276 なんだか面倒そうでやっかいな話ですが、具体的な例を見てみましょう。

今初期集合としては σ という記号だけが属しているものとします。 $\Sigma = \{\sigma\}$ です。また記号の集合には次の記号があるとします。

$V = \{ it, they, a, is, are, desk, desks, book, books, E, U, W, X, Y, Z \}$.

ここで U, W, X, Y, Z は大文字で書かれていて、理論に使われる特別な記号を表しています。これを「非末端記号」といい、小文字で書かれていて実際にこの「言語」を作るのに使われる「末端記号」と区別されています。ここで述べる言語は規則の左辺が「非末端記号」、右辺は「末端記号」+「非末端記号」(あるいは「非末端記号」+「末端記号」)か、「末端記号」一つという形を持つことにします。このような規則を持つ「文法」を「文脈自由文法」context free language といいます。

導出規則 P

§277 さて P として、右のような規則の集合を考えてみましょう。この場合規則 (1), (3), (5), (8), (10) を順番に使うと連糸 it is a desk. (1), (3), (5), (9) (10) を使うと連糸 it is a book. ができます。また規則 (2), (4), (6), (10) を使うと連糸 they are desks. が、規則 (2), (4), (7), (10) を使えば連糸 they are books. が生成されます。従ってこの文法が説明できる、あるいは生成できる言語 L は $L = \{ it is a desk, it is a book, they are desks, they are books \}$ の4個の連糸(文)からできていることになります。実はこれは、チョムスキーが考えた「生成文法」の考え方の出発点になったものなのです。	(1)	σ	\rightarrow	it U
	(2)	σ	\rightarrow	they W
	(3)	U	\rightarrow	is X
	(4)	W	\rightarrow	are Y
	(5)	X	\rightarrow	a Z
	(6)	Y	\rightarrow	desks E
	(7)	Y	\rightarrow	books E
	(8)	Z	\rightarrow	desk E
	(9)	Z	\rightarrow	book E
	(10)	E	\rightarrow	.

もう少し「頭のいい」機械ですと、この外に $\boxed{100}$ という文も理解できるのがいて、そのときはジュースの外に $\textcircled{10}\textcircled{10}\textcircled{10}\textcircled{10}$ という返事を返してくるでしょう。それは恐らく「お釣りだよ」という意味でしょう。こうして自動販売機との会話が成り立つのです。

1	σ	\rightarrow	$C_1\textcircled{10}$
2	C_1	\rightarrow	$C_2\textcircled{10}$
3	C_2	\rightarrow	$C_3\textcircled{10}$
4	C_3	\rightarrow	$C_4\textcircled{10}$
5	C_4	\rightarrow	$C_5\textcircled{10}$
6	C_5	\rightarrow	$\textcircled{10}$
7	C_1	\rightarrow	$\boxed{50}$
8	σ	\rightarrow	$C_5\boxed{50}$

§281 このような機械(オートマトン)は、始めは初期状態にあります。コインを一つ入れるたびにその状態から入れられたコインの種類に応じた「状態」に変わります。そして覚えている文になると、わかったという結果を出します。この「状態」は無限にあっては困りますから、有限個に限られています。有限状態言語という名前はそういう意味なのです。

いま仮に「頭の悪い」方の機械について見ますと、この機械は左のような状態と、文を作るための「導出規則(書き換え規則)」を持っていると考えられます。

ここで C_x というのは機械の状態を指しています。いま何もお金が入っていない初期状態を σ とします。ここに太郎君がやってきて 10 円を入れてやります。すると $\sigma \rightarrow C_1\textcircled{10}$ という規則から $C_1\textcircled{10}$ になり、機械の状態は C_1 に移ります。次にまた 10 円を入れると、 $C_2\textcircled{10}\textcircled{10}$ というようになって、順次 $C_3\textcircled{10}\textcircled{10}\textcircled{10} \rightarrow C_4\textcircled{10}\textcircled{10}\textcircled{10}\textcircled{10} \rightarrow C_5\textcircled{10}\textcircled{10}\textcircled{10}\textcircled{10}\textcircled{10} \rightarrow \textcircled{10}\textcircled{10}\textcircled{10}\textcircled{10}\textcircled{10}\textcircled{10}$ のようになります。連糸が末端記号だけから成ったとき、「文」が完成します。このとき機械の状態はまた σ に戻ります。

あるいはまた、 $\sigma \rightarrow C_5\boxed{50} \rightarrow \textcircled{10}\boxed{50}$ 、あるいは $\sigma \rightarrow C_1\textcircled{10} \rightarrow \boxed{50}\textcircled{10}$ という文もできます。何れもこのオートマトンが理解できる文です。

このばあい、「書き換え規則」は非末端記号といわれるものが左辺にあり、右辺は非末端記号と末端記号の組合せか、それとも末端記号だけからなっていますから、既に述べましたように、文脈自由言語です。このような言語を有限状態(オートマトン)言語 finite state (automaton) language ともいい、

こういう言語を持っている機械を有限状態オートマトンといいます。

2. メタ理論とイェルムスレウの基準

§282 以上に述べましたように、イェルムスレウの理論はメタ理論を含んでいます。メタ理論はある対象に対する理論が複数あるばあいに、それぞれの理論を対象にして、その性質を調べるものです。「メタ」というのはギリシア語で「後」を意味していますが、メタ理論は、前にも言いましたように、理論の理論という意味でそう名付けられています。

イェルムスレウは、理論を評価する基準として、無矛盾性 noncontradictoriness は当然のこととして、これ以外に既に述べたような三つの性質、すなわち 1) 網羅性 (包括性) exhaustiveness (comprehensiveness), 2) 妥当性 adequacy, 3) 単純性 simplicity をあげています。これは彼によって「経験的原理」empirical principles と呼ばれています。これを「経験的」というのは、おそらくこれが幾何学の公理にあたり、他の原則からは演繹ないし証明できないものであることを意味していると思われる。

§283 網羅性とは、あるいくつかの公理から演繹された理論の全体が、対象となる分野の現象、たとえば幾何学ならばすべての図形、物理学ならばすべての物理現象などを、余すところなく説明できるかどうかということを表しています。

妥当性というのは、対象とする分野の現象だけ、それだけを説明し、その分野に属さない余計なものまでも説明しようとはしていないことを表します。例えば今挙げたように 60 円の飲み物しか売っていない自動販売機に $\textcircled{60}$ $\textcircled{50}$ とか、 $\boxed{50}$ $\boxed{50}$ とか、あるいは $\boxed{50}$ $\textcircled{50}$ のような「文章」を作る導出規則を機械にあたえても、意味がないでしょう。そのような機械は 60 円のもの全部売ることができるという意味で網羅性の基準を満たしてはいますが、作るのに余計なお金がかかるだけで実効性がないという意味では、妥当なものとはいえません。

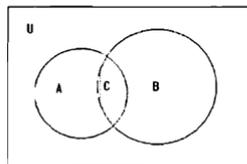
また同じ説明力を持った複数の理論があるならば、導出規則の数が少なく

て済む簡単な方がいいに決っています。これが単純性です。

3. 集合の考え方

§284 イェルムスレウの基準の意味について説明しようとするれば、まず集合というものについて簡単に触れておかなければなりません¹。私たちは「ほ乳類」というとき、ほ乳類の集まり全体を考えます。また「海に住む動物」というときにも、その集まり全体を考えます。

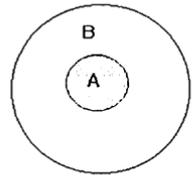
右の図でたとえば A を「ほ乳類」の集まりだとします。そして B を「海に住む動物」の全体だと考えます。そうすれば A と B との交わったところは A にも属し、また B にも属していますから、「ほ乳類」でもありまた「海に住む動物」でもあるものの集まりだということになります。鯨、海豚、マナティーなどがこれに属します。このように、両方の集合に同時に属しているもの、ここでは C は、 A と B の交わり meet といい、 $A \cap B$ のようにあらわします。 A の残りの集合は「ほ乳類であってかつ海に住まない動物の集まりを著し、 B の残りの集合は「ほ乳類でなくて、海に住む動物の集まり」を表します。ここの属するものは、たとえば魚類、蟹などの節足動物、海蛇のたぐいなど、色々なものが考えられます。これに対して同時に両方に属しているものも含めて、 A と B の全体を考えると、これを $A \cup B$ と書き、集合 A と集合 B の合併 join といいます。それらを含めてあらゆるものの集合を考えてこれを普遍集合 U とします。



§285 ついでに言えば、もしある集合 A が、別の集合 B の中に入ってしまうとします。例えば A をこの大学の一年生の集合、 B をこの大学の学生全体の集合と考える、というようなばあいです。このとき集合 A は集合 B に含まれるといい、 $A \subset B$ のように表します。逆のばあいには記号が逆になって $A \supset B$ のようになります。いま、 A を「馬」の集合、 B を「動物」の集合としますと、 $A \subset B$ が成り立ちます。そこで私たちは「馬は動物である」ということができます。

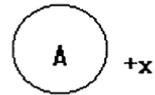
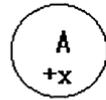
¹ここで言う「集合論」というのは、高等学校などで扱う、いわゆる「素朴な集合論」です。専門の数学者の扱う「公理集合論」(ZF) というものではありません。念のため。

「馬」の集合に入るものは全て「動物」の集合にも属しているからです。ところが「動物は馬である」ということはできません。なぜなら B (「動物」) に属しているものが、みな A (「馬」) に属しているわけではないからです。



§286 もう一つついでにいえば、たとえばある人について「A 君は天才だ」というばあいがあります。このばあい「A 君」はある具体的な一人の人を指していて、集合ではありません。一方「天才」というのは、色々な人が「天才」でありうるし、また色々な「天才」を持った人が考えられますから、集合であるに違いありません。

したがって「A 君は天才だ」というのは「A 君は天才の集合の中の一人だ」という意味だと考えられます。このようにある集合に属している個別のものを、その集合の元あるいは要素 element といいます。逆に言えば「A 君」は、「天才」という性質を持つ外の人々と一緒になって、「天才」という集合を作っているともいえます。今集合を A 、その要素の一つを x とするとき、「 x は A に属している (含まれる)」といい、 $x \in A$ と表します (この節の上の図)。もし x が A に属していないならば、 $x \notin A$ と書きます (この節の下の図) が、このとき、「A 君は天才だ」という文章は、文章の作り方としては間違っていないけれども、意味的には誤っています (真理値が偽 false)。



§287 これらの集合に属するものは、ほとんど無限であって、いくつということとは難しいように思われます。しかしたとえば普遍集合を私たちの大学の学生と考え、 A を 1 年生の集まり、 B を 19 歳の学生の集まりとすると、どれも数を数えることができます。このようにある集合 A に属する要素の数は $|A|$ 、集合 B の要素は $|B|$ というように表されます。このようにある集合に属する要素の数を、その集合の濃度 density といいます。

例えば幼稚園の「さくら組」を 46 人の子ども達の集まりだとし、その集合

を S としますと、 $|S| = 46$ ということになります。

4. メタ理論の基準の評価

§288 ところで今、言語理論をちょうど幾何学のようなものと考え、いくつかの前提(公理に当る)からいくつかの規則(たとえば代数でいえば足し算、引算、かけ算、わり算のようなもの)を使って、全ての文章を生み出す理論だと考えます。

$$P = \frac{|M \cap N|}{|M|}$$

$$A = \frac{|M \cap N|}{|N|}$$

$$E = \frac{|N| + 1}{|N| + b}$$

$$S = \frac{|N| + 1}{|N| + c}$$

b は初期概念(公理)の数、 c はモデルが集合 N を生み出すのに必要な導出規則(書き換え規則)の数を表すとされています [34, pp.265-279].

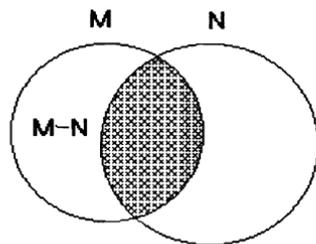
このようにある理論によって導出された文章の集合について、ロシアの言語学者アプレシアン Юрий Дереникович Апресян (1930-) はイェルムスレウの網羅性 (P) と妥当性 (A) および単純性 (S) という基準に「経済性」(E) という基準を加えて、左の表のように示しています。ここで M を対象の集合、すなわち現実に存在している対象(実際に使われている文章)の集合、 N はモデルによって生み出される対象の集合(言語のばあいならば、ある文法によって説明できる文の集合)とします。

§289 これらの式に共通する M と N の関係は右の図のとおりです。 $M \cap N$ は集合 M と N の交わっている影のついた部分に当たります。

この部分は集合 M から見たばあい、 M の一部分です ($M \cap N \subset M$) ですから、

$P = \frac{|M \cap N|}{|M|}$ は集合 M に属している要素の数に対する $M \cap N$ に属する要素の割合を求めることとなります。つまり、 P は実際に存在している言語の文章のどれだけを説明できるかを表すことになるのです。したがって $P = 1$ に近づくほど、この

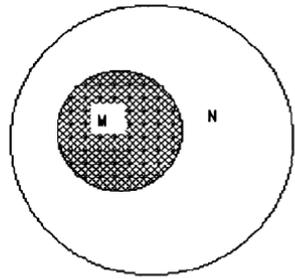
理論は現実をよく説明できることとなります。 $P = 1$ の時は、理論が現実にあるものを全て説明できることを示しています。これが理論の「網羅性」



を示すものであることは明らかです。

§290 しかし $P = 1$ だからといって、この理論が「妥当」なものであるということには、必ずしもなりません。たとえば次の図のように集合 M が集合 N の部分集合になっているとき、すなわち $M \subset N$ であるときには、 $M \cap N = M$ ですから、 P は $P = \frac{|M|}{|M|}$ となって、たしかに $P = 1$ になります。

しかしこのばあいには N の部分ではあるが M の部分ではないもの (これを $N - M$ とあらわします), すなわち N の内側で M の外側にある部分が多ければ、この理論は現実に存在しない文章までも、たくさん説明する (生み出す) ことになります。二番目の $A = \frac{|M \cap N|}{|N|}$ はこの「妥当性」を評価するものです。このばあい、一番理想的な理論は $N - M = 0$ のとき、すなわち余計なものを生み出さないときです。このときは $M = N$ となって、二つの集合は完全に重なり合います。このことから A はできるだけ 1 に近い方が、理論として優れていることになります。したがって A は理論の「妥当性」adequacy を表すものだということになります。



§291 例えばもしある自動販売機がかりに「オレンジジュース」、「グレープジュース」、「バナナジュース」しか売れない機械だとするとき、この機械がこれらの語の外に「お茶」、「コーラ」、「紅茶」という語も理解できるような言語を持っていても、意味がありません。機械をいたずらに複雑にし、製造費が高く付くだけです。実際に必要なものの集合の元 $|M|$ は 3 なのに、この機械の言語が生み出す単語の集合の元 $|N|$ の数は 6 です。すなわち $|M| = 3$, $|N| = 6$ で $|M \cap N| = 3$ ですから、 $P = \frac{|M \cap N|}{|M|} = 3/3 = 1$, ではありませんが、 $A = \frac{|M \cap N|}{|N|} = 3/6 = 0.5$ となります。理想的なものは 1 に等しい訳ですから、この機械は妥当性に欠けるということになります。

§292 アプレシアンによれば、理論の「経済性」は $E = \frac{|N|+1}{|N|+6}$ によって

計られると言います。ここで b というのは、先に述べましたように初期概念(公理)の数です。公理というのは外のどのようなものからも証明できないもので、どのような理論にも少なくとも一つは必ず存在します。たとえば、既に述べたように、ユークリッド幾何学の公理は5個あり、それは1) 任意の点と他の任意の点とを結ぶ一本にしてただ一本の直線を引くことができる。2) 任意の線分は、これを左右にいかほどでも延長することができる。3) 任意の点を中心として、任意の半径の円を描くことができる。4) 直角はすべて相等的い。5) 2直線が1直線と交わっているとき、もしその同じ側にある内角の和が直角よりも小さかったならば、2直線は、限りなく延長すれば必ずその側で交わるというものでした(121頁参照)。

したがってこの式は結局証明できない公理の数が最低一つは必要として、できるだけ少ない方が、経済的な理論だと主張することになります。

§293 最後の式 $S = \frac{N+1}{|N|+c}$ のばあい、 c はこの理論が公理から出発しているいろいろな文章を説明するために必要な規則、あるいは公理から出発して色々な定理を導くための規則の数を表します。「導出規則」です。この規則の数が少なれば少ないほど理論は単純なものになります。しかし少なくともこのような規則は一つなければなりません。全くなければ証明あるいは導出が行えないからです。したがって c は最低一つなければなりません、 c の数が少なければ、それだけ S の値が1に近くなり、理論が単純なものになります。

アプレシヤンの式は、理論の包括性、妥当性、経済性、単純性などを数値的に評価することを可能にしていますから、対象を説明する複数の理論があるとき、どの理論が選りすぐれたものであるかをこれを用いて評価することができます。ある同じ対象を説明する複数の理論の優劣を計るものですから、これはメタ理論に属するものといえます。

第十五章

生成文法と変形文法の挫折

チョムスキー

1. チョムスキーと『文法の構造』

§294 チョムスキー Noam Chomsky (1928-) はペンシルヴァニア大学のハリスのもとで学びましたが、彼が一躍有名になったのは、1957年に出版された *Syntactic Structures* によってでした。これは日本では『文法の構造』という名の下に、勇康男氏によって翻訳されました (cf.[12] & [66])。この訳者による解説が訳書の末尾にあります。新しい理論に出会った訳者の「目の前が開けたよう」な喜びと気負いとが、惻々と伝わってきます。

§295 アメリカ言語学の主流をなしていた記述言語学という、データ中心の記述をこととしていた言語研究に対して、彼は「……言語研究はあたえられた data 「資料」の中のみ限られるべきものでなく、新しい文を無限に発話できる speakers 「話し手」の能力(また新しい文を聞いて理解する hearers 「聞き手」の能力)の中にみられる言語の創造面 (“creativity”) を解明することも、言語学の大切な課題である。このような課題にとりくむためには、“manipulation and arrangement of data”(データをいじくって並べること)に研究を局限する考え方を棄てて、一般言語理論を検討し、develop (展開)することが必要になってくる」[66, pp.107-108] と述べています。彼はさらにこのくだりを「かくして、言語の内面にひそむ regularities 「法則性」を深く洞察し、それに基づいて個々の言語の外形を正しく深く理解するためには、まず一般理論を開発研究することの必要なことが理解されよう」(ibid.) と締めくくっています。明らかなように、ここではイェルムスレウの帰納でなく演繹が理論にとって重要であるとする考え方が投影していると思われます。

(1) チョムスキー言語

§296 さて、チョムスキーは初期の『文法の構造』[12] という著書の中で、まず有限状態言語について述べ、自然言語が有限状態言語ではないと主張し

ています。有限状態言語については既に前章において簡単に述べた通りです (128 頁参照)。

その理由として挙げられているのは、英語のばあい、 S_i を単文として、たとえば

(i) If S_1 , then S_2 .

(ii) Either S_3 , or S_4 .

(iii) The man who said that S_5 , is arriving today.

のような文章構造が普通に見られることをあげ、(i) のばあいには if...or とは言えないし、また (ii) のばあいには either...then ということもできない。これはコンマをはさんだ両側の語の間に従属関係があるからだ、とっています。またこの関係は互いに入れ子にできるとして、if, either S_1 , or S_2 , then S_3 . のような文を挙げています [66, p.10].

§297 チョムスキーはこれを一種の鏡像構造を持っている文だといいます。鏡像というのはある要素の繋がり (これを連糸 string といいます) が基本的なものの逆の繋がりになっているもののことです。たとえば roma の鏡像は amor になります。そしてここでいう鏡像構造というのは、後半の部分が前半の部分の鏡像となっているもの、たとえば abba, aabbbbaa というようなものです。このような形の連糸を生み出そうとするといくつかの書き換え規則は $S \rightarrow aSa$ のような形を持っていなければなりません。たとえば $S \rightarrow aSa$, $S \rightarrow bSb$, $S \rightarrow c$ という書き換え規則を持っている言語です。この場合これらの規則によって導出される連糸は $S \rightarrow aSa \rightarrow aaSaa \rightarrow aabSbaa \rightarrow aabcbaa$ のような形をとるでしょう。

§298 しかしさきにチョムスキーが鏡像構造を持っているとして挙げた例文は、aabSbaa のように、完全な意味での鏡像構造を持っているわけでもありません。彼が言いたいのは、より正確に言えば、たとえば彼のいう「鏡像」的な連糸 aSa' は S の前の a と S の後の a' とが義務的なつながりを持っている、ということであろうと思われます。即ち、例えば $S \rightarrow aSa'$ のような導出規則がないと $S \rightarrow \text{if}S\text{then}$ とか $S \rightarrow \text{either}S\text{or}$, あるいは $S \rightarrow \dots \text{man}S\text{is}$

というような, *either ... or, if ... then, man ... is* のように, 現実には最初の部分によって義務的に書き換えがなされなければならない部分を含む連鎖が生み出せないというのです。

しかしこれは仮に「鏡像的」ということができたとしても, *S* の前後に来る要素は異なっていますから, 厳密な意味では明らかに「鏡像」ではありません。この点, チョムスキーの言い方は厳密性を欠いているといわなければなりません。しかも意味的なものを完全に排除して形式的な条件 (*either+S+or* あるいは *if+S+then*) という導出規則だけでは, 例えば *either will do* のように, すべての場合を盡すことができるとは考えられないのです。

§299 このような「鏡像」を考えないとすれば, そしてまた導出規則の右辺が義務的に末端連鎖と非末端連鎖からなっているとすれば, これは既に述べた文脈自由文法 *contextfree grammar* になります。

文脈自由文法では自然言語の導出ができない理由はいくつかあると思われます。その一つはチョムスキーが挙げた「鏡像性」の問題ですが, その他にも問題が考えられます。例えば 128 頁の例を見れば分りますように, *itU* によって *it* という末端連鎖が生成されると $U \rightarrow isX$ によって *isX* が導出されるのに対して *they* の場合は *theyW* から *areY* を導出する規則が別に必要になります。

しかもこの *it* あるいは *they* の位置に立つ可能性のあるものは理論的には有限であるにせよ, 事実上無数にあります。そのすべてについてこれに類似した導出規則を作るのは事実上不可能です。比較的語順の安定している英語でもそうですから, 語順の自由度の高い言語ではこのような導出の仕方を構築することは殆ど絶望的でしょう。

§300 この問題をある程度容易に解決する方策としては, 導出規則を, 集合の元を表す末端連鎖と非末端連鎖の組を右辺にとる文脈自由文法の形だけでなく, 集合を表す非末端連鎖の複数の組み合わせも許すことが考えられます。具体的な英語の場合ならば, もし主語に単数名詞 (及び代名詞) の集合と複数名詞 (及び代名詞) の集合の二つを対応させ, それぞれに従って二番目の導出に単数述語の集合と複数述語の集合 (より正確には更に自動詞の集合と

他動詞の集合及び完全動詞と不完全動詞の集合の区別が必要でしょう)を対応させる.....というようにすれば、導出規則の数は激減すると期待されます。

またこの方法はそれぞれの結節点 node に非末端記号だけの導出を許しますから、文の内部構造を明示的に表すことが可能になります。チョムスキーはこのような導出をもつ文法を句構造文法と呼びました。

§301 グロス・ランタンは、チョムスキーの言語を定義して、

- (1) 有限終端語彙, V_T
- (2) 有限補助語彙, V_A
- (3) 公理 $S \in V_A$
- (4) $A \rightarrow \varphi$ なる形の「文脈自由型」の有限個の規則, ここで $A \in V_A$, $\varphi \in (V_A \cup V_T)^*$ とする,

としています [57, pp.82-83].

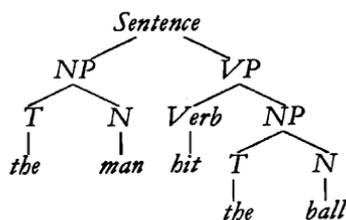
これはこれまで述べてきたような問題からのひとつの帰結であり、チョムスキーが「鏡像性」に言及したときの問題意識でもあったと思われる。

§302 ここで (4) において導出規則が $\varphi \in (V_A \cup V_T)^*$ という形を持っていることに注目する必要があります。これは先に述べたように、導出される連糸が非末端記号のみ、末端記号のみの連なり、あるいは非末端記号と末端記号の組合せのいずれかによって定義されていることを意味しています。言い換えれば、導出規則は例えば $A \rightarrow B$ という形でも、 $p^m A \rightarrow q^m$ という形でも、あるいは $A \rightarrow mnopAqrst$ という形でも許容されることになります。

またこの導出の右辺の記号も、一つあるいは二つに限られている訳ではありません。 $\varphi \in (V_A \cup V_T)^*$ のアスタリスクが示していますように、右辺は $V_A \cup V_T$ に属する要素の星積であればよいからです。従って右辺は極端に言えばいくつの記号の連糸でもよいことになります。

§303 書き換え規則の右辺の記号が非末端記号 V_A に属しているならば、この記号に一つの集合を対応させることができます。チョムスキーが挙げているのはその最もプリミティブな例です [12, p.15].

ここで NP は名詞相当句で、この場合には主部を構成します。また VP は動詞相当句で述部になります。NP は更に T と N とに書き換えられますが、T は冠詞 (の集合)、N は名詞 (の集合) になります。



§304 述語の方は先ず動詞 (の集合) と補語 (の集合) — 英語ではこれを目的語という — に書き換えられ、補語は更に冠詞 (の集合) T と名詞 (の集合) N に書き換えられます。これらの集合は最終的にそれぞれの元、即ち具体的な語に書き換えられ、現実的な文になります。既に述べましたように、この導出の仕方は、最終的に具体的な語に書き換えられるために、規則が簡単になるということの外に、英語の文章の基本的な構造を反映していると言えるからです。少なくともチョムスキーはそう考えているようです。

しかしながら、もしこのような理解が正しいとするならば、「動詞」とか「名詞」とかの品詞の区別、あるいは「単数」と「複数」の区別、「人称」の区別は形式的にだけ定義することはできません。それは個々の場合に選択可能な集合を定める集合の内包ですから、意味と無関係ではあり得ません。もちろん集合を定義する方法は、内包によらずに、この集合に属する元を列挙するという方法もあります。しかしこの場合、元の数は一理論的には有限であっても、事実上は殆ど無限にありますから、この方法は実際的ではありません。もし列挙という手段によらないとすれば、形式性を貫こうとしてはじめに排除された「意味的」なものが、こっそりと裏口から忍び込むことになりましょう。

§305 しかもこうしてできあがったものでも、そのままでは正しい文になるとは限りません。なぜなら第一に上例の場合、正しい英語の文章にするには主語が 3 人称単数現在ですから動詞の形は hit ではなく、hits としなければならぬからです。

ここからチョムスキーは $NP_{\text{sing}} + \text{Verb} \rightarrow NP_{\text{sing}} + \text{hits}$ という書き換え規則を設ければならぬ (*ibid.*, p.16) としていますが、これを一般化するのは正しくはない、あるいは少なくとも正確ではないように思われます。その理

由は hits がある集合の元であるのに対して、 NP_{sing} における sing というのは NP に対応する集合を定める性質 (内包) の一つだという点にあります。むしろ $S \rightarrow NP_{\text{sing}} + VP_{\text{sing}}$, $VP_{\text{sing}} \rightarrow \text{hits}$ のように、必要ならば集合の内包に属するものもその外延に属する末端連線の導出の条件にする必要があるのではないのでしょうか。いずれにしても V_A の元に集合を対応させようとすれば、 V_A の元に集合の内包の中で導出に関係する要素を指定する必要があります。言い換えれば、必要とされる集合の記述が必要になります。チョムスキーが言っていることも不正確ではありますが、結局はそういうことなのでしょう。

§306 第二に、再びチョムスキーが挙げている 141 頁の例を見てみましょう。この場合、図の結節点にある S , NP , VP , $Verb$ などの記号は、明らかに文 (S) の下位にある名詞句の集合 (NP)、動詞句の集合 (VP) あるいは NP の下位にある冠詞の集合 (T) や名詞の集合 (N) などです。そして集合である限り、列挙による定義でないならば、内包による定義がなければなりません。

しかしここで問題にするのは、それとは一応別のことです。今挙げた図による例示を見れば、非末端記号から末端連線が導出されるのに、それぞれ $T \rightarrow \text{the}$, $N \rightarrow \text{man}$, $Verb \rightarrow \text{hit}$, $N \rightarrow \text{ball}$ のような導出が存在し、結果として $\text{the man hit the ball}$ のような末端連線の列が生成されるように見えます。少なくともこの図を見る人は、無意識のうちにまず the をみてこれが T から導出され、 man をみてこれが N から導出されたものだと考えて、この導出が自然な論理的帰結だと考える可能性があります。

§307 しかしこれは単なる錯覚に過ぎません。矢印は例えば man から N に向いているのではなく、逆に N から man に向いているのです。前者の場合には man と N とは一意的に対応しますが、逆の場合には一意的に対応することはありません。このように意味的な整合性を獲得しようとして、非末端記号に対応する末端記号の集合の中からそのうちの一つを選択するには、前節で述べたようなことだけでは明らかに不十分です。しかし非末端記号に対置される集合の中から任意の (即ちでたらめに) ある元を選び出すことは可能

ですから、少なくともチョムスキーが挙げている ([12]4 頁参照)

(1) Colorless green ideas sleep furiously.

(2) Furiously sleep ideas green colorless.

のうち (1) の文だけがたとえ無意味ではあっても十分可能だということではできません。これが正しい英語の非末端連糸の列をもっており、これを構成する各々の非末端記号から導出される末端記号が必ずしも (乃至殆どの場合) 正しいものではないという点で、無意味ではあるが、少なくとも形式的には「英語の文」だと認めることはできるという結論にはなるでしょう。

これに対して (2) の例は正しい非末端記号の列に対応していないという点で、たとえそこからどのような末端連糸が導出されようとも、「正しい英語の文」とは認められないことになります。

§308 明らかなように、このように統語的な形式に関わる導出だけでは、形式的な「正しさ」は得ることはできるにしても、何らかの意味を持つ、有意的な文とそうでないものを区別することは、難しいと思われます。その原因は今述べたように、非末端記号に対応する末端連糸の集合の中から、特定の末端連糸を選び出す手続きが形式的手段だけでは容易に得られないことに帰着するように思われます。次に述べる変形文法も、その出発点となるべき生成文法によって有意的な「文」が得られないとすれば、仮に変形文法そのものの手続きに瑕疵がないとしても、何らかの意味を持つことができないのは明らかです。この意味でチョムスキーの示している例は *misleading* なものだということができましよう。

§309 このようにチョムスキーの体系の最も基本的な理論的欠陥と考えられる非末端記号の表す集合の中からこれに属する正しい元としての末端記号を指定する方法があるかという問題は、この理論体系の枠内では解決不可能であるように思われます。

少なくともそれを可能にするのは後で述べるように、プラーグ学派のいう「言主の意図」(147 頁参照) という概念を必要にすると思えます。たとえそうであったとしても、これをどう理論化するかについては今のところよく分り

ません。先に挙げた自動販売機を例にとると、これは文脈自由文法をもって、極端に単純化したもので値段を一定にしてあります。買いたい人はコインを単語にして必要な金額に達するように文を作っていきます。そして最後に「コカコーラ」、「オレンジジュース」、「お茶」などの表示のあるの押しボタンを押します。この場合色々な押しボタンは「押しボタン」という集合の元だということができます。コインの入れ方、押しボタンの選択を間違わずに押すことによって欲しいものが出てくる訳ですが、なぜボタンを押し間違わないかといえは、買う人が「コーラ」が欲しいとか「オレンジジュースが飲みたい」と思っているからに違いありません。このような「何が欲しいか」ということこそが言主の意図に相当するものだと思います。だからお金の入れ方もボタンの押し方も間違わないのだと思います。

§310 もう一つ考えられるのは話し手による周囲の状況の認識です。以前にアメリカ記述言語学の項でブルームフィールドの図式について説明しました(103頁参照)。これをもう一度繰り返すと次のようなものです。

ブルームフィールドのばあい、厳密には意味を定義することができない以上、意味を除外する必要があると考えました。これには当時興ってきた心理学の行動主義 behaviorism というのが大きい影響を与えました。これは例えばジャックとジルが歩いているとき、ジルがジャックに何か話しかけたとします。するとジャックは側にあるリンゴの木に登って実をもぎ、それをジルに与えたとします。それが例えばジルが「お腹が空いた」と言った意味だということになるということです。ブルームフィールドの考えは、彼自身の挙げている例を引用すれば、次のように主張することになります。

$$S \rightarrow r \rightarrow s \rightarrow R$$

§311 ここで S は現実の「刺激」Stimulus, R は現実の「反応」Reaction を意味しています。もし例えばジャックが「お腹が空いた」という刺激を感じ、自分で木に登って「リンゴをとった」というばあいならば現実的な「刺激」と現実の「反応」は直結しています。しかし上に挙げたような状況のばあい、ジルは自分の中に生じた現実的な「刺激」S に対して擬似的な「反応」r を示します。この擬似的な「反応」は空気その他を伝わってジャックに伝達されます。するとジャックはこの擬似的な「反応」r を擬似的な「刺激」s と

して受け取り、「リングをとって来て、それをジルに与える」という現実的な「反応」を行うというのです。ブルームフィールドによればこのような擬似的な「刺激」と「反応」 $r \rightarrow s$ が言語行為だということになります。

このような単純化した理解で、彼は「意味」という、厳密にはつかめないものを除外しようとしたと考えられます。

§312 このような $r \rightarrow s$ だけを取り出して形式的な面だけに注目し意味を除外しようとした点で、チョムスキーもブルームフィールドと基本的には一致していると思われま

す。これに対してマテジウス等の問題意識はむしろ $S \rightarrow r$ と $s \rightarrow R$ の局面、とくに $S \rightarrow r$ の場合だったろうと思われま

す。このとき空腹を感じたジルは「お腹が空いた」といったのでしょうか、それとも「あのリングを食べたい」といったのでしょうか、それとも「あのリングをとってきて頂戴」と言ったのでしょうか。どの言い方にも可能性があります。もちろん手近にあるのが木になっているリングであるという認識が必要なことはいうまでもありませんが、もしジャックがジルのいうことならなんでも聞いてあげようという気分を持っていると判断されれば、第一の言い方でも充分でしょう。もしジルにたいして比較的冷淡であれば最後の言い方が適当かも知れません。

§313 ここでいいたいのは、文が生成される

とき、問題は非末端記号に対して正しい末端記号を選択する方策というだけではなく、話し手の意図に基づく文の構造全体の選択も関わっているということなのです。もちろんこれをどう理論化するかについては、今のところ分りません。しかし少なくとも文の生成には多くの因子があるということを頭に入れておくことは、必要だと思われるのです。

(2) 変形文法の考え

§314 チョムスキーは生成文法による文の生成をいわゆる核文 kernel sentences に限りました。核文というのは大まかに言えば直説法能動現在平叙文でかつ一つの述部をもつ文だと言うことができるでしょう。それ以外の文はこの核文に変形を施すことによって得られると考えるのです。もしすべての

文を導出によって得ようとする、ほとんど実現不可能と思われる種々の制限を加えた導出規則を必要とするに違いありません。またそのような規則が話し手の頭の中にあると考えるのも自然なことではないように思われます。

一方、私たちはある核文に当るものを提示されて、これを受動形にきなさいとか、未来形にきなさいとか言われることは、外国語の授業の場合には特に日常的に行われています。従ってこのような日常的な言語感覚においては核文をもとにした「変形」という作業は、無理のないことであるようにも思われます。チョムスキーが核文を生成する「生成部門」に対して「変形部門」というものを考えたのは、そういう意味では自然なことに思われます。

§315 これは通常「生成文法」generative grammar に対して「変形文法」transformation grammar と呼ばれています。したがって生成文法で生成するのは彼が「核文」kernel sentence と名付けた、直説法能動現在平叙文の集合だということができるでしょう。それ以外の法・相・時称などは核文から変形規則によって導出することになるということです。これを分けたもとの動機は、文法規則を効果的に用いられるようにすることにもあったと思われませんが、従来の伝統的なアメリカ記述文法では、意味を除外しようとしたために、例えば能動文とこれに対応する受動文の意味的な同一性を説明できないというところにもあったと思われます。

§316 ともかくチョムスキーの考え方には人間は生れてしばらくの間に、周囲の人々の話を聞き、それに反応する中で、急速に言語の能力を獲得すること、しかも限られた期間に得た知識をもとに、自分で新しい状況に対処する言葉を作り出すという観察から、人間には生得の、あるいは先験的な言語能力があると仮定しなければならない、ということがあったと思われます。彼はそのために実際の言語の形である表層的な構造に対して、それを生み出すことを可能にする深層構造があると考えました。

彼はこのように考える根拠として、フンボルトの「一つの言語」eine Sprache という考えに言及しています。そしてこの「変形」という概念について彼の考えに大きな影響を与えたのは彼の師であったハリスであったと考えられます。

§317　しかしあえて私の考えをここで述べるとすれば、確かに「先験的な言語能力」が人間に備わっているということは人とそれ以外の動物とを区別するためになくしてはならない仮定だと思われ、フンボルトが Sprachvermögen と言っているのもその意味だと思われ。しかしこれはいわば力であって、「もの」ではないと思われ。これを「深層構造」という形で「もの」化するのには正しいことのように思われません。プラーグ学派のテーゼにはその冒頭において「人間の活動の所産であるから、言語はこの活動と目的性という性格を共有している。言語活動を表現あるいは伝達として分析する場合、最も容易で最も自然な説明は、言主の意図である」と宣言しています。これはこの学派の指導者だったヴィレーム・マテジウスの考えでありましたが、彼もまたフンボルトの考えに強い影響を受けていました。もし目的性を考えなければ、条件付けられた集合の連鎖から、それぞれ適当な元を選択することはできないことになるでしょう。

§318　チョムスキーの学説は極めて独創的な考えではありますが、現実には彼が扱ったのは専ら極めて特殊な言語である英語に関するものでありました。しかも変形規則などの設定自身に必ずしも客観性がなく、各人が各様に深層構造なるものを指定するというようになってしまいました。またチョムスキー自身の理論的枠組みも、極めて恣意的に変更されていきました。そのため彼の理論的枠組みそのものに対してもさまざまな批判や疑念が表明され、例えば認知言語学のような、変形文法とは異なった立場からの理論も生れてくることになりました。

§319　しかし近年、後に述べる内容的類型学の進展によって、主格と対格という区別がなく同一の格が場合によって主語にも目的語になる言語が多く存在すること、またこの種の言語には他動詞と自動詞の区別がなく、したがって受動形も存在しないなど、主として欧米の言語の常識からは考えられなかったことが次々に分ってきました。英語などの印欧諸語の構造は言語史における後期の発達にかかるものであって、一般性を持たないことが次々に明らかになって来つつあります。対格言語に属し、しかもその中でも極めて特殊な

構造を持った英語の構造を、暗黙のうちに「深層構造」に投影しているチョムスキーの理論には色々な問題があると思えてきます。それにもかかわらず、このようにさまざまな批判が生れ、さまざまな新しい理論を誘発したという点では、チョムスキーの功績は大きいといわなければならないでしょう。私自身はチョムスキーの提示する前提を承認すれば、生成文法には重大な欠陥があると考えない訳にはいきませんが、少なくとも変形文法の考え方そのものは、仮に意味の同一性の基準を容認すれば、極めて限定的ではあるが一定の普遍性を持っていると考えています。

§320 序でになぜ「極めて限定的ではあるが一定の」という修飾語をつけたかと言いますと、既にフンボルトの項でも述べましたように、言語というものは主観と客観の「対話」(ディアレクティケー)によって成立するものであり、客観的実在と私たちが信じているものも、実は言語の認識の機能の結果に過ぎないと考えられるからです。言語が客観をいわば創り出すのです。しかしチョムスキーの理論に一貫して流れているものは、客観が言語以前に既に特定の構造を以て分節しているという前提であるように思われるのです。書き換え規則などの適用によって、彼の理論が動的な性格のもののように受け取る人が間々見られますが、それは誤解であって、彼の理論は実は極めてスタティックなものであると考えるべきなのではないでしょうか。

§321 この箇所を書いているときに、インターネットで面白い論文を見つけました。「自然言語処理研究の考え方」(http://unicorn.ike.tottori-u.ac.jp/ikehara/paper/html/1_03.htm) というものです。著者は池原悟という方ですが、この方は奇しくもこの講義ノートを作った鳥取環境大学と同じ市にある鳥取大学の工学部計算機工学講座の教授だということです。これは比較的長文のものですが、私がフンボルトの項で述べた言語の認識の機能と直接関連する部分のみを引用しておきたいと思います。なお明白なミスタイプと思われる箇所は私が訂正してあります。

人間の言語能力は対象に対する認識と言語規範の関係に深く依存している。理解する能力は表現と話者の認識を言語規範を介して関係づけることであり、聞き手が自己の精神の中の表現に、対応する認識の像を作り上げることである。思考

能力は、その認識から他の認識を生み出すことであり、表現能力は得られた認識を言語規範を媒介させて表現と対応づけ表出することである。従って、これらの言語能力を実現するには言語規範に関する知識とその運用の能力が必要であると共に、ある認識から他の認識を生み出す方法論が必要となる。

§322 これは外界の認識の問題ですすでに説明したことと深く関連しています。この観点から池原はチョムスキーについて次のように述べています。

言語の形式は対象のあり方と、それに対する話者の認識のあり方が反映したものであるため、形式と内容は相互に支え合う構造をもっている。従って、表現と離れた別のところに意味構造を仮定する必要はない。表現に結びつけられた対象と話者の認識の関係を追求することにより、同形式異内容の現象は説明される。チョムスキーの論理はその後、種々の困難に直面し、チョムスキーはその毎に自説をくるくると変えた...が、仮想的深層構造の矛盾は解決されないままである。チョムスキーは当初、標準理論において深層構造を統語構造のみで説明しようとし、深層構造から表層構造への変換の過程において意味を変えないことを主張した。しかし、「深層構造が一致するからと言って肯定の内容をもつ深層構造から否定の内容の表層構造は導けないのではないか」、「否定と肯定などが深層構造で異るとするなら、表層構造と深層構造の差は無くなってしまい、わざわざ深層構造を仮定する意味は無い」など、カツ等批判をあげた。形式と内容を切り離せないことを考えれば当然の批判である。そこでチョムスキーは自説を改め、改訂拡大標準理論に至って、変形による意味の変化をも認めるに至った。そのため、深層にあるとした意味が、今度は表層にも別の意味があることになり、何の為の深層構造が分からなくなっている。初期の考えを形式と内容の二元論と言うなら、その後の考えは内容の二元論とも言うべきである。

2. ハリス

§323 さてハリス Zellig Harris (1909-1992) はウクライナに生まれましたが、彼が4才のとき、家族はアメリカに渡り、ペンシルヴァニア州のフィラデルフィアに住みました。やがて彼はペンシルヴァニア大学で東洋学を修め、セム語学者になりました。その後1931年にはこの大学の教職に就き、1946年にはアメリカ最初の言語学講座を創設しました。そこで出会った学生のうち、後にもっとも知られるようになったのがチョムスキーです。

はじめ彼はそれまでのブルームフィールドなどの記述言語学と同じく、なるべく意味に頼らない方法を取ろうとしました。そのため、彼は、単語を作る音素、文を作る単語などが、自由勝手に結合することはなく、それぞれの言語で一定の出現可能率を持っていると考えました。たとえば英語では k のあとに p が出現する確率はほとんどありません。

§324 しかしこの方法も全く意味を考えないで行うことには、無理がありました。その理由を考えてみましょう。ハリスの方法によれば、単語のばあい、たとえば roll と role, cart と card が発音されたのを聞いて、まずはじめに聞き手が同じように聞えるかどうかというテストをして、多くの人が同じようだと聞けば、roll と role は同じ [rɔʊl] であるという確率が高いと考え、また cart と card は異なったもの、すなわち [kɑ:t] と [kɑ:d] だと判定するというのです¹。

§325 この判定法は、その言葉を持っている聞き手に聞かなければ意味がないことです。たとえば roll と role のばあい、英語を母語とする人には同じに聞えるとしても、客観的に見れば、音声と同じであるかどうかについては、別の基準が必要になるでしょう。すなわち、意味を完全に捨象できないわけです。もしロシア語を話す人ならば、roll を [rɔʊt], role を [rɔʊlʲ] と聞くかも知れません。ここで [t] は英語の語末に -ll と書かれ、dark l と呼ばれる軟口蓋化した [l] で、日本人の耳には暗く響く「ウ」のように聞える音です。また [lʲ] は明るい音色を持った硬口蓋化した [l] で、「リ」のように聞えます。

この二つの音は л および ль と書かれ、文末に限らずどの位置にも立つことができ、意味を区別します。たとえば [rɔʊt] (ролл「巻取り紙」), [rɔʊlʲ] (роль「役割」) のようになります。このことから分りますように、少なくとも歴史的にはロシア語では role を借用する際に、роль と聞いた時期があったことが分ります。

§326 このような問題はありましたが、ハリスは人が文を作るのには、一般的な原理があるに違いないと考えました。このような一般的な原理の働き

¹ 音声記号については、たとえば [60] 参照。

によって、ある語のあつまりがでたらめに並ぶことはなく、出現確率にしたがって現れ、意味をもつ文を作ることができると考えたのです。このような一般原理としてハリスが考えたのは、演算子 operator と被演算項 augment のあいだの依存関係でした。

演算子とか被演算項(独立変数)などというのは、耳慣れないことばかも知れませんが、たとえば加減乗除のように、ある項(被演算項)に対してある操作(演算)を行うことを表すのが演算項といえます。いま、関数 $y = f(x)$ というものを考えてみましょう。これをたとえば $y = 2x + 3$ だとします。いま x を 1 とすれば、 $y = 2 \times 1 + 3$ ですから、 $y = 5$ ということになります。このとき x に対して「はじめに 2 をかけ、それに 3 を加える」という演算を行うと y がでてきます。こういうようにある演算をたとえば $f()$ で表し、この演算が x に対して行われることを $f(x)$ で表すとします。その結果が y になることを $y = f(x)$ というように表すに過ぎません。ですから x の値が 2 になったり 3 になったりすると、当然 y の値も変わります。

§327 　ただし、被演算項は、必ずしも一つとは限りません。二つのばあいには、たとえば $z = 2x + 3y + 5$ というようになります。このとき z は x だけが分っていても求めることはできません。 y の値も必要です。そういうわけでたとえば $x = 3$ 、 $y = 4$ のときには z は $z = 2 \times 3 + 3 \times 4 + 5$ となりますから、 $y = 6 + 12 + 5 = 23$ ということになります。このようなばあいは $z = f(x, y)$ という形で一般的には表せます。

§328 　ことばのばあいにもこういうことは考えられます。たとえば「走る」という語を考えてみましょう。「走る」といっただけでは全く意味が分かりません。これを意味のある「文」にするためには、「誰が」ということがどうしても必要です。そうすれば「走る」というのは、上でいう $f(x)$ の $f()$ に当ります。そして「誰が」に当るのは x ということになります。その結果得られる y は文の意味ということになります。いってみれば $y =$ 走る(太郎)というのと同じことになるのです。一方「読む」ということばのばあいには「誰が」ということが分っても、意味のある文はできません。「何を」ということが必要になるからです。そうするとこのばあい「読む」という演算子は二つの被演

算項を必要としていることになります。 $z = f(x, y)$ です。したがって「読む」のばあいには $z = \text{読む}$ (太郎, 漫画) という形をとるでしょう。

§329 更に「与える」という語は「誰が」「何を」「誰に」という三つの被演算項を持っていると考えられます。したがってこれはたとえば $u = f(x, y, z)$ という形を持っていることになります。このように述語を演算子としたばあい、それぞれの演算子は、固有の数の被演算項を要求すると考えられます。したがってこういう演算子と被演算項との依存関係が満たされているとき、意味のある文が形成されることになります。

文がこういう意味構造を持っているとすると、演算子の役割を果たすことができるものは、述語だと考えられますから、述語として用いられるものが一つのグループとなります。そしてその中でいくつの被演算項を持つかによって、更に小さなグループができます。このようにして文型に近いグループが析出してきます。

§330 ところで次のような文を考えてみましょう。 John plays violin and Mary plays piano. 「ジョンはヴァイオリンを奏で、メアリーはピアノを弾く」。この文は既に述べた演算子と被演算項の依存関係を完全に満たしています。 $\text{AND}(\text{PLAY}(\text{John}, \text{violin}), \text{PLAY}(\text{Mary}, \text{piano}))$ 。ここで演算子を便宜上大文字で表します。AND は二つのものを結びつける働きをしますから、二項演算子だと考えられ、被演算子は二つの下位の文 $\text{PLAY}(x, y)$ ということになります。

§331 一方これと「意味的に」等価であると考えられる John plays violin and Mary piano. のばあいはどうでしょうか。形の上では Mary と piano を被演算項とする演算子がないので、不完全です。ハリスはこのようなばあい、最初の基盤となる文から、なくても理解できるものを取り去る (zeroing) という変形を施しても正しい文が得られると考えました。こうして得られた変形後の文は、形式的に不完全ですから、一般的な原理から逸脱しています。そこでハリスは一般的な原理を適用して得られる (生成される) 文の集合 (kernel sentences 核文) と、それから変形によって得られる文の集合の二つの文の集

合を考えることによって、全ての文を得るという手続きを考えました。これは思想的理論的背景としてはハリスのもとで学んだチョムスキーとは決して同じとはいえませんでした。少なくとも生成と変形という手続きに関するアイデアは、チョムスキーによって受け継がれたといえましょう。

§332 以上の考察から生成文法には、理論的にいくつかの疑問点があるように思われます。

その第一は既にフンボルトの項で述べましたように(62頁以下参照)、言語は単なる伝達の機能を持っているだけでなく、「客観的現実」を創り上げ、これを認識するという機能を、その本質において持っているということができるといことです。繰り返していえば例えば「机」とか「椅子」とかいう「実体」が存在しているから、これを指す名前が生れるのではなく、一定の機能を持っているものに対して、その機能に名を与えるに過ぎないのです。したがって「実体」と信じている「机」も「椅子」も現実に存在してはいないのです。

§333 それなのに生成文法では既にある名詞やある動詞などが既にできあがっているものとして、その存在が前提されています。この意味で「生成文法」は既にして「生成」とは言えないと思うのです。しかも例えば $S \rightarrow NP+VP$ というとき、これは現在のところ言語類型の最も後に発達した対格言語類型にしか妥当しないものです。

後で見ますように、近年明らかになってきた内容的類型学の結果からすれば、例えば活格言語類型をもつ言語では、 $S \rightarrow VP$ が基本的なものとなると考えられます。これは生成文法がとくに英語学者の間でもてはやされたことと関連するのですが、対格言語類型を所与のものと考え、かつその中でも極めて特殊な構造をもつ英語に見られる諸事実を普遍化したことから生じた誤りだというべきではないでしょうか。

§334 第二に、先に述べましたように、導出規則によって導き出された非末端記号に、導出の際に例えば単数とか主格とかいう内包も指定されたとしても、これらの記号に対応する集合の中の特定の元を指定することは不可能

と思われることです。もしランダムに元を指定すれば 143 頁に引用したチョムスキーの文例のように、文法的ではあるかも知れませんが事実上意味を持たない文が無数に産出されることになるでしょう。

§335 第三に、もし何らかの有効な意味を持つ文を作るとすれば、必要なものは何でしょうか。言語類型の問題は一応措くことにして、前にも述べましたように、私にはそれは話者の意図であろうと思われるのです。前に挙げた自動販売機の例を思い出して下さい。これはお金を単語としてそれを連ねて文を作り、最後の押すボタンもこれに加えると自動販売機が望みの種類の飲み物を落としてくれるというものでした。このとき買い手がコーラが欲しいと思えばそれにしたがって文を作り、またお茶が欲しければそれにしたがって文を作る訳です。この場合例に挙げたのは単純なものとして皆同じ文(同じ値段)だと仮定しましたので、実際には選択を最終的に実現する文は最後のボタンによる入力でした。この場合ボタンは非末端集合をあらわし、コーラとかお茶とか書いてある一群の具体的なボタンはその集合の元、即ち末端記号に当ります。そしてその選択は未だ形式化されていない、買い手の意図によるものとなります。

§336 言語の文のばあいでも言語主体が何かを伝えたいというものを持っていて言行為を行うとすれば、個々の集合からある元を選び出すのは言主の意図ではないでしょうか。もちろんこれは非常に単純化したばあいのことで、実際には言主の意図は文の構造の選択にも影響を与えらると思われるから、理論化はそう簡単なことではないでしょう。しかし少なくとも無意味な文を除外するためには言主の意図を考慮に入れなければならないと思われます。

もしそうとするならば、チョムスキーの挙げたような、形式的には英語の文であると見なされるけれども意味をなさない文が導出されるのはなぜか、という問いに答える必要があります。そうすれば、ひとつの表出にはその全体を貫流する何かが存在しなければならない、ということになると思われます。おそらくそれは広い意味での「意味」の領域に属するものには違いないでしょう。しかし文の中の小さい単位の中だけの意味的整合性を求めても、それだけでは全体の整合性を得ることには、おそらくならないでしょう。

そうすれば、チョムスキー流の形式的な整合性のみを主たる重点を置いた理論に対する必然的なアンティテーゼとして、意味的な要素をどういうように取り込んでいくかが問題になってくると思われます。

§337 最近巷間で盛んに行われている認知言語学も、この意味でそれなりの正当性を持っていると思われます。しかしもし意味的モーメントの問題が、語のレベル、あるいは句のレベルに矮小化してしまったならば、ここで指摘したような問題に対する解決になるとは思えません。今後認知言語学の手法乃至理論体系の全体がこの問題にどう取り組むか、その行方には大きな興味が寄せられているといえそうです。

第十六章

内容的類型学の発展

1. 類型学の先駆者 — フンボルトとサピア

§338 前に述べましたフンボルトは『人性言語の種々相とその人類の精神的発達に及ぼす影響について』という論文の中で、言語には孤立語と膠着語及び屈折語という区別があることを述べ、次のように言っています。

中国語の場合のように、文中における語の属している(思考の)範疇を指示することが欠けてしまっていることと、本当の屈折(フレクシオン)ということとの間には、言語の備えている純粋な有機構造と背馳しないような第三者は存在し得ないのである。両者の間に存在し得ると考えられる唯一のものは、屈曲(ボイグク)として用いられた複合という方法だけなのである。この場合の複合とは、本来の屈折を目差しながらも十分には完成されなかった屈折という意味なのであって、実は機械的な接着にすぎず、純粋な有機的附加形成ではない。こういうどっちつかずの混血児は、仲仲それと見分けのつくものではないが、近頃では膠着という名称で呼ばれているものである [70, p.186].

§339 ここでフンボルトが中国語について「(思考の)範疇を指示することが欠けてしまっている」といっているのは、品詞の区別のことであると思われます。中国語では例えば「走」という語は「歩くこと」という名詞かもしれないし、「歩く」という動詞かもしれません。ヨーロッパの言葉のように、名詞に特有な形、動詞に特有な形というのはいくつもないのです。それを決めるのは文の中でどういう役割を果しているかであって、単語だけ取ってみても、それが名詞なのか動詞なのかは決定できないのです。中国語の単語はいわば裸の形であって、他の単語との関係があらかじめ決まてはいないので、このような考えから、中国語は孤立語の仲間だといわれたのです。

§340 これに対して屈折型言語では、語は「純粋な有機的附加形成」を示している、とフンボルトは考えました。その意味は次のように考えられます。例えばラテン語の場合 *domin-us* という名詞は「主人」の単数主格を表して

います。「主人が」という意味です。ここで -us は単数主格を表していると考えられます。ところが *domin-ī* といえば、これは「主人たちが」という複数主格を表します。またこれは男性名詞ですが、この -us および -ī のどの部分が単数を表し、どの部分が主格を表し、どの部分が男性を表すかといえば、そういう区別はないのです。puer「男の子」というのは語尾をもってはいませんが、語尾をもってはいないという、まさにそのことによってこれは男性単数主格なのです。こういう言語では、語尾を語幹から切り離してどの部分が何を表しているかを知ることはできないのです (multifunctionalism)。

一方日本語も属している膠着型言語の場合は、たとえば「犬・たち・が」というように、「複数」を示すのは「たち」という要素で、「主格」をあらわすのは「が」であるというように、ひとつひとつの要素がそれぞれ文法的意味を持っています (monofunctionalism)。これがフンボルトのいう「複合」という言い方の中身なのです。

§341 現代の言語類型学の魁^{さきがけ}をなしたと考えられるのはアメリカの言語学者エドワード・サピア Edward Sapir でした。彼は言語の類型による分類について、「なぜ言語の分類が結局概して無駄な企てとなってしまったのかを示すものとして、ここに第四の理由がある……前世紀の中葉に至るころ、社会諸科学にしみこんだ進化論的偏見がすなわちそれである」[20, p.123] と述べ、さらに「実はこの科学的偏見には、その大きい先駆をつとめた、もっと人間的な偏見が入りまじっていたのである。これまでの大多数の言語理論家たちは、だいたい一定の型に属する言語を話していた。彼等にとって、この種の言語のうちで最も完全に発達したものとえば、その幼少のころ習ったラテン語かまたはギリシア語であった。従って熟知しているこれらの言語は、人間の言葉の到達しえたく最高の>発達段階を表わし、他の型はすべて、彼等の愛する<屈折的>な型に至る中間段階にすぎないと信ずることは、彼等にとってむずかしいことではなかった」と述べています (ibid.)。

§342 サピアはこのような科学的な偏見に対して、「言語というものをその真の内面性において理解しようとするならば、優先的価値観の迷妄を解いて、英語とホットtentott語とを、同じ超然たる態度で、冷静に、しかも興味を

持って、観察する習慣をつけなければならない」といいます。彼がこのような考えに至ったのは、彼が師のフランツ・ボアズ (Franz Boas 1858-1942) の流れを汲んで、アメリカ先住民の言語を研究していて、ヨーロッパの「常識」では理解できないような多くの現象を知っていたからだと思われます。

サピアはそれまでの孤立言語、膠着言語、屈折言語という分類では十分でないと考え、さらに分類を細かくしていきましたが、本質的には形の上での分類に他なりません。孤立型の言語の典型的なものは前にもいいましたように中国語と考えられていましたが、明らかにヨーロッパの言語に属している英語も、どんどん孤立型の性質を持つようになってきています。さらにこういう形式的な分類を行って、仮にある言語の分類ができたとしても、そのことにどんな意味があるのかといえば大いに疑問です。そういうわけで言語の類型的分類には、言語学は余り興味を示しては来ませんでした。

2. ロシアにおける言語研究

§343 ロシアにおいては、フンボルトの思想的影響を最も強く受けた偉大な言語学者ポテブニャ (Aleksandr Afanas'evich Potebnja Александр Афанасьевич Потебня 1835-1891) がいました。彼は言語の発展と思维の発展との関係について、言語の統語構造、すなわち文の構造の「段階的な」発展は、思维そのものの発展の一定の時期を反映していると述べています [42, p.14]。これは意味の領域と文の構造の間に密接な関係があることを示唆したものだと考えられます。このことによって類型学はフンボルトやサピアに見られる形式的な分類原理から、意味的な分類原理、さらにいえば客観世界の認識の仕方に基礎をおいた分類原理に決定的な転換を遂げることになっていきます。

§344 これと関連してポテブニャが次のように述べていることは、後の世代に完成する内容的類型学を先取りしていると見られる点で、興味を惹きます。

現在あるような形式の区別から推測できることであるが、形式が欠如するに至る道筋を研究するプロセス、またそれと同時にこの推測の蓋然性を証明するプロセスは、……次のような諸問題を解決することに分かたれる。それは、観察できる言語において過去に向かって増加することを示している、a) 主体と属性、b)

主体と述語, c) 主体と客体, の区別の欠如である [49, vol.3, p.507].

§345 これは少し分り難いのですが, 現在の内容的類型学が明らかにしたことの中の本質的な部分として, 時代が遡ると, 主語と述語, 主語と性質, 主語と目的語などの区別がなくなることが, 既にこのときに予見されているということです. ポテブニヤの思想的流れを引いた碩学デスニツカヤ (Agnija Vasil'evna Desnitzkaja Агния Васильевна Десницкая, 1912-1992) は, ポテブニヤについて多少の感傷を交えながら次のように言っています.

.....過去の卓越したロシアの言語学者ポテブニヤは「予言者」であり, 彼の著作『ロシア文法覚書』は「天啓」の書であって, そこから歴史的・類型学的な立論において一定程度に依拠することのできる, 多くの深い思想と, 繊細な統語的な考察を引き出すことができた. ポテブニヤの言語学的な諸見解の解釈は, 30年代末には能格性の問題と並んで, ネヴァ河畔の花崗岩の通りを散策しながら, 類型学を志す若い言語学者の間で交わされた, 際限のない会話と論争において最も好まれたテーマのひとつであった..... [37, p.39]

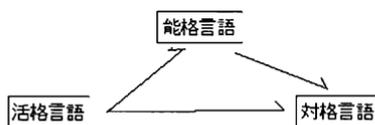
§346 帝政ロシアはチェチェンやアヴァール, ラクなど, カフカースの勇猛な山岳諸民族を長い時間をかけて征服しましたが, この諸民族の言語はほとんど皆, 非常に変わった文法構造を持っていました. それでこれをめぐるさまざまな研究や論争が, ソヴェト時代になっても続きました. 詳しいことは省きますが, 帝政期のウスラル (Petr Karpovich Uslar Петр Карпович Услар 1816-1875), ソヴェト期のマール (Nikolaj Jakovlevich Marr Николай Яковлевич Марр 1864/65-1934), メシチャニーノフ (Ivan Ivanovich Meshchaninov Иван Иванович Мещанинов 1883-1963) などの研究を経て, 多くの学者たちの研究が積み重ねられ, やがてこれらを総合する形でクリモフ (Georgij Andreevich Klimov Георгий Андреевич Климов 1928-1997) による内容的類型学が, 学問的な形で成立することになりました¹.

§347 カフカースの諸言語の大部分は私たちのよく知っているインド・ヨー

¹クリモフの内容的類型学に関する一連の著作のうち『活格構造諸言語の類型学』[41]が, 石田修一大阪外国語大学名誉教授によって『新しい言語類型学』の書名で出版されています [54].

ロップ語族の諸言語と異なっていて、能格言語という類型であると考えられてきました。しかし能格言語の研究が進むにつれて、それまで能格言語と考えられていた言語の中には、実はこれとは違う類型があることが分ってきました。この類型は活格言語といわれ、アメリカ先住民の言語の多くがこれに属することも分ってきました。さらにパプア・ニューギニアの言語も活格言語であるといわれ、実はこの種の類型は未だ世界に思いの外広く分布していることが分ってきたのです。

§348 さらに研究が進むにつれて、能格言語は活格言語から発展したものであること、インド・ヨーロッパ語族の言語が独立した対格言語という類型



に属していること、また対格言語は能格言語から発達してきた場合とインド・ヨーロッパ語族の場合のように、直接活格言語から発展する場合があることなども分ってきました。

すなわち、言語によって外界の認識が異なるだけでなく、そこに働く論理そのものも異なっていることがあり、それによって言語をいくつかの内容的類型に分類できることが、分ってきたのです。

§349 内容的類型学は、1970年代に集大成されたロシア言語研究の成果ですが、これは今までの言語研究の常識を覆す画期的なもので、屈折語、膠着語、孤立語というような、それまでの言語類型学とは全く異なった「ものの観方」を与えました。

このことによって、たとえば文には「誰が、どこで、何をした」という要素がないと意味が分らないから、主語を表す形(主格)、目的語を表す形(対格)はどんな言語にもある、というような、今まで常識と考えられていた考えが、普遍的に正しいものではないことが分ってきました。

§350 このような考えは、文明語といわれる、主としてヨーロッパの言語の属している、一つの類型(対格言語類型)の中でしか通用しないことが分ってきたのです。

現在のところ対格言語類型の外に、このような類型として、既に述べました「活格言語類型」と「能格言語類型」があることが確実に分っています。この中でカフカス地方の言語に多く見られる「能格言語類型」は、「活格言語類型」と「対格言語類型」の中間にあるものだと考えられています。それで「活格言語」と「対格言語」を比較すると、その特徴が分ってきます。

内容的類型学に一応の集大成を与えたのは先に述べたクリモフですが、この代表的な著作については参考文献の項を見て下さい。本邦においてこの学説をはじめて紹介したのは私ですが、その後石田修一教授が活格言語についてのクリモフの著作を翻訳しました (cf.[54])。この翻訳の許可を得たのは原著者の死の直前だったと聞いています。



左クリモフ著『活格類型言語の類型学』, 右同石田修一訳

3. 活格言語

§351 活格言語には、何も格の印を持たない裸の名詞があります。これは動詞などの述語の説明をするものと言えます。「行く」というとき、行くのは誰かが分からないと困るからです。言い換えれば「行く」という行為が成り立つために必要なものとして、これを説明するために名詞が添えられるわけです。たとえば「太郎行く」というような場合です。同じように「石大きい」ということもできます。

§352 生物の場合、他の生物や「もの」に働きかけることができます。これを「行為者」Actor といいます。例えば「太郎が次郎を殺す」というような場合です。しかしよく考えて見れば、もし次郎が死ななければ、「太郎が殺す」ということはできません。しかし逆に太郎がいなくても、次郎は死ぬこ

とができます。

§353 言い換えれば、「死ぬ」ということと、死が訪れる生物との関係は極めて密接で、切り離すことができないのに対して、「殺す」という行為は「死ぬ」生物がいないと成り立たないのです。こう考えれば、インド・ヨーロッパ語族の言語のように、動詞が主語の人称によって変化するのは、「死ぬ」のような「自動詞」の場合は別にして「殺す」というような「他動詞」の場合、おかしいということになります。なぜなら「殺す」の前提になる「死ぬ」というものがあって、それと死が訪れる対象との密接な関係の上に「殺す」という意味が生れるはずだからです。そう考えればむしろ活格言語のように「太郎によって次郎死ぬ」といった方が現実により近いはずで、そうすれば「殺す」というような「他動詞」は必要がないことになるでしょう。実際これらの活格言語では、他動詞と自動詞の区別はないのです。したがって当然のことながら、受け身も存在できません。

§354 たしかに、活格言語には「～が」または「～によって」というように、行為者を表す特別な形(格)があります。これを「活格」といいます。そして活格は生きもの

対格言語	意味	活格言語
主	A	活格
格	S	
対格	P	絶対格

を指す名詞しか持ちません。それは行為を行うことができるのが生きものに限られているからです。しかしだからといって活格がインド・ヨーロッパ語族の言語の主格のように、「主語」にならなければならない必要はありません。「次郎死ぬ」とおなじように、主語がなくても「太郎によって次郎死ぬ」という言い方で、「太郎が次郎を殺す」ことを表現することもできるからです。

§355 ヨーロッパの研究者は長い間、どうして同じ裸の形「次郎」がある場合に主語になり、ある場合には目的語になるのかが、分りませんでした。インド・ヨーロッパ諸語が主格と対格を厳密に区別していたからです。

しかし今述べたことをよく考えて見れば、「太郎が」「次郎を殺す」というのは、単なる認定の問題に過ぎないことになります。

例えば呪いが有効であるという文化をもった社会では、太郎が遠く離れた

ところで真夜中に蠟燭を立て、五寸釘を藁人形に打ち付けていても、「太郎が殺した」ということになるでしょう。認定の問題だからこそ、現在でも殺人をめぐる裁判がしばしば行われるのです。この事態がひとりでに起ったのか、それとも誰かが惹き起した結果なのか、およびもしそうなら、惹き起したのは誰なのかということが決して自明なことがらではなく、判断の結果に過ぎないからです。しかし次郎が死んでいることは誰の目にも明らかです。

§356 このように、ただ一つ確実なことは「次郎死ぬ」ということだけなのです。「死ぬ」という言葉は、誰か死ぬ人がいることを予定しています。それが誰であるかを補ってやらなければ、「死ぬ」という言葉は意味を持たないといえます。ですからこのばあいの「次郎」というのは厳密には主語ではなく、「死ぬ」を説明するものだけということができません。

たとえば殺人が行われたという推測があるとき、決め手になるのは死体の存在とその上の犯行の痕跡です。したがってこれは *corpus delicti* と呼ばれ、「犯罪証明」と訳されているようです。殺人の疑いがあるが死体が見あたらないとき、警察が血眼になって *corpus delicti* を捜すのも当然です。しかし殺したのは誰かを決定することは決して常に容易なことではありません。数多くの殺人事件、あるいは冤罪事件がこのことを物語っています。

§357 このことからこの類型の言語が「他動詞」と「自動詞」の区別をもたないこともよく分ります。たとえば「石重い」というのと同じように、「石行く」といえばこれは意味がありませんが、「太郎によって石行く」といえば、「太郎が石を運ぶ」ことになります。「燃える」と「焼く」、「走る」と「追う」が同じ単語だということも当然です。

さらにこのことから、無生物が活格をもたないことも当然だと理解できます。

さらにまた、この言語が受け身(受動態/相)をもたないことも明らかです。「太郎によって石行く」という文はどうしたって受け身にはできないのです。受動態が可能なのは、自動詞と他動詞を区別している対格言語にのみ特有なものなのです。

以上のことから、この言語は世界を生物と無生物に区別する「ものの観方」

に基づいているということが出来ます。

§358 いま、「～によって」のように、行為者 Actor を表す印をもったものを「活格」、何も印をもたないものすなわち無規定なもの（言語学ではこれを「無徴的」あるいは「無標的」*unmarked, merkmallos* といいます）を「絶対格」ということにしますと、絶対格には何について言われているかというテーマを表す Subject, 即ち自動詞の主語となるばあいと、行為が及ぼされる対象 Patient を表す場合の二つがあります。言い換えれば、これら二つのものは、他者に自らの行為を及ぼさないという点で共通性を持っているといえましょう。

これに対して対格言語では行為者 (A) とテーマ (S) は主格で、行為が及ぼされる対象 (P) は、対格で表されます。

§359 いま、

Mary slapped Diana, and ran away.

(メアリーがダイアナをたたいて逃げていった)

という文があったとします。この時「逃げていった」のはだれでしょうか。おそらく皆は「メアリーに決っている」というでしょう。しかしこれが正しいのは、対格言語の場合だけなのです。

どうしてこのようなことが起るのでしょうか。このばあいメアリーはダイアナをたたいたのですから上の表では A(ctor) で、ダイアナは P(atient) です。そして逃げていったのは自動詞の主語、すなわち S(bject) です。すなわち

メアリー (A) がダイアナ (P) をたたいて、(S) が逃げていった。
ということになります。

対格言語の場合は A と S は主格で表されます (A=S) から、逃げていったのはメアリーでなければなりません。ところが活格言語では S は P と共に絶対格で表されます (P=S)。ですからこのばあいには逃げたのはダイアナでなくてはならないのです。

§360 このことは、一見奇妙に思われますが、完全に論理にかなっていま

す。このことから、私たちがいくつかのよく知っている言語の事実を直ちに普遍化することが誤りであることが分ります。

世界の見方、認識の仕方は決してひとつしかないわけではありません。それぞれの言語が、同じ客観現実を違ったように認識し、違った論理で自分たちの世界像を作っているのだということが出来ます。このことは、学問をする場合にも自分の考えていることが絶対正しいかどうか、常に検証しながら進むことが大切であることを教えていると思います。

§361 活格言語類型のことが分って来るにつれて、今まで無反省であって、そのためによく分ってはいなかった対格言語の特徴も少しずつ分ってきました。この言語は着目する対象について「それがどういう風に事態にかかわっていたか」ということを重視する言語類型です。それに伴って行為の対象があるかないかを問題にするようになりました。

こうして自動詞と他動詞の区別が重要になってきました。常に着目する対象から事態を見るという意味で、これを表す主格は常に行為と一体のものとして理解され、自動詞にも他動詞にも「行為主体」という意味で同じ主格が使われるようになりました。

この言語では、行為者 (A) だけでなく、単なるテーマ (S) を表すときでも主格を使うことが出来ましたから、受動態が可能になりました。

§362 活格言語の、例えば「次郎死ぬ」という場合には「死ぬ」ということと「次郎」が密接に関係していましたから、次郎の様子、即ち、次郎がどういう風に死ぬのか、死につつあるのか、それとも死んでしまったのかということが、とても大切だと思われる。このような行為の様子、様態を、文法家はアスペクトとかアクチオンス・アルトなどといいます(アスペクトとアクチオンス・アルトはよく似た概念ですが、厳密に言えば一寸異なっています。しかしこれについては今は述べません)。

§363 これに対して対格言語の「誰が何をした」という場合には、行為と主体とが密接な関係を持ちますから、「何時したのか」ということが、行為の様子よりも大切になります。すなわち、現在、過去のような時制が発達する

ことになります。少なくとも現在そう考えている人が多いと思います。

しかし、類型学の立場からの対格言語の研究は始ったばかりで、まだ充分に分ったということはできません。

§364 ともあれこのような類型学の結果は、言語というものが客観世界をそのまま反映したものでないことを、今までよりもはっきり確信させます。言語の反映の仕方、現実との「折り合い」の付け方にはさまざまな仕方があると思われるのです。

このことは言語の文法規則にも当てはまります。文法規則を見るとき、言語はその規則によってどのように折り合いを付けているのか、また文法規則からのさまざまな逸脱を見るとき、煩わしい例外だと敬遠するのではなくて、言語がそのことによってどのように折り合いを付け直そうとしているのかを考えるというのは、楽しいことでもあり、文法に対する観方を変えることにもつながります。

§365 以上のことから、自分がたまたま属している集団の言語に基づいて、そこで用いられている論理が普遍的な妥当性を持っていると考えるのは、錯覚に過ぎないことが分ります。言語がそれを使用する人に、自己の論理を強制しているに過ぎないのであって、そのものの観方が決して現実をそのまま写している訳ではないことが、最近になって具体的に分ってきたのです。

補 遺

言語の基本的な制約について

初めに言^{ことば}があった。

言は神と共にあった

言は神であった。

この言は初めに神と共にあった。

すべてのものはこれによってできた。

できたもののうち、ひとつとしてこれ

によらないものはなかった。

新約聖書ヨハネ伝 1:1-3.

§366 以下に述べるのは、広い意味での言語というものの性質について、鳥取大学において1999年の第一セメスターから講義したノートの冒頭の部分を基にしたものです。

この講義は、表題をはじめ『ロシア語の周辺』としていましたが、その後『ロシア文法の周辺』とした方が、より内容に即しているように思われましたので、そのように変更しました。その後講義を続けるに当たって、続きを講義しながら、一方では既に講義したものについても、追加したり書き変えたりする作業を続けました。鳥取大学は2000年3月に停年退官致しましたが、引続き非常勤講師として講義を続け、2002年3月、教育地域科学部が完成年度を迎えたのを機に、辞任しました。

表題はロシア語に関するものですが、実はロシア語を材料としながら、言語現象一般について考えることがその眼目となっています。その意味でこれは一般言語学の範疇に入るものだとひそかに考えています。

§367 さて、ここで述べているようなことをはじめて聞いた人は、きっと何か難しそうな話だと思われるかも知れません。しかしそれは今まで考えてみたことのない、新しいものだからだと思います。どんな仕事をする場合にも、いつも新しい問題が出てきます。特に環境などという対象は、それ自体が新しいものですから、出来合いの考え方が通用しないことの方が多いと思

われます。次々と新しい問題が出てくるようなばあい、あらかじめそれを予想して前もって教えてもらうことはできません。できるのはどういうように考えればいいのかという、「考え方」しかありません。問題を解決しようとするれば、色々な知識も必要になります。学問を学ぶことの意味は、実はこういうようなものの考え方と、将来問題が生れてきたときにそれを解決するために必要となるかも知れない、知識を身につけることだと思えます。

* * *

§368 さて、言語の文法は、何か守らなければならない面倒で無味乾燥な規則の集まりのように思われるのが普通です。文法は言語毎に異なっており、また同じ言語でも時代によっていろいろと異なっています。ある時代に支配的であった規則がいつの間になくなり、影も形もなかった規則が生れてくる、というようなことは、常に起っている現象です。

どうしてこのようなことが起るのでしょうか。あるいはどうしてこのようなことが可能なのでしょうか。

一つには言語というものは客観的な現実の構造をそのまま反映するものではないということが挙げられます。しかしそういつたからといって言語が客観的現実と何の関係もないということもまた、あり得ないことでしょう。もしそうなら言語を使って現実に働きかけることはできないと考えられるからです。

§369 また一つには人間は体の大きさとか、感覚器官の性質とか、あるいは運動能力とかさまざまな制約を持っています。またそこから来る感情の動きにも一定の枠があると思われます。こういう主体としての人間が客観的現実に対処するためには、主体と客体の間にある種の「折り合い」を付ける必要があります。言語というのはそういう「折り合い」の一つの形だということが出来ます。「言語は主観と客観のディアレクティケー（対話）の上に成り立つ」というのは、そういう意味だと思われます。そしてその折り合いの付け方は、それぞれの言語集団のいる環境や文化などの条件によってさまざまだと思われます。しかし人間という枠がその底にあるとすれば、言語の異なり

にも一定の枠があると考えるのが論理的だと思われます。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトが、人間の言語は種々さまざまだけれども、その底には一つの言語があるといった意味も、このことだったのだろうと思われるのです。

§370 しかし成り立ちとしてはそういうものであったとしても、言語は一度できてしまえば、それを使う人間の認識や行動を縛るはたらきをします。それは言語の固有の性質だろうと思います。そうでなければ言語は言語として働くことが難しくなるからです。これは後で「人間の言語の持つ条件」として挙げるものです。

§371 以前には言語と認識の関係について、言語は客観的現実を自由にパターン化して取り入れることができるという考え方がフンボルト・サビア・ウォーフの仮説という名の下に広く信じられてきました。しかしこれは人間が客観的現実をそのまま言語構造として反映するという考え方と同じく、極端に過ぎます。

なぜかといえば、言語と認識に関して、少なくとも二つの条件があると思われるからです。

- 1) 人間の受容器官 (感覚器官) の持つ制約
- 2) 人間の言語の持つ条件

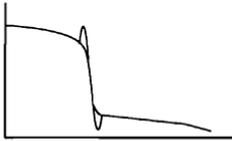
1) の場合

§372 たとえば人間の視覚は、対象の明るさが連続的に暗くなっていくとき、暗くなり出す時点では、目は本当の明るさよりは明るく感じ、暗くなってしまつて明るさが一樣になる時点では、本当の明るさよりも暗く感じるようになっています。したがって人間はその境界に線があるように錯覚するのです。

これがものの輪郭です。この視覚の働きによって、人間は元々客観的には存在しないはずの輪郭を、あたかも存在しているかのように思うのです。

これをマッハ Ernst Mach (1838-1916) は数学的に次のように表したということです。

$$K = I - c \frac{\partial^2 I}{\partial x^2}$$



ここで I というのは物理的強度で、 K というのは人間が感じる強度であり、 x は上右の図の横軸、即ち円盤でいえば半径です。 c は常数。

2) の場合

§373 たとえば日本語では/papa/というばあい、[phapa]としか発音しないが、[ph]と[p]は区別できません。それは日本語では意味に関係しない(違う音素でない)からです。しかし/papa/と/baba/はまったく意味が違います。だから日本人ならば[p]と[b]はどこにあっても区別できるのです。

これに対して朝鮮・韓国語では、[p]は語頭でしか発音できません。語中では[b]としか発音できないのです。そしてたとえ[p]と[b]を取り替えても、意味も変らないし、[p]と[b]の区別もできません。同じ音と感じられるのです。

そのかわり[ph]と[p]とはどこにあっても明瞭に区別でき、どちらを使うかで意味も違ってきます。このように言語にないものは、それが現実にあっても認識できないのです。

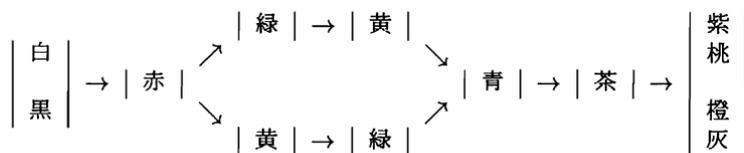
§374 色の場合でも、人間は自分の言語がもっている色彩語に合せて、現実には連続しているスペクトルを切断して認識していますが、客観現実としてはそのような切れ目はなく、連続しています。

逆に人は、自分の言語にない範囲の色を、すぐには思い浮べることができません。たとえばページユという言葉が入ってくるまでは、すぐにこの色を想像することは、誰にもできなかったでしょう。

§375 最近言語によって、色の認識に一定の順序があることが分ってきました。実際の順序の細かいところについては、まだ議論がありますが、順序

があることは、間違いがないらしいのです。

ホーレンシュタインによれば、このような含意関係を図にすれば次のようになります。



この表は、次のことを意味しています。いま、二つしか色彩語をもっていない言語があるとします。するとそれは必ず「白」と「黒」に当る語をもっています。もし三つの色彩語をもっている言語であるならば、三つ目の色彩語は必ず「赤」にあたる語だということです。

§376 今、二つしか色彩語を持っていない言語があるとします。そうするとこの言語を持っている人々は皆色覚異常なのでしょうか。そうではないと考えられています。これらの人々も私たちと同じようにフル・カラーで世界を見ているに違いありません。ただこれらの人々は比較的明るい色を皆ひっくるめて「白」といい、比較的暗い色を「黒」と言っているにすぎないと思われれます。しかし色彩を示す言葉がないと例えば「青」と「黄色」あるいは「黒」と的確にイメージすることは難しいでしょう。

§377 例えば日本語では遠い昔には草の色も空の色もおなじ「あを」という言葉で表していたと考えられます。なぜなら私たちは今でも「草が青々と茂っている」などというからです。そのとき私たちが思い浮べているのはブルーではなくてグリーンに当る色だと思われれます。「緑色」です。この midori というの語源はいくつか考えられていて、どれが本当か分らないのですが、有力な説として midu 「水」から作られたとするものがあります。「みずみずしい」というのがその本来の意味だということです。そういわれてみると例えば私たちは「みどりなす黒髪」というような言い方を知っています。もしこの「みどりなす」というのがグリーンだったとすると、明らかに形容矛盾に

陥ります。「緑で黒い」髪と言うのがあり得ないからです。

また生れたばかりの赤ちゃんを「みどりご」ということもあります。しかし赤ちゃんはどうひいき目に見ても「赤い」ように見えます。しかしもし「みどり」というのが「みずみずしい」という意味だったならば、これらの言い方はよく分ります。仮にもしそうだとすれば、グリーンに当る現在の「みどり」はやがて「あを」のみずみずしい部分をさすようになった結果ではないのかと思われてきます。

§378 さらに「あを」についても、私たちの祖先は馬の毛について「鹿毛」「くろ」「栗毛」,「あを」などといっていたようです。このばあいの問題になるのは「あを」です。ブルーの馬など見たことも聞いたこともないからです。この語は実際は「灰色」を指していたと考えられています。鷺の場合でも「白鷺」に対する「青鷺」は実際には灰色をしています。広辞苑を引くと「あお」の項に、「(一説に、古代日本語では、固有の色名としては、アカ・クロ・シロ・アオがあるのみで、それは明・暗・顕・漠を原義とするという。本来は灰色がかった白色をいうらしい)」と書かれています。

このようなことを考えてみると、私たちが考えている色彩も、いろいろな言葉によって色の部分を示すようになって、はじめて現在のように豊かな色を感じとることができるようになったのだと思われてきます。

外界の認識には言葉がまず必要だという事情を、これらのことが示していると思われるのです。

關係文獻

- [1] Charles Bally
Traité de stylistique française, t.1-2, Heidelberg-Paris 1909.
- [2] Charles Bally
F. de Saussure et l'état actuel des études linguistiques. Leçon d'ouverture du cours de linguistique générale, lue le 23. octobre 1913, Genève 1913, *Le langage et la vie*, 3. ed., Genève 1952, 147-160.
- [3] Charles Bally
Langue et parole, *Journal de psychologie normale et pathologique*, t.23, Paris 1932, 693-701.
- [4] Charles Bally
Linguistique générale et linguistique française, Paris 1932, 4^e éd., Berne 1965.
- [5] Charles Bally
Synchronie et diachronie, *Vox romanica*, t.2, Berne 1937.
- [6] Charles Bally
Qu'est-ce qu'un signe? *Journal de psychologie normale et pathologique*, t.36, Paris 1939, 161-174.
- [7] Charles Bally
L'arbitraire du signe. Valeur et signification, *Le français moderne*, t.8, Paris 1940.
- [8] Leonard Bloomfield
Language, New York:Holt 1933.
- [9] Československá akademie věd 79
Русская грамматика, 1-2, Praha 1979.
- [10] Československá akademie věd 85
Malá československá encyklopedie, ČAV 1985.

- [11] Vera Barandovska-Frank
Enkonduka lernolibro de interlingvistiko, San Marino 1995. (La ret-forma eldono Aleksandra Triff.)
- [12] Noam Chomsky
Syntactic Structures, The Hague: Mouton 1957.
- [13] Boleslas Gajewski
Grammaire du Solrésol ou langue universelle de François Sudre, 1977,
URL: <http://www2.polarnet.com/srice/Solrésol/Solrésol.htm>
- [14] Vilém Mathesius
Nové proudy a směry v jazukovědném bádání. *Z klasického období pražské školy 1925-1945*, Praha 1972. Přeložil Josef Vachek z "New Currents and Tendencies in Linguistic Research" , Praha 1927.
- [15] Vilém Mathesius
Kam jsme dospěli v jazykozpytu, *Jazyk, kultura a slovesnost*, Praha 1982.
- [16] Vilém Mathesius
Vilém Mathesius, Jazyk, kultura a slovesnost. Praha 1982.
- [17] Antoine Meillet
Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes, Paris 1922.
- [18] R. Havel, J. Orelik
Slovník českých spisovatelů, Praha 1964.
- [19] M. C. Landresse
Grammaire Japonaise par le P. Rodriguez. Traduits du Portugais sur le Manuscrit de la Bibliothèque du Roi, et soigneusement collationnés avec la Grammaire publié le même auteur à Nagasaki en 1604, Paris 1825.
- [20] Edward Sapir
Language, An introduction to the study of speech, New York 1949.

- [21] Ferdinand de Saussure
Kurs obecné lingvistiky. Přeložil František Čermák, Praha 1996.
- [22] Ferdinand de Saussure
Cours de linguistique générale, Paris-Genève 1916.
- [23] *Septuaginta, id est vetus testamentum graece iuxta LXX interpretes*,
Vol. I-II, edidit Alfred Rahlfs, Stuttgart, Rep. Leipzig 1974.
- [24] Albert Séchehaye
Les trois linguistiques saussuriennes, *Vox romanica*, t.5, 1940, 1-48.
- [25] Oswald Szemerényi
Richtungen der modernen Sprachwissenschaft, t.I, Heidelberg 1971.
- [26] Cercle linguistique de Prague
Travaux du Cercle linguistique de Prague, t.1, Prague 1929.
- [27] Nikolay(j) Sergejevich Trubetzkoy
Grundzüge der Phonologie, *Travaux du Cercle linguistique de Prague*, t.7, Prague 1939.
- [28] Jozef Vachek
Několik poznámek o pražské škole jazykovědné dříve a dnes,
Přednášky v IX. běhu letné školy slovanských studií, Praha 1966.
- [29] АН СССР
Русская грамматика, 1-2, М. 1980.
- [30] Викторина Николаевна Ярцева, red.
Лингвистический энциклопедический словарь, М. 1990.
- [31] Екатерина Николаевна Мячина, red.
Суахили-русский словарь, Москва 1987.
- [32] Владимир Михайлович Алпатов
История лингвистических учений, Москва 1998.
- [33] Федор Михайлович Березин
Очерки по истории в России, Конец XIX-начало XXа, М. 1968.

- [34] Юрий Дереникович Апресян
Идеи и методы современной структурной лингвистики, М. 1966.
- [35] Леон Арсеньевич Булаховский
Исторический комментарий к русскому литературному языку, пятое, дополненное и переработанное, Киев 1958, Rep. Leipzig 1974.
- [36] Федор Иванович Буслаев
Историческая грамматика русского языка, М., 1950. Rep. pub. 5 ed. (1881).
- [37] Агния Васильевна Десницкая
Сравнительное языкознание и история языков, Л. 1984.
- [38] Владимир Андреевич Звегинцев
История языкознания XIX-XX веков, в очерках и извлечениях, М., I 1964, II 1965.
- [39] Виктор Александрович Истрин
Развитие письма, М. 1961.
- [40] Георгий Александрович Климов
Очерк общей теории эргативности, М. 1973.
- [41] Георгий Александрович Климов
Типология языков активного строя, М. 1977.
- [42] Георгий Александрович Климов
Типологические исследования в СССР 20-40-е годы, М. 1981.
- [43] Георгий Александрович Климов
Принципы контенсивной типологии, М. 1983.
- [44] Георгий Александрович Климов
Введение в кавказское языкознание, М. 1986.
- [45] Георгий Александрович Климов
Основы лингвистической компаративистики, М. 1990.

- [46] Николай Андреевич Кондрашов
История лингвистических учений, М. 1979.
- [47] Ян Вилюмович Лоя
История лингвистических учений, М. 1968.
- [48] Александр Афанасьевич Потебня
Мысль и язык, изд. 3-е, Харьков 1913.
- [49] Александр Афанасьевич Потебня
Из записок по русской грамматике, I, II - 1874, III - 1899, IV - 1941
- [50] Анаторий Юдакин
Ведущие языковеды мира. Энциклопедия, М. 2000.
- [51] 百科事典
『世界大百科事典』平凡社 1972.
- [52] C. ランスロー = A. アルノー, 南館英孝訳, ポール・リーチ編序
『ポール・ロワイヤル文法』大修館書店 1972.
- [53] 飯田朝子, 町田健
『数え方の辞典』小学館 2004.
- [54] G. A. クリモフ, 石田修一訳
『新しい言語類型学, 活格構造言語とは何か』三省堂 1999.
- [55] 泉井久之助
『言語研究とフンボルト』弘文堂 1976 (昭和 51).
- [56] エルマー・ホーレンシュタイン, 平井正他訳
『言語学・記号学・解釈学』勁草書房 1987.
- [57] グロス = ランタン, 相沢輝昭 et alii 訳
『数理言語学入門』東京図書 1972.
- [58] 亀山健吉
『フンボルト 文人・政治家・言語学者』中公新書 525, 1978.
- [59] 高津春繁
『言語学概論』有精堂 1979.

- [60] 国際音声学会編, 竹林滋・神山孝夫訳
『国際音声記号ガイドブック-国際音声学会案内-』大修館書店 2003.
- [61] 近藤洋逸, 好並英司
『論理学概論』岩波書店 1967.
- [62] 榊亮三郎
『解説梵語学』種智院大学出版部, 初版明治40年, 第3版昭和25年.
- [63] アルベール・セシエ
「ソシュールの三つの言語学」山口巖著『パロールの復権 ロシア・フォルマリズムからプラーグ言語美学へ』所収(289-330), ゆまに書房 1999.
- [64] ジャン＝レミ・パランク, 久野浩訳
『末期ローマ帝国』クセジュ文庫 602, 白水社 1981.
- [65] ソシュール, 小林英夫訳
『一般言語学講義』岩波書店 1940.
- [66] ノーム・チョムスキー
『文法の構造』勇康雄訳 研究社 1967.
- [67] トムセン, 泉井久之助, 高谷信一共訳
『言語学史』弘文堂 1954.
- [68] トルベツコイ, 長嶋善郎訳
『音韻論の原理』岩波書店 1980.
- [69] フンボルト, 岡田隆平訳
『言語と人間』富山房 1941 (昭和16).
- [70] フンボルト, 亀山健吉訳
『ヴィルヘルム・フォン・フンボルト 言語と精神 カヴィ語研究序説』法政大学出版局, 1984.
- [71] ムカジョフスキー, 平井正, 千野栄一編訳
「美学および文芸学における構造主義」『チェコ構造美学論集』せりか書房 1975.

[72] 山口 巖

「古代ロシア語における第二対格について」『人文』第 23 集, 昭和 52 (1977) 年. 再録 『ことばの構造とことばの論理』古代ロシア研究特別号 1998.

[73] 山口 巖

『パロールの復権』ゆまに書房 1999.

付 録 A

印欧祖語の音韻対応表

(1) 破 裂 音											
	ケントウム語群						サテム語群				
IE	Gr.	Lat.	Irl.	Got.	Hit.	Toch.	Skr.	Av.	Lit.	OCS	Arm.
*p	π	p	ø	f(b)	p	p	p	p	p	p	h(w)
*b	β	b	b	p	p(?)	p(?)	b	b	b	b	p
*bh	φ	f(b)	b	b	p(?)	p	bh	b	b	b	b
*t	τ	t	t	ð	t	t(c)	t	t	t	t	th
*d	δ	d	d	t	t(d)	t(c)	d	d	d	d	t
*dh	θ	f(d)	d	d	t	t	dh	d	d	d	d
*k	κ	c	c	h(g)	k	k(ś)	ś	s	ś	s	s
*g	γ	g	g	k	k	k	j	z	ž	z	c
*gh	χ	h	g	g	k(g)	k	h	z	ž	z	j(z)
*k ^w	π(τ)	c	c	hw(h)	ku	k	k(c)	k(č)	k	k(č,c)	kh
*g ^w	β(δ)	u(gu)	g	q,k	ku(?)	k(ś)	g(j)	g(j)	g	g(ž,dz)	k
*g ^w h	φ(θ)	f(u)	g	(?)	ku(gu)	k	gh(h)	g(j)	g	g(ž,dz)	g(j)

(2) 母 音									
IE	Gr.	Lat.	Celt.	Germ.	Ind.Ir.	Lit.	OCS	Arm.	Hit.
*e	ε	e	e	e(i)	a	e	e	e	e
*o	ο	o	o	a	a	a	o	o	o
*a	α	a	a	a	a	a	o	a	a
*ə	ε/o/α	a	a	a	i	a	o	a	a?
*ē	η	ē	ī/ē	ē	ā	è	ě	i	a(aa)
*ō	ω	ō	ā/ū	ō	ā	û/o	a	u	e(ea)
*ā	ā	ā	ā	ō	ā	o	a	a	a(aa)

(3) 子音としてのソナント

I.E.	Gr.	Lat.	Irl.	Got.	Skr.	Av.	Lit.	OCS	Arm.	Hit.
*y	ϵ, ø	i	ø	i	y	y	j	j	?	y
*w	(w)	u	f	w	v	v	v	v	g, v	w
*r	ρ	r	r	r	r	r	r	r	r	?, r
*l	λ	l	l	l	r, l	r	l	l	l	l
*m	μ	m	m	m	m	m	m	m	m	m
*n	ν	n	n	n	n	n	n	n	n	n

(4) 母音として働くソナント (子音の前)

IE	Gr.	Lat.	Irl.	Got.	Skr.	Av.	Lit.	OCS	Arm.	Hit.
*i	ι	i	i	i	i	i	i	ĩ	i	i
*u	υ	u	u	u	u	u	i	ũ	u	u
*r̥	ρα, αρ	or	ri	aur	ṛ	ərə	ir, ur̄	rũ	ar	(ar)
*l̥	λα, αλ	ul	li	ul	ṛ	ərə	il̄, ul̄	l̄, l̄ũ	ał	(al)
*m̥	α	em		um	a	a	iĩm̄, uũm̄	ę, ũ	am	(a)
*n̥	α	en		un	a	a	iĩn̄, uũn̄	ę, ũ	an	an

(5) 母音として働くソナントの長音

IE	Gr.	Lat.	Irl.	Got.	Skr.	Lit.	OCS	Arm.	Hit.
*ī	ī	ī	ī	ī	ī	y	i	ī	i
*ū	ū	ū	ū	ū	ū	ū	y	ū	u
*ī̄	αρα ρᾱ, ρη, ρω	ari, rā	ara(rā)		īr, ūr	īr, ūr			
*ū̄	αλα λᾱ, λη, λω	ali, lā	ala(lā)		īr, ūr	il̄, ūl̄			
*ī̄m̄	αμα, μᾱ	ami, mā	mā		ā(ām)?	im̄, ūm̄			
*ū̄	ανα, νᾱ	nā	nā		ā	im̄, ūm̄			

(8) 長母音から成る二重母音							
IE	—	*i	*u	*j	*r	*m	*n
Skr.		ai	au	ār	ār	ām	ān
Av.	*ē, *ō, *ā	āi	āu	ār	ār	Ꞥm	Ꞥn
Gr.	*ē	ηι			ηρ		ην
	*ō	ωι			ωρ		ων
	*ā	αι			αρ		αν

付 録 B

ギリシア文字の呼び方と発音

大	小	名前	発音
A	α	alpha	[a]
B	β	beta	[b]
Γ	γ	gamma	[g]
Δ	δ	delta	[d]
E	ε	epsilon	[e]
Z	ζ	zeta	[z]
H	η	eta	[e:]
Θ	θ	theta	['t]*
I	ι	iota	[i]
K	κ	kappa	[k]
Λ	λ	lambda	[l]
M	μ	m(y)u	[m]

大	小	名前	発音
N	ν	n(y)u	[n]
Ξ	ξ	xi	[ks]
O	ο	o mikron	[o]
Π	π	pi	[p]
P	ρ	rho	[r]
Σ	σ, c	sigma	[s]
T	τ	tau	[t]
Υ	υ	upsilon	[ju]
Φ	φ	phi	[f]
X	χ	chi	['k]*
Ψ	ψ	psi	[ps]
Ω	ω	o mega	[ɔ:]

*'t, 'k はそれぞれ [t] 及び [k] の有機音を表す。

†本書の校訂は次の通り。06.05.26 校訂, 07.01.07 一部差し替え校訂 0, 7.01.09, 校訂 07.4.23, 校訂 08.7.16, 最終校訂 08.7.29。

人とことば

—その関わりと研究のあゆみ

発行日 2013年1月20日 新訂

著者 山口 巖

発行者 中島悠子

発行所 ブックワークス響

〒176-0002 東京都練馬区桜台 1-2-10-201

TEL 03-6915-8567

頒 価 1,200円 (消費税込)

©Iwao Yamaguchi 2012 Printed in Japan

ISBN 978-4-9904850-4-7 C0080 ¥1142E